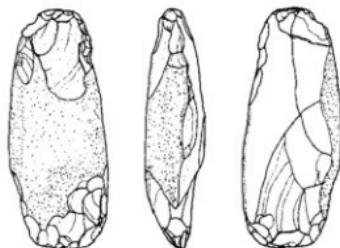


一般国道475号東海環状自動車道

宮山遺跡

発掘調査報告



1 9 9 9

三重県埋蔵文化財センター



序

南北に長い三重県は、その気候風土も所々で変われば、育まれてきた歴史も大きく異なる場合がございます。したがって三重県のいたる所で、その地域独特の文化が芽生えることもございます。そのことを如実に表してくれたのがこの度ご報告いたします宮山遺跡ではないかと思います。

宮山遺跡は、三重県でも最北端に近い鈴鹿山系の藤原岳の麓に位置し、古くから地元で貴重な遺跡であることが知られていましたが、この度の発掘調査により、弥生時代の石斧の製作遺跡であることが判明し、高い注目を集めました。

宮山遺跡の所在します員弁郡の「いなべ」は、「日本書紀」などにも登場します古代氏族の「猪名部」に通じ、木工の匠として活躍したといわれています。彼らの重要な仕事道具でもある斧が古く弥生時代に遡り、この地域で作られたのも縁なきこととは思えません。

こうした重要な成果が明らかになった宮山遺跡は、現状保存が困難なため記録保存というかたちになりましたが、わたくしどもに課せられた責務のひとつとして、その膨大な記録を整理して報告書として公開することであると考えています。今後、この成果が各方面で活用されることを切望いたします。

最後になりましたが、調査にあたり御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げます。そしてこの報告書が地域の歴史と文化に対する御理解の深まりの一助になることを願いますとともに、県民の皆様の文化財保護へのより一層の御理解と御協力を祈念いたします。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井興生

例　　言

1. 本書は、平成7年度に三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した一般国道475号東海環状自動車道建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査にかかる報告書のうち、宮山遺跡の報告書である。
2. 宮山遺跡は、三重県員弁郡大安町片桐に所在する。なお、本書では遺跡名を宮山遺跡とするが、同一名称をもつ他の遺跡と区別する場合には、片桐宮山遺跡とすることを薦める。
3. 調査にかかる費用は、建設省中部建設局の負担による。
4. 発掘調査は、次の体制で行った。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
A地区	小菅文裕
B地区	竹内英昭
C地区	竹内英昭・清水弘之
D地区	清水弘之・小菅文裕
E地区	小菅文裕

調査協力	東員町教育委員会
現場作業	社団法人中部建設協会
5. 当報告書の作成業務は、担当職員が行ったほか、以下の者の補助があった。また、遺構・遺物の写真は、清水弘之を中心に、竹内・小菅が撮影した。
筆谷実加代・宮本理美・藤田有紀・樋口　愛・橋　純子・石橋秀美・日紫喜勝重・長野恵子
6. 当報告書の執筆者は目次にその氏名を記したほか、とくに寄稿いただいたV-1については、文頭にも明記した。なお報告書全体の編集は森川幸雄の監修を受け、竹内が行った。
7. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略、所属は調査時)
八賀晋(三重大学人文学部)、岩野見司(東海学園女子短期大学)、田中欣治(津市立三重短期大学)、赤坂次郎・石黒立人・堀木真美子(愛知県埋蔵文化財センター)、佐藤由紀男(浜松市博物館)、森　勇一(愛知県立高等学校)、岩花季口・日下悠重(大安町郷土資料館)、松本　覚(藤原町立藤原中学校)、川戸達也・葛山拓也(四日市市教育委員会)、中井正幸・鈴木　元(大垣市教育委員会)
8. 宮山遺跡については、既に『一般国道475号 東海環状自動車道 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』(三重県埋蔵文化財センター 1996) および『東海環状自動車道発掘調査ニュース』No.5・6にその調査途中の概要を報告したが、本書をもって正式報告とする。
9. 本書で用いた地図および遺構実測図等は、国土調査法の第IV座標系を基準とし、方位の表示は座標北とする。当遺跡では磁北はN $6^{\circ} 30'$ W偏(昭和60年現在)となる。
10. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
9. 本書で用いた遺構表示略記号は、以下の通りである。
S B : 堀立柱建物 S H : 穫穴住居 S K : 土坑・土壙墓 S X : 墳墓 S Z : 平地住居・その他
12. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前 言	(竹内英昭)
1. 事業の概要	1
2. 調査の方法	1
3. 調査の経過	2
II. 位置と環境	(竹内英昭)
1. 地理的環境	3
2. 周辺の縄文～古墳時代の遺跡	3
III. 調査の成果	(竹内英昭)
1. A 地区の調査	
(1) 遺 構	7
(2) 遺 物	7
(3) 小 結	9
2. B 地区の調査	
(1) 遺 構	10
(2) 遺 物	10
(3) 小 結	14
3. C 地区の調査	
(1) 遺 構	18
(2) 遺 物	27
(3) 小 結	37
4. D 地区の調査	
(1) 遺 構	59
(2) 遺 物	59
(3) 小 結	59
5. E 地区の調査	
(1) 遺 構	62
(2) 遺 物	62
(3) 小 結	66
IV. 調査成果のまとめ	(竹内英昭)
1. 縄文土器について	70
2. 縄文晚期の平地住居について	70
3. 弥生中期の住居群の特徴と広がり	71
4. 磨製石斧の製作とムラの性格について	71
5. 弥生末期の墳墓について	73
参考 伊勢地方の磨製石斧の例	82
V. 考 察	
1. 石斧石材の分析	(堀木真美子) 89
2. 磨製石斧製作工程の復原とその流通	(竹内英昭) 96

挿 図 目 次

第1図 調査地区割図 (1:3,000)	1
第2図 遺跡分布図 (1:50,000)	4
第3図 宮山遺跡周辺地形図 (1:10,000)	5
第4図 遺構配置図 (1:1,000)	6
第5図 A地区遺構図 (1:300)	7
第6図 A地区出土遺物実測図〈1〉(12-13は1:2、14~17は1:3、他は1:4)	8
第7図 A地区出土遺物実測図〈2〉(1:3)	9
第8図 土器棺墓SK18実測図 (1:10)	10
第9図 B地区遺構図 (1:300)	11
第10図 住居跡SZ36実測図 (1:80)	13
第11図 壴穴住居跡SH1実測図 (1:50)	13
第12図 B地区出土遺物実測図〈1〉(1:4)	15
第13図 B地区出土遺物実測図〈2〉(1:4)	16
第14図 B地区出土遺物実測図〈3〉(1:3)	17
第15図 壴穴住居跡SH2実測図 (1:50)	18
第16図 C地区遺構図 (1:300)	19
第17図 壴穴住居跡SH4出土遺物 (1:4)	21
第18図 壴穴住居跡SH3・4実測図 (1:50)	21
第19図 壴穴住居跡SH5・6出土遺物 (1:4)	22
第20図 壴穴住居跡SH5・6実測図 (1:50)	22
第21図 壴穴住居跡SH7出土遺物 (1:4)	23
第22図 壴穴住居跡SH7実測図 (1:50)	23
第23図 壴穴住居跡SH8出土遺物 (1:4)	24
第24図 壴穴住居跡SH9出土遺物 (1:4)	24
第25図 壴穴住居跡SH8実測図 (1:50)	24
第26図 壴穴住居跡SH10出土遺物〈1〉(1:4)	25
第27図 壴穴住居跡SH9・10実測図 (1:50)	25
第28図 壴穴住居跡SH10出土遺物〈2〉(1:4)	26
第29図 壴穴住居跡SH11出土遺物 (1:4)	27
第30図 壴穴住居跡SH11実測図 (1:50)	27
第31図 壴穴住居跡SH12出土遺物 (1:4)	28
第32図 壴穴住居跡SH12実測図 (1:50)	28
第33図 壴穴住居跡SH13出土遺物 (1:4)	28
第34図 壴穴住居跡SH13実測図 (1:50)	29
第35図 掘立柱建物SB14（上）・SB15（下）実測図 (1:50)	30
第36図 掘立柱建物SB16（上）・SB17（下）実測図 (1:50)	31
第37図 C地区出土遺物実測図〈1〉(1:4)	33
第38図 C地区出土遺物実測図〈2〉(1:4)	34
第39図 C地区出土遺物実測図〈3〉(1:4)	35

第40図	C地区出土遺物実測図〈4〉(1:3)	36
第41図	C地区出土遺物実測図〈5〉(1:3)	38
第42図	C地区出土遺物実測図〈6〉(1:3)	39
第43図	C地区出土遺物実測図〈7〉(1:3)	40
第44図	C地区出土遺物実測図〈8〉(1:3)	41
第45図	C地区出土遺物実測図〈9〉(1:3)	42
第46図	C地区出土遺物実測図〈10〉(1:3)	43
第47図	C地区出土遺物実測図〈11〉(1:3)	44
第48図	C地区出土遺物実測図〈12〉(1:3)	45
第49図	C地区出土遺物実測図〈13〉(1:3)	46
第50図	C地区出土遺物実測図〈14〉(1:3)	47
第51図	C地区出土遺物実測図〈15〉(1:3)	48
第52図	C地区出土遺物実測図〈16〉(1:3)	49
第53図	C地区出土遺物実測図〈17〉(1:3)	50
第54図	C地区出土遺物実測図〈18〉(1:3)	51
第55図	C地区出土遺物実測図〈19〉(1:4)	52
第56図	C地区出土遺物実測図〈20〉(1:4)	53
第57図	C地区出土遺物実測図〈21〉(1:4)	54
第58図	C地区出土遺物実測図〈22〉(1:4)	55
第59図	C地区出土遺物実測図〈23〉(1:4)	56
第60図	C地区出土遺物実測図〈24〉(1:4)	57
第61図	C地区出土遺物実測図〈25〉(1:4)	58
第62図	D地区遺構図(1:300)	59
第63図	D地区出土遺物実測図〈1〉(1:3)	60
第64図	D地区出土遺物実測図〈2〉(1:3)	61
第65図	D地区出土遺物実測図〈3〉(1:4)	62
第66図	E地区遺構図(1:300)	63
第67図	方形周溝墓SX19実測図(1:100主体部は1:50)	65
第68図	方形周溝墓SX19出土遺物実測図(1:4)	66
第69図	前方後方形墳丘墓SX20実測図(1:300)	66
第70図	前方後方形墳丘墓SX20推定復元図(1:200)	67
第71図	前方後方形墳丘墓SX20出土遺物実測図(1:4)	67
第72図	E地区出土遺物実測図(1:4,381のみ1:2)	68
第73図	E地区ほか出土遺物実測図(1:3)	69
第74図	北勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)	83
第75図	北勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)	84
第76図	中勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)	85
第77図	中勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)	86
第78図	中勢地域出土の磨製石斧〈3〉(1:3)	87
第79図	中勢地域出土の磨製石斧〈4〉(1:3)	88
第80図	塙基性岩の分布域と磨製石斧出土遺跡	92
第81図	磨製石斧の製作工程図(1:6)	97

付 表 目 次

第1表 A地区土器観察表	74
第2表 B地区土器観察表	75
第3表 C地区土器観察表 (1)	76
第4表 C地区土器観察表 (2)	77
第5表 C地区土器観察表 (3)	78
第6表 D地区土器観察表 (1)	79
第7表 D地区土器観察表 (2)	80
第8表 E地区土器観察表	81
第9表 表面観察および比重測定結果	90
第10表 薄片観察結果	91
第11表 萤光X線による全岩化学組成	91

図 版 目 次

卷頭図版 宮山遺跡出土の磨製石斧	図版1 塩基性岩類偏光顯微鏡写真
図版2上 A地区全景	図版2下 A地区全景(南から)
図版3上 B地区全景	図版3下 B地区全景(北西から)
図版4上 B地区住居跡S Z36(南から)	図版4下 B地区住居跡S Z36鉢跡
図版5上 B地区住居跡群(南東から)	図版5下 B地区住居跡S Z38(南西から)
図版6上 B地区土器柱墓S K18(南から)	図版6下 B地区堅穴住居跡S H1(南西から)
図版7上 C地区全景	図版7下 C地区全景(北から)
図版8上 B・C地区を望む(南東から)	図版8下 C地区堅穴住居跡S H2(南東から)
図版9上 C地区堅穴住居跡S H3・4(北西から)	図版9下 C地区堅穴住居跡S H5・6(北西から)
図版10上 C地区堅穴住居跡S H7(北西から)	図版10下 C地区堅穴住居跡S H8(南東から)
図版11上 C地区堅穴住居跡S H9・10(北から)	図版11下 C地区堅穴住居跡S H11(東から)
図版12上 C地区堅穴住居跡S H12(北西から)	図版12下 C地区堅穴住居跡S H13(南西から)
図版13上 C地区掘立柱建物S B14(南東から)	図版13下 C地区掘立柱建物S B15(南西から)
図版14上 C地区掘立柱建物S B16(北東から)	図版14下 C地区住居跡S Z40(南東から)
図版15上 D地区全景	図版15下 D地区全景(南から)
図版16上 E地区遠景(西から)	図版16下 E地区全景
図版17上 E地区方形周溝墓S X19検出状況(東から)	図版17下 E地区方形周溝墓S X19(東から)
図版18上 E地区方形周溝墓S X19(西から)	図版18下 E地区方形周溝墓S X19周溝内土器出土状況
図版19上 E地区前方後方形墳丘墓S X20(南西から)	図版19下 E地区前方後方形墳丘墓S X20(西から)
図版20 A地区出土遺物	図版21 B地区出土遺物(1)
図版22 B地区出土遺物(2)	図版23 C地区出土遺物(1)
図版24 C地区出土遺物(2)	図版25 C地区出土遺物(3)
図版26 C地区出土遺物(4)	図版27 C地区出土遺物(5-1)
図版28 C地区出土遺物(5-2)	図版29 C地区出土遺物(6-1)
図版30 C地区出土遺物(6-2)	図版31 C地区出土遺物(7-1)

I. 前 言

1. 事業の概要

一般国道475号東海環状自動車道（北勢～四日市）建設工事事業に係る埋蔵文化財発掘調査業務の全体に関する経過と調査体制については、『椎現坂遺跡・東村城跡』の発掘調査報告書で詳述する。したがって、当報告書では全体に関する事項は割愛する。

2. 調査の方法

宮山遺跡は、員弁川右岸の河岸段丘上に立地し、調査前の地目は林であったが、かつては畑に利用されたこと也有ったようで、人頭大ほどの礫により各所有地を区切る地境としていたようである。

調査対象となった宮山遺跡は、道路延長でおよそ600mにも及ぶことから、平成6年度に試掘調査を行い、遺構あるいは遺物の認められた箇所を中心に調査地の設定をおこなったが、未買収の用地を含むため、試掘の及ばなかった箇所もあり、全体の調査予定面積を確定することはできなかった。

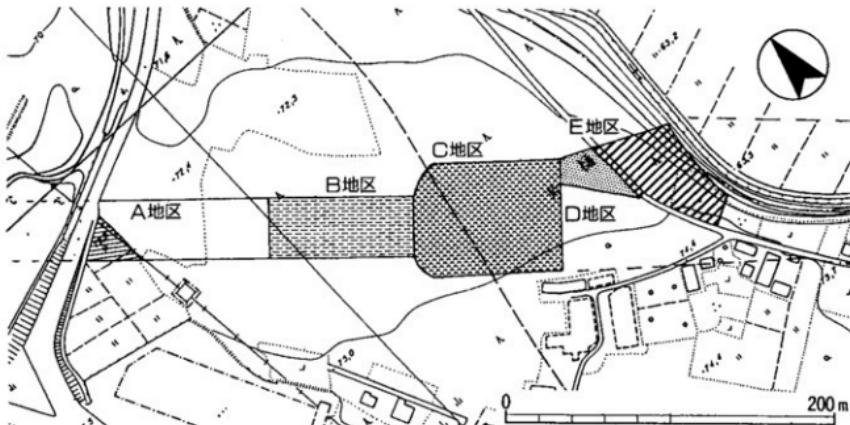
試掘結果を受け、平成7年度は調査区をA～E地区の5つの小地区に分け発掘調査を実施し、他の地区は用地買収が完了次第、試掘調査を実施し、次年度以降、本調査を進めることとした。

A地区は、他の調査区のように連続しておらず、飛地的な位置にあるが、本来宮山遺跡とは別の遺跡と認識した方が良いかもしれないが、事業地内遺跡としては同一遺跡との扱いにした。

調査はまず木立の伐採から始め、B地区およびD地区をバックフォーによって表土の掘削と可能な限りの抜根を行った。その後、B・D地区の終了後は再び排土を戻し、C地区ならびにA地区、E地区へと調査をすすめた。調査にあたり調査区をあえて分断した状態で連続させなかつたのは、排土の仮置き場に苦慮したからである。

B地区とC地区には、機材や排土の運搬、および他調査区への通路とするため、調査区の周縁に沿って、作業用道路を設けたが、これについては、調査の最終段階近くで撤去した。また、E地区については、遺構の一部が現道下にも及ぶことが判明したため、現道の迂回路を設定し、該当部分についての調査を行った。

各調査区は、国土座標に合わせて4m間隔に地区杭を設置した。その際、座標値の100m単位を大地区として区切り、その中を地区杭によって25分割されたものを小地区とした。各大地区毎に北から南へA



第1図 調査地区割図 (1:3,000)

～Y、西から東へ1～25の記号を与え、大地区の名称と組み合わせて表示した。

調査にあたっては、柱穴（ピット）については、各小地区ごとに通し番号を与えた他、住居跡等の遺構については、各調査区ごとに通し番号をつけ、現地調査および遺物整理に活用した。しかし、本報告にあたっては、すべての遺構番号を反故にし、新たに遺跡全体を通しての連番として再編成した。従って、宮山遺跡の各遺構番号は、本報告書をもって正式なものとする。

3. 調査の経過

調査はまずB地区とD地区を並行して実施した。B地区では全体的に風倒木の痕跡と考えられる黒色土を埋土とする不定形な土坑状の落ち込みが多かったが、埋土中に主として縄文晩期の土器を包含していることから、一部については遺物の採集を目的として掘削も行った。

表土掘削後、B地区のほぼ全体から円形の小柱穴が多数検出され始め、掘立柱建物を想定して柱及びの検討を始めたが、柱穴の配置からは方形建物よりも円形建物と考え方が妥当という見解に達し、縄文晩期を中心とした平地住居を想定するに至った。

D地区は遺物が出土するものの、調査区内は風倒木に加え、「クロクワ」と呼ばれる天地返しが行われている箇所が広く占め、このため遺構の検出がきわめて困難な状態であった。

B・D地区調査終了後、8月26日に現地説明会を実施した。

B・D地区を埋め戻した後、C地区およびA地区、そしてE地区の調査を開始した。C地区は表土の堆積も浅く、遺構も一部削平を受けていると考えられたため、重機による表土掘削は最小限に留めた。

調査区内の北東寄りの箇所に竪穴住居跡などの遺構が集中しており、幸いその箇所には風倒木は少なく、遺構の検出は比較的容易であった。

C地区的表土中にも石斧およびそれに関連する遺物が散布しており、極力その収集に努めた。

他と調査区の立地が異なるA地区は、遺構は不明ながらも、縄文時代以降の各時代の遺物が出土し、付近に別の遺跡が存在する可能性が考えられる。

E地区は、表土掘削前から調査区内に古墳状の高まりが認められたため、その部分については表土の除去も人力で行った。

古墳状の高まりは、その後古墳ではなく弥生時代後期末の方形周溝墓であることが判明し、さらに調査区内の別の位置から検出された土坑についても前方後方方形周溝墓の周溝の一部である可能性があげられるに至った。

ただ、遺構の遺存状態は非常に悪いため、周溝というより連續する土坑状の深い窪み程度にしか確認できなかつたが、後方部の一部は次年度以降の調査区へと延びる可能性もあり、課題として残る。

調査期間中は、調査指導員として浜松市博物館の佐藤由紀男氏、財団法人愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏および石黒立人氏を招き、佐藤氏には主としてB地区的遺構・遺物およびC地区的遺物について、赤塚氏には主としてE地区的墳丘墓について、そして石黒氏にはC地区的遺構・遺物についてそれぞれ指導および助言を賜った。

A・C・E地区的調査終了後、11月25日に再度現地説明会を実施した。

各調査区の面積および調査期間は、おおよそA地区が530m²、B地区が2,600m²、C地区が5,600m²、D地区が650m²、E地区が2,500m²で、B・D地区が平成7年5月8日～7月31日にかけて、A・C・E地区を同年9月4日～平成8年1月18日にかけて調査を実施した。

II. 位置と環境

1. 地理的環境

遺跡が所在する三重県北部は、北勢地域とも呼ばれ、木曽三川や伊勢湾を隔てて愛知県と、養老山系を隔てて岐阜県と、さらに鈴鹿山系を隔てて滋賀県と結ばれる地域である。

三重県北部でも鈴鹿山系の一つ藤原岳あるいは竜ヶ岳山麓部に位置する宮山遺跡周辺は、山間部を除けば県内でも屈指の降雪地帯であり、山地から吹き降ろす冬季の季節風も冷たい。

鈴鹿山系の烏帽子岳や三国岳から端を発する員弁川とその支流は、この地域の平野の発達に大いに貢献し、北勢北部地域を横断し、伊勢湾に注いでいる。

宮山遺跡はこの員弁川右岸の段丘上に立地するが、低地部との比高が10m以上に至り、急峻な段丘崖を形成している。また、遺跡の北側は、現況では徐々に傾斜し、員弁川支流の青川によって画される。

この青川は、鈴鹿山系から端を発する中小河川で、山地部を抜けてから扇状地を発達させ、奥村や麓村、中山などの現集落沿いに流路をとり、麻生田の段丘下付近で員弁川と合流する。

2. 周辺の縄文～古墳時代の遺跡

宮山遺跡（1）周辺では従来、縄文～古墳時代の遺跡の存在がいくつか知られていたが、発掘調査された例は少ない。

遺跡の存在については昭和前半を中心とした鈴木敏雄氏や地元の員弁高校郷土研究部による精力的な遺物採集による成果に負うところが大きい。

宮山遺跡と同じ青川流域には、奥村遺跡（10）や中山遺跡（11）があり、磨製石斧などの石器や弥生土器などが採集されている。また宮山遺跡自体も、以前から縄文時代の遺跡として知られており、とくに今回の調査区の東側にあたる「团子の宮跡」と呼ばれる地点は特に遺物が集中して採集できる所として注目されており、大安町片楠に所在する火神社の神宝とされている石劍・石棒・御物石器は、ここか

ら出土したといわれている。

員弁川右岸の低地部に張り出す微高地に立地する北勢町瀬木の川向遺跡（8）では、平成5年に発掘調査され、縄文時代中～後期を中心とする遺構・遺物が出土した。

青川流域の南、宇賀川流域にも下小原遺跡（15）、野々田遺跡（13）、照光寺遺跡などがやはり縄文～弥生時代の遺物が採集されている。とくに野々田遺跡や照光寺遺跡からは、縄文早期の押型文土器が含まれ、前期に属する北白川下層式の土器も多く認められる。

同様に昭和26年に名古屋大学によって調査された中大野遺跡（16）でも、北白川下層式の土器が出土している。また宮山遺跡の北方、員弁川を遡った北勢町治田外面には平成6年度に発掘調査された権現坂遺跡（5）から、縄文晚期の土器棺墓などがみつかった他、石劍等も出土した。

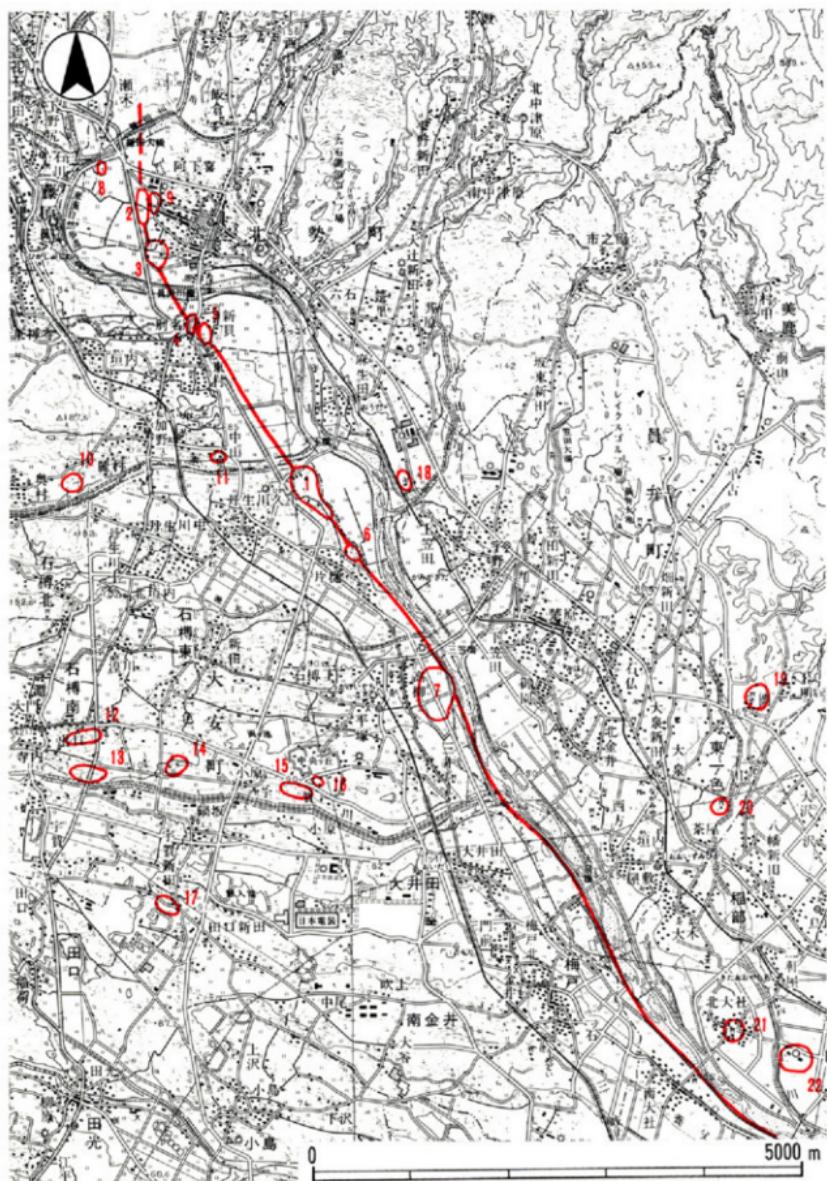
また宮山遺跡の南東、同じ段丘上に立地する大久保城跡でも、乳棒状の磨製石斧が出土しているほか、すでに土取りで全壊しているが、同じ東海環状自動車道の路線内に所在した高御遺跡（7）からは、チャート片が採集されている。

さらに員弁川を挟んだ対岸の段丘上に位置する覚正垣内遺跡（3）でも、縄文後期初頭の中津式期の堅穴住居跡を含めた遺構・遺物が発掘調査され、さらに員弁川を下った東員町北小社の山田遺跡でも、縄文晚期の土器棺墓が確認されている。

弥生時代の遺跡はこれまで概して当地域周辺では知られていなかった。東村城跡（4）から前期の土器が出土したことから、当地域にも遠賀川文化が波及していたことが判明した。

また、員弁町東一色の大谷・奥田遺跡（20）では、昭和60～61年にかけて発掘調査され、弥生中期の堅穴住居跡が確認されている。さらに後期には東村城跡や川向遺跡で遺物の出土が知られている。

古墳時代の遺跡としては、宮山遺跡とは員弁川とその氾濫原である沖積地を挟んだ台地部に、全長43mの前方後方墳の1号墳を中心とした麻績塚古墳群



第2図 遺跡分布図 (1:50,000)

(18) が所在する。現状では 2 基のみだが、周辺は開発が進んでいるため、当初はさらに多くの数にのぼるものと思われる。

麻績塚古墳群から員弁川を下った東員町北小社の猪名部神社古墳群(21)の 1 号墳も全長 30m 翼の前方後円墳とされているが、麻績塚古墳群の例からすると、前方後方墳の可能性も捨てきれない。

北勢町阿下喜の大西神社古墳群(9)は、現在の大西神社の敷地内に所在し、現在では 1 号墳および 2 号墳のみがかろうじて墳丘の高まりを残している。

昭和 4 年頃の道路改修工事により、横穴式石室が露呈し、鉄刀や玉類、須恵器などが出土している。

員弁川左岸の員弁町岡の岡古墳群(19)では、前方後円墳と推定される 1 号墳を含む 3 基の古墳が分布しており、横穴式石室を埋葬施設とする 3 号墳から 6 世紀前半に相当する須恵器類が出土している。

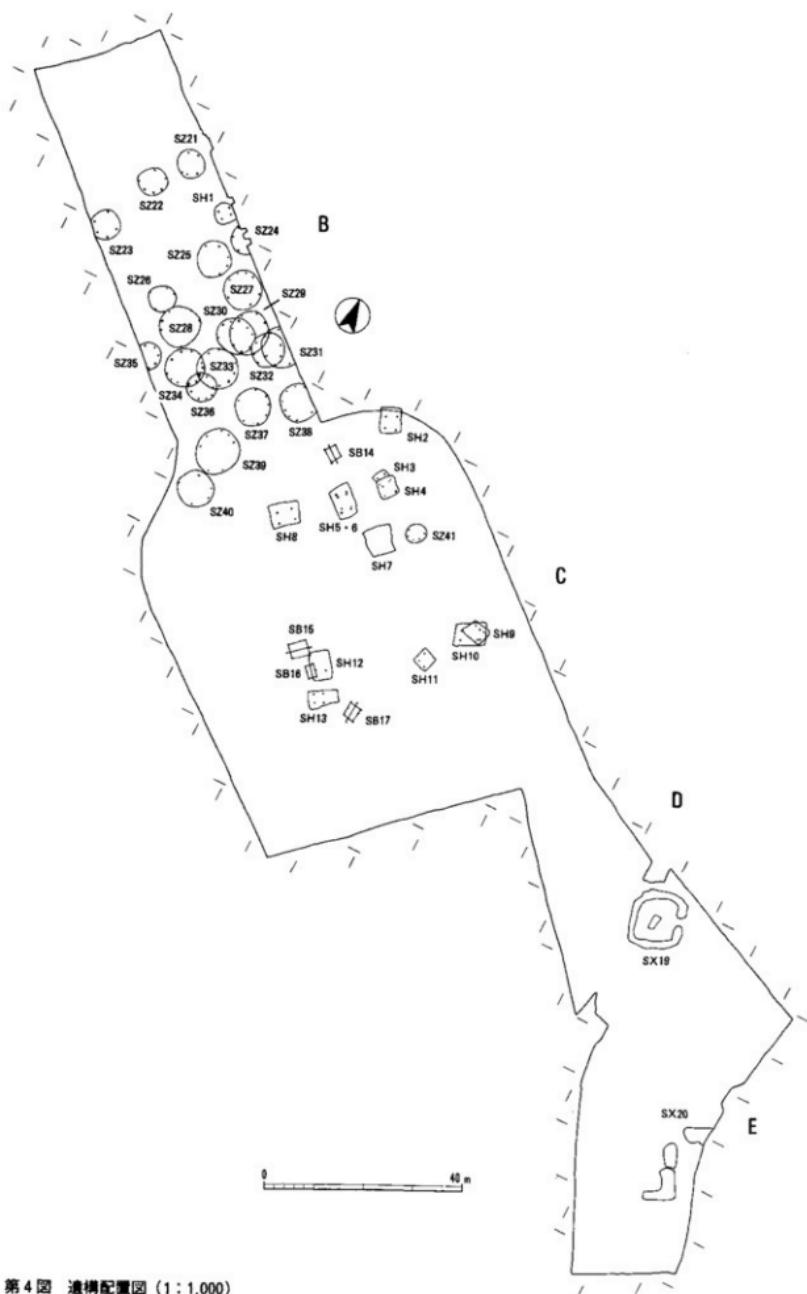
また、宮山遺跡の南方、大安町石樽東でも下小原古墳群(15)と呼ばれる 18 基以上からなる小円墳群が存在する。一部が発掘調査され、横穴式石室を主体部とする 7 世紀前半頃の群集墳と考えられている。

下小原古墳群が所在する宇賀川沿いには、南林古墳群(12)、上小原古墳群(14)、宇賀新田古墳群(17)など、十数基程度を単位とする小古墳群が点在する。

古墳時代の集落遺跡については、北勢町阿下喜の上惣作遺跡(2)では古墳時代前期や 7 世紀代に下る堅穴住居跡や掘立柱建物がみつかっているが、周辺では他に明確なものが少なく、その実態はまだ不明な点が多い。



第 3 図 宮山遺跡周辺地形図 (1 : 10,000)



第4図 造構配置図 (1:1,000)

III. 調査の成果

1. A地区の調査

(1) 遺構

A地区は、他の調査区とはやや位置が離れ、青川右岸の堤防沿いにあたり、調査前は水田および畑地であった。

調査区内の土層は、耕作土下には砂質土の堆積が基本で、段丘礫層は地山とした無遺物層にも認められず、A地区西側から延びる扇状地性の地形を呈していると考えられる。

遺構は溝状のものが南北方向に延びることが確認されたが、断面観察からは耕土下の遺物包含層の上面から掘り込まれており、時代的には近・現代のものと判断される。出土遺物もみられなかった。

その他、ピットあるいは土坑状の落ち込みが検出されたが、出土遺物もなく、遺構として判断できるものかは定かでない。

(2) 遺物

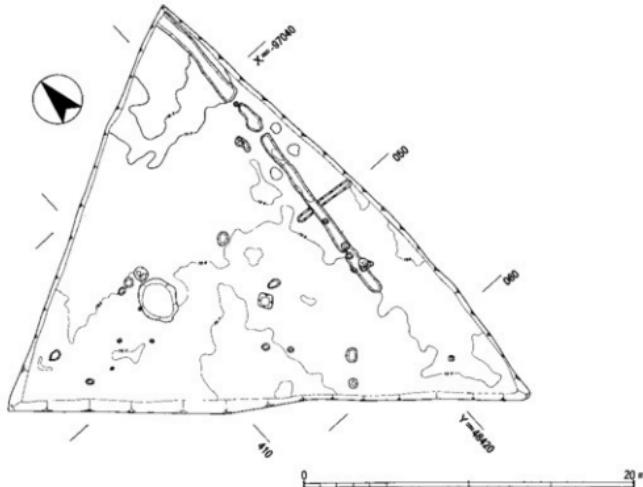
出土した遺物はすべて包含層からで、遺構に明確に伴うものはない。弥生土器を中心に、若干の縄文土器、土師器などの土器類が出土したほか、磨製石斧、敲石などの石製品および錢貨が出土した。

縄文土器（15）は、いわゆる縄文後期の磨消縄文をもつ深鉢形土器片である。口縁部には山形の突起部が認められる。

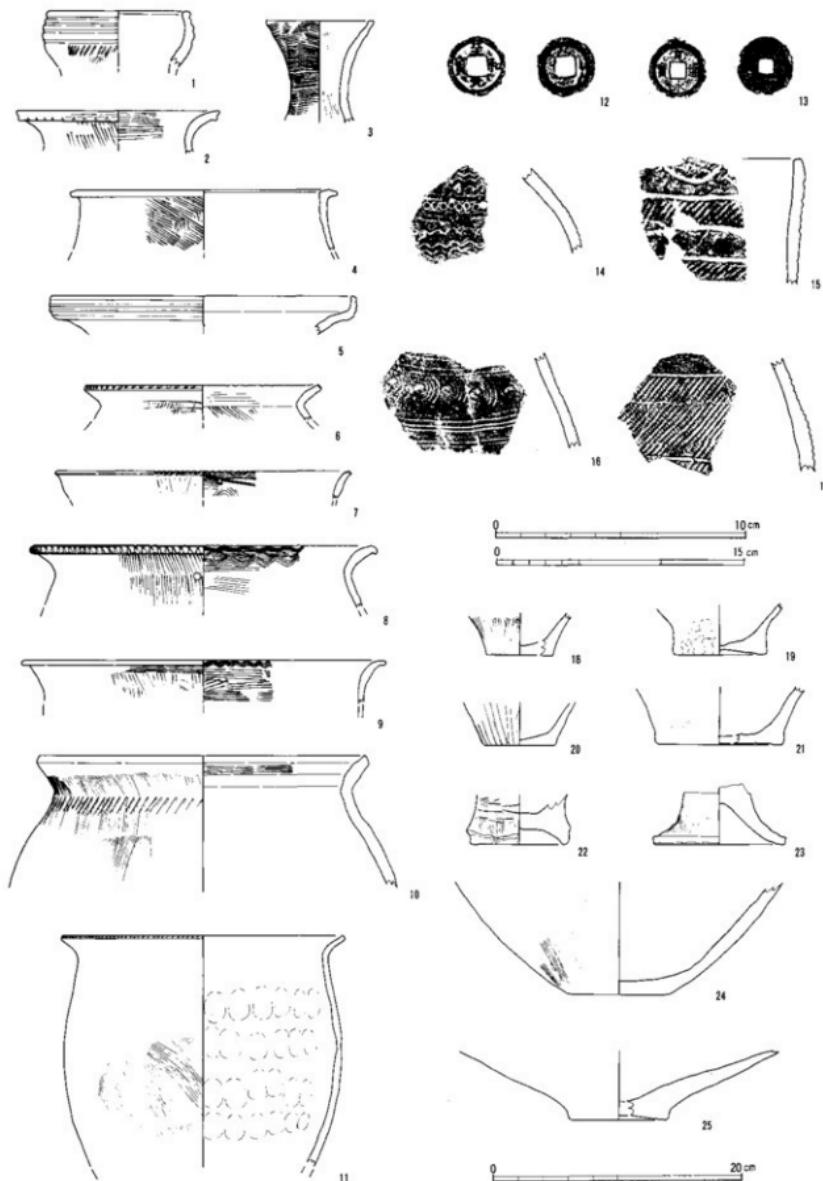
弥生土器（1~11・14・16~25）のうち、（1）は袋状口縁をなす細頸密形土器（以下、煩雑を避けるため「形土器」の表現は省略する）で、口縁部外面に凹線文が巡らされている。（3）は、外反して開く細頸壺で、不連続な直線文を外面に巡らす。多気町花ノ木遺跡SK23などの類例から、中期中葉でも前半のものと思われる。

（5）も受口状口縁をなす細頸壺で、口縁部外面には凹線文が巡る。（2・5）は口縁部外面の凹線文を指標とすれば中期後葉に属するものであろう。

（14・16・17）はいずれも壺の肩部の破片であるが、（17）は沈線で画された縄文帯をもつ。中期中葉でも



第5図 A地区遺構図 (1:300)



第6図 A地区出土遺物実測図〈1〉 (12-13は1:2、14~17は1:3、他は1:4)

前半段階に相当するものである。

壺(2・4・6~11)は、いずれも口縁部が外反し、外面はハケメ調整するものである。(7~9)は、口縁部内面にハケ原体による波状文を巡らす。

(18~25)はいずれも底部片で、(23)は壺あるいは鉢類の脚台とみられ、(22)もあげ底状となり、外面に剝離痕が認められることから、脚台部となる可能性がある。

磨製石斧(26)は、両刃で全体を丁寧に研磨されている。側縁に面をもたないことから、弥生石斧と考えられるが、石斧の横断面形は扁平に近く、いわゆる「大型蛤刃」の形態をとらない。刃部には両面に使用痕が認められる。

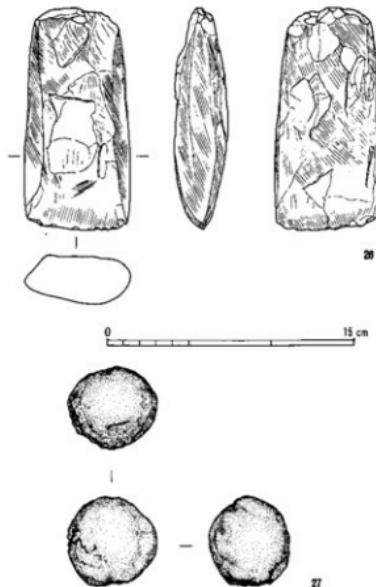
蔽石(27)は、球形に摩滅したもので、石斧等の製作のための工具と推定される。

錢貨(12~13)は、(12)が「至和元寶」で初鑄年代が至和元年(1054年)とされる北宋銭である。銅銭で字体は真書である。また、(13)は江戸時代の「寛

永通寶」で、字体は真書である。

(3) 小 結

A地区では弥生土器を中心とした遺物を含む包含層は認められたものの、同時代の遺構は確認することができなかった。従って遺物は、付近からの流れ込みと思われ、そのうち弥生土器は中期中葉から中期後葉にかけてのものである。宮山遺跡のなかでも縁辺部か、あるいはA地区の西側に別の遺跡が存在することも予想される。



第7図 A地区出土遺物実測図〈2〉(1:3)

2. B地区の調査

(1) 遺構

B地区はA地区の南に位置し、C地区とは連続するもので、調査の都合上、便宜的に両地区を分けたものであるが、後述するようにほぼ遺構の性格もC地区とは異なる様相をみせる。

B地区は河岸段丘面から青川に向かって傾斜する斜面の一部を含む。遺構・遺物は段丘面である南半ほど多くみられ、下方に傾斜する北半には少ない。

調査前の地目は山林で、北半は畠地にも利用されていたようであり、調査区を横切って延びる「猪土居」が存在した。「猪土居」は石垣と土手を組み合わせたもので、猪による農作物の被害を防ぐもので、宮山遺跡の周辺地域でも他に数箇所で認められるようである。

また、B地区的調査区外になるが、南に隣接して北勢地域に特徴的な灌漑用の横掘り井戸である「マンボ」が存在することも判明した。

B地区的遺構としては、縄文晩期の土器棺墓、弥

生中期の竪穴住居跡、そして多数のピット群が検出された。また、遺物が出土するものの、明確な土坑にならないものは、「風倒木」によるものと判断し、遺構としては扱わなかった。

土器棺墓S X 18 B地区的南東部で検出された。土器棺は、上面の一部が破壊されていたが、大木の根に守られていたようで、比較的良好な残存状態であった。口縁部を若干上方に向ける単棺形態をとるもので、別の個体の土器片で口縁部を閉塞していた。

これに対し、墓壙の搅乱は著しく、底面の一部が痕跡程度確認されたに過ぎない。残存した墓壙の規模は、長軸方向0.45m、短軸方向0.3m、深さ0.1mほどである。

住居跡S Z 21~39 B地区的南半を中心に多数の柱穴群が検出された。出土遺物の伴うものはごく限られているため、時期を特定することは遺物の面からは難しいが、柱穴群の配列を考えた場合、環状あるいは多角形の平面形を復原するのが適当と思われる。

これらを遺構として認識すると、その性格として最も妥当なものは平地式構造の住居跡であり、実際S Z 37は、ほぼ中央付近に炉跡と考えられる焼土が伴う。

ただ、炉跡はこれ1基しか認められず、他の住居跡には伴わない。また、柱穴の配列も規則的とは言い難く、主観的な判断となる危惧も感じる。確実に住居跡と判断できる類例の乏しい現状では、可能性に留めておきたいが、いわゆる平地式住居跡と考えた。

これらは大きいもので径8m、小さいもので径5mでやや不整形のものも含めて、環状あるいは多角形の柱配列を基調とするものである。

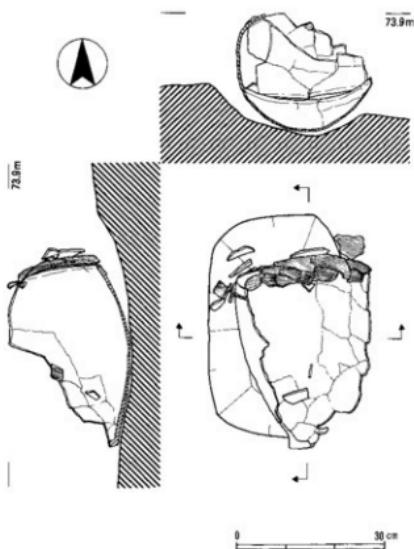
竪穴住居跡S H 1 B地区で1棟のみ確認した。平面形は円形となるものと思われ、径4.3m、深さ0.15mを有する。

ほぼ中央に炉跡があり、周囲に拳大ほどの礫が配されており、炉を開んでいた可能性が大きい。

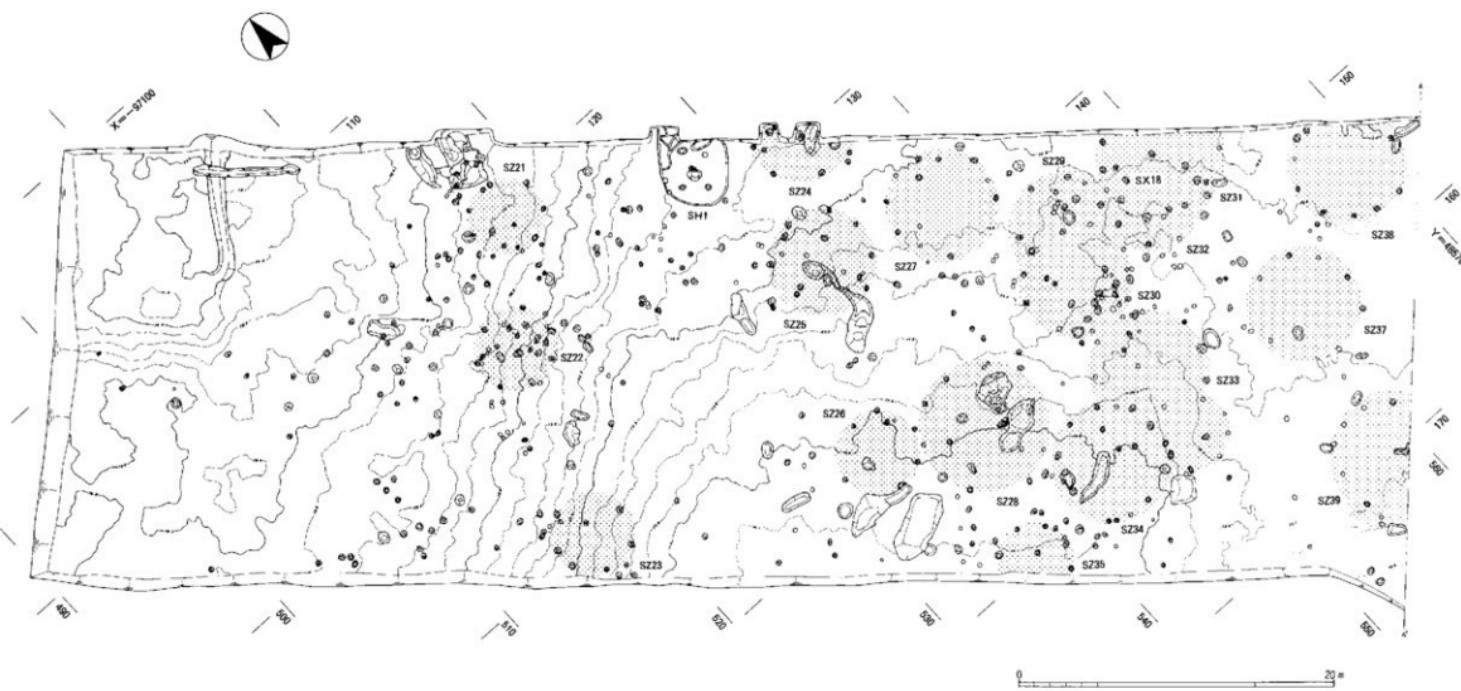
東寄りには竪穴住居に伴う土坑が確認され、弥生土器片が出土している。

(2) 遺物

B地区からは全体的に縄文晩期の土器片と若干の



第8図 土器棺墓SK 18実測図(1:10)



第9図 B地区遺構図 (1:300)

弥生土器片が出土しているが、それより時代の下る遺物はまったく出土していない。

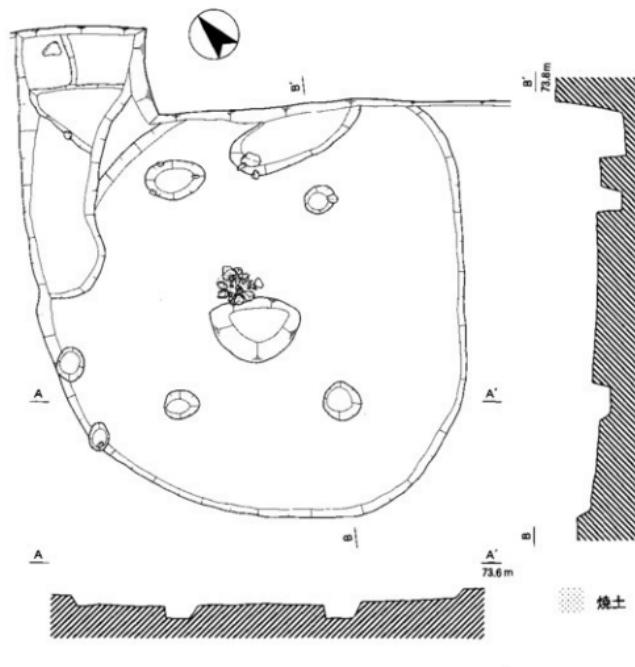
遺構出土のものとして、土器棺墓S X18の縄文土器深鉢（28-29）、竪穴住居跡SH01の（42-44）などがある。

（28）は土器棺の蓋に利用していた深鉢で、体部下半を欠くが砲弾形を呈するものと思われる。口径34.5cmをはかり、外面は粗い二枚貝による条痕を施し、口縁端部を肥厚させ、内傾する面をもつ。内面は丁寧にナデ調整されている。いわゆる櫻式に併行する条痕文系の土器と思われる。

（29）は口径29.4cm、器高36.4cmの深鉢で、口縁部からやや下がった位置に素文の突帯を一条貼り付ける。底部は平底で、口縁部と体部の境にはとくに段ないし沈線などは認められないが、口縁部は条痕文が残されるのに対し、体部はケズリ調整が施され



第10図 住居跡SH236実測図 (1:80)



第11図 竪穴住居跡SH1実測図 (1:50)

ている。突帯文系土器としては最終末に属するものである。

豎穴住居跡 S H 1 出土の（42-44）はいずれも甕口縁部片で、（42）は住居埋土より、（44）は住居内の土坑から出土した。

（42）は口唇部にキザミメを施すのに対し、（44）は口唇部に 2 個単位の押圧を加え、山形状の突起としている。体部上半は外面にどちらも直線文をめぐらしていることが確認できる。

その他 B 地区からは縄文土器（30～32・45～50・52・53・56～65）、弥生土器（33～41・43・51・54）が出土している。

（30・31・46・47・53）は縄文晚期の突帯文系土器で、いずれも深鉢あるいは変容壺と呼ばれるものである。うち、（30・31）は口縁部から下がった位置に幅広の O 字状の押圧を加えた突帯を一条巡らすもので、突帯下は条痕を施す。

（53）は肩部片に同様の突帯を巡らすことから、二条突帯文の深鉢となると思われる。

また（46・47）は、細かく押し引いた痕跡的な突帯を巡らすもので、突帯文系土器のなかでも最終末の様相を示すものである。

（49）は口縁部下に二条の幅広の沈線を施すもので、細片であるため詳細は不明であるが、浮線文系土器と考えても良いものである。

（32・50）は口縁部が内弯気味に開く無文の深鉢片である。

（52）は二条単位の沈線間に縄文を施す縄文後期前葉の福田 K II 式あるいはその前段階の中津式に相当するもので、後期の土器はこれ 1 点のみである。

（48・56～65）はいわゆる条痕文系土器で、整玉式併行のものが多いと考えられるが、（56）は山形に重なる条痕文を施すもので、水神平式に併行する可能性がある。

弥生土器（33～41・43・51・54）のうち、広口壺（38）は口縁部内面に横位の条痕を施す。類例を求めるに、津市四ツ野 B 遺跡などにみられ、前期の遠賀川系の広口壺の器形をもちながらその器面調整に条痕を施すという、いわば東西折衷的な土器となる可能性が大きい。

（40・41）は口縁端部が肥厚し、口唇部の上端と下

端にキザミメをめぐらすもので、（41）からすると体部上半には櫛描直線文を施すとみられる。

（34）は台付甕の脚台部とみられる。脚台は低く、八の字に開く。

石鐵（55）は、宮山遺跡の調査区全体を通じて唯一出土したもので、基部の一部を欠くため、全形は不明である。サヌカイト製と考えられる。

（3）小 結

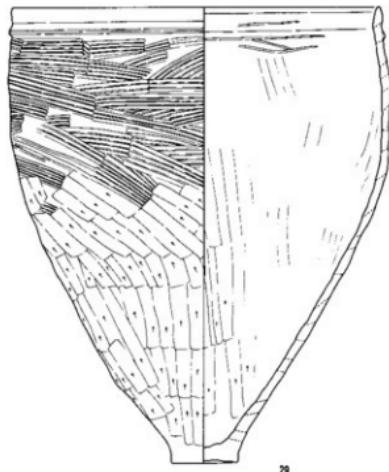
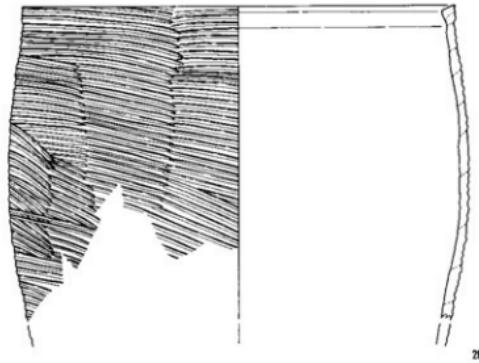
B 地区は、弥生時代中期の豎穴住居跡が 1 棟、縄文時代晚期の土器棺墓が 1 基検出されたほか、住居跡となると考えられる柱穴群のまとまりを確認した。住居跡と判断する確証はないが、S Z 36 は中央付近に炉跡と考えられる焼土坑が伴うとみられる点や、豎穴状の掘り込みがみられず柱配列が円弧を描くことを積極的に評価すれば、平地式の簡易的な住居群と考えておきたい。

またその時期についても、柱穴からの出土遺物は少ないものの、包含層を含めた B 地区全体で、縄文晩期末と弥生前～中期の遺物に限られるため、住居跡群もこの時期に所属する可能性が大きい。

土器棺墓 S X 18 は、単槽形式をとり口縁部をやや上に傾けた横位に安置したものである。棺に使用した土器は、外面に煤痕のある深鉢形土器で、別個体の土器で口縁部を蓋している。

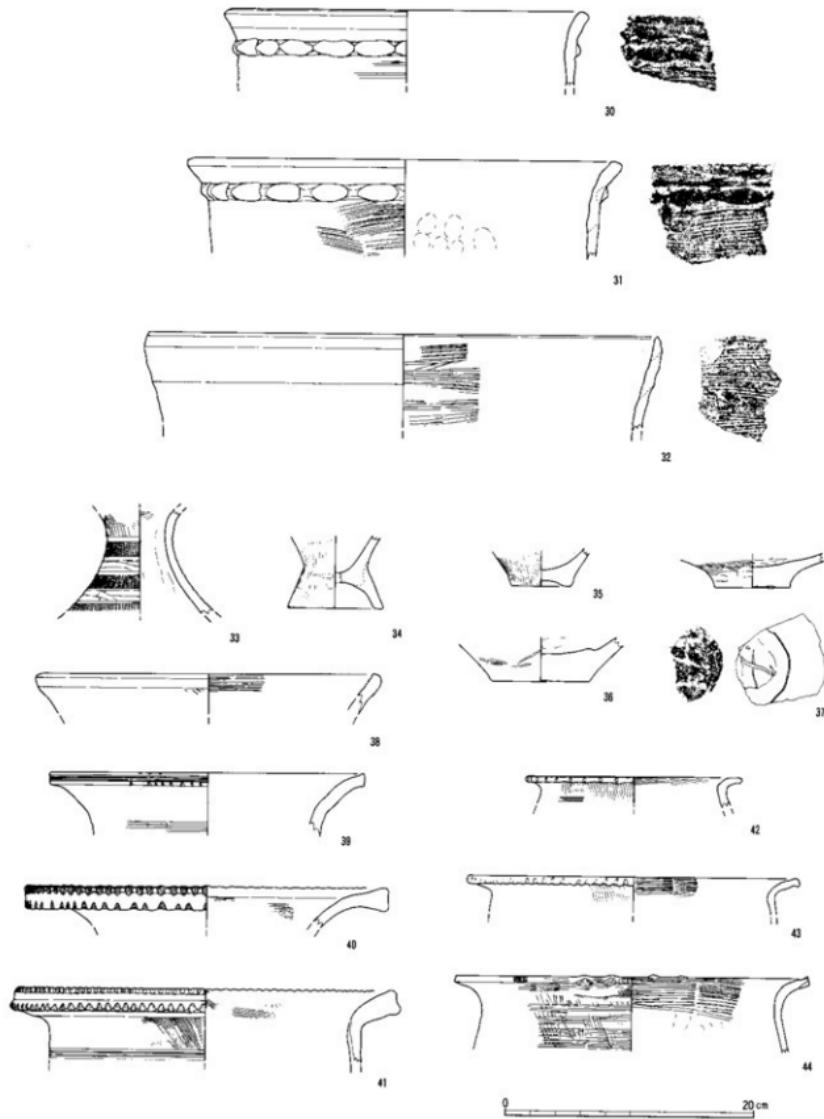
弥生時代の遺構としては豎穴住居跡 S H 1 がある。弥生時代の豎穴住居跡は C 地区にも存在するが、S H 1 はこれらとは異なり、住居の平面形が円形となる。出土遺物から弥生時代中期前半に遡る可能性をもつ。

以上、B 地区は調査区の範囲内でみる限り、縄文時代晩期末の居住圏であったと考えられるが、豎穴住居は確認されず、簡易的な構造と考えられる平地式の住居となる可能性の大きい柱穴群が多数検出された。炉跡は S Z 37 のみでみられたが、焼土も薄く、長期間使用されたとは考え難い。従ってこれらが住居跡群としても、一時的あるいは季節的な利用であったことを推定したい。

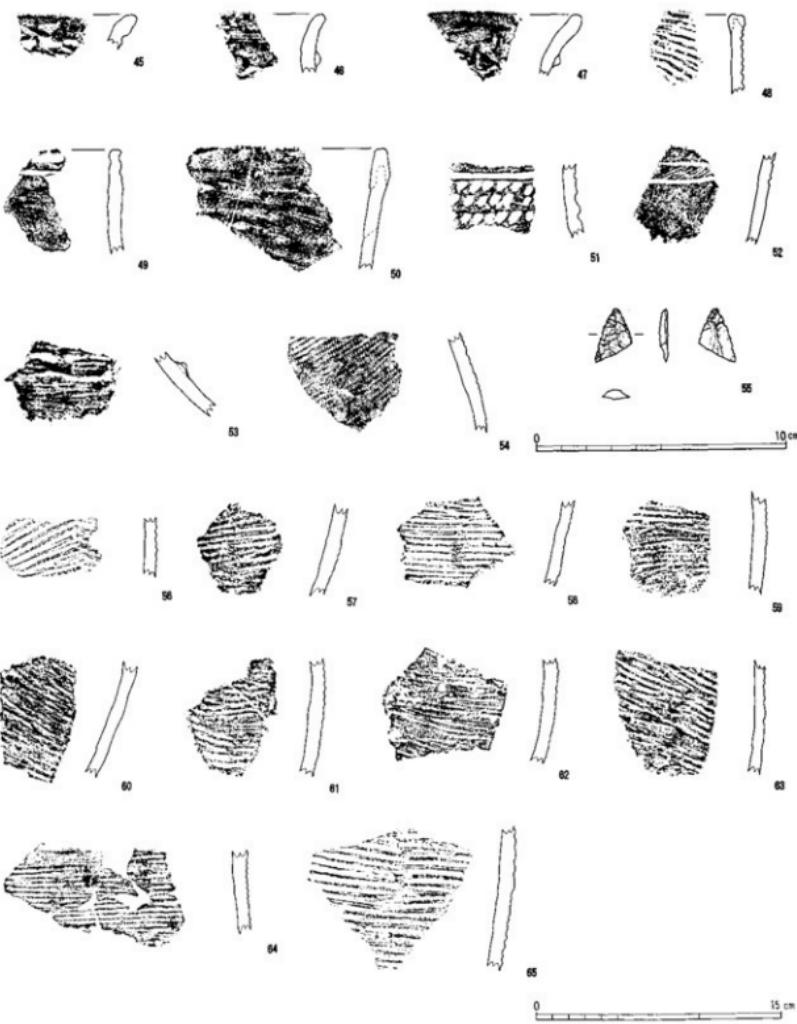


0 20 cm

第12図 B地区出土遺物実測図 〈1〉 (1:4)



第13図 B地区出土遺物実測図〈2〉(1:4)



第14図 B地区出土遺物実測図(3)(1:3)

3. C地区の調査

(1) 遺構

C地区は段丘上に立地し、今回の調査区のなかでは最も面積が広い。調査前の地目は植林地であったが、さらに以前は畑地であったこともあると伝えられている。そのためか、地塊を示すとみられる石列がほぼ字切図の通りに現地で確認することができた。

調査区全体を通じて、表土直下はすぐに地山であり、表土層も浅いところでは数cmしか堆積しておらず、このため遺構面は本来より相当削平を受けているとを考えられる。

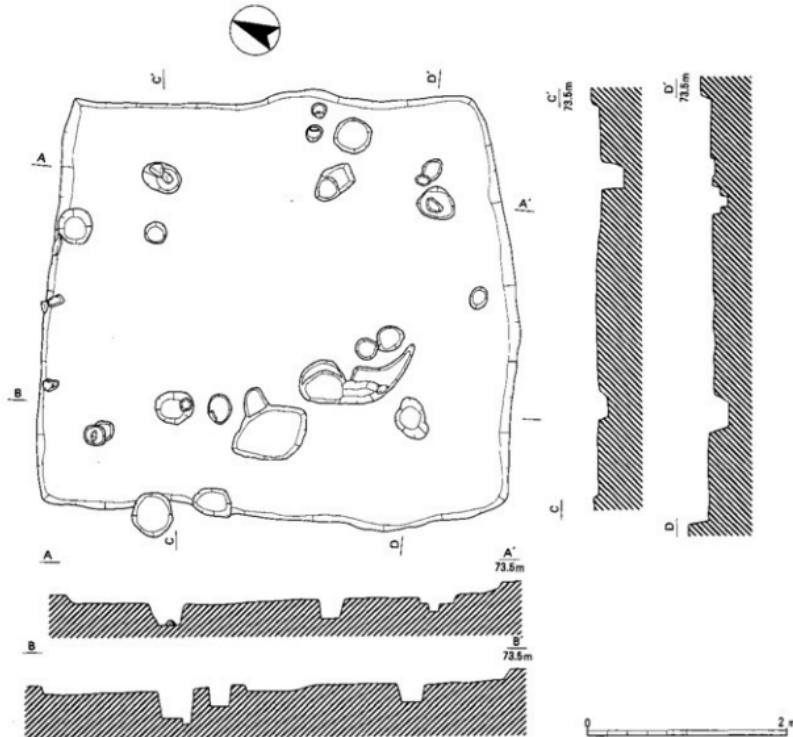
遺構は弥生時代の竪穴住居跡12棟、掘立柱建物4棟、B地区でみられたような平地式の住居跡2棟が

検出された。また、出土遺物もほとんどが弥生時代に限られるが、調査区の南西方でわずかに山茶碗が出土している。C地区ではB地区でみられたような縄文晩期の遺物もほとんどみられず、従って当地区で出土した石製品は弥生時代に属する可能性が大きいと考えられる。

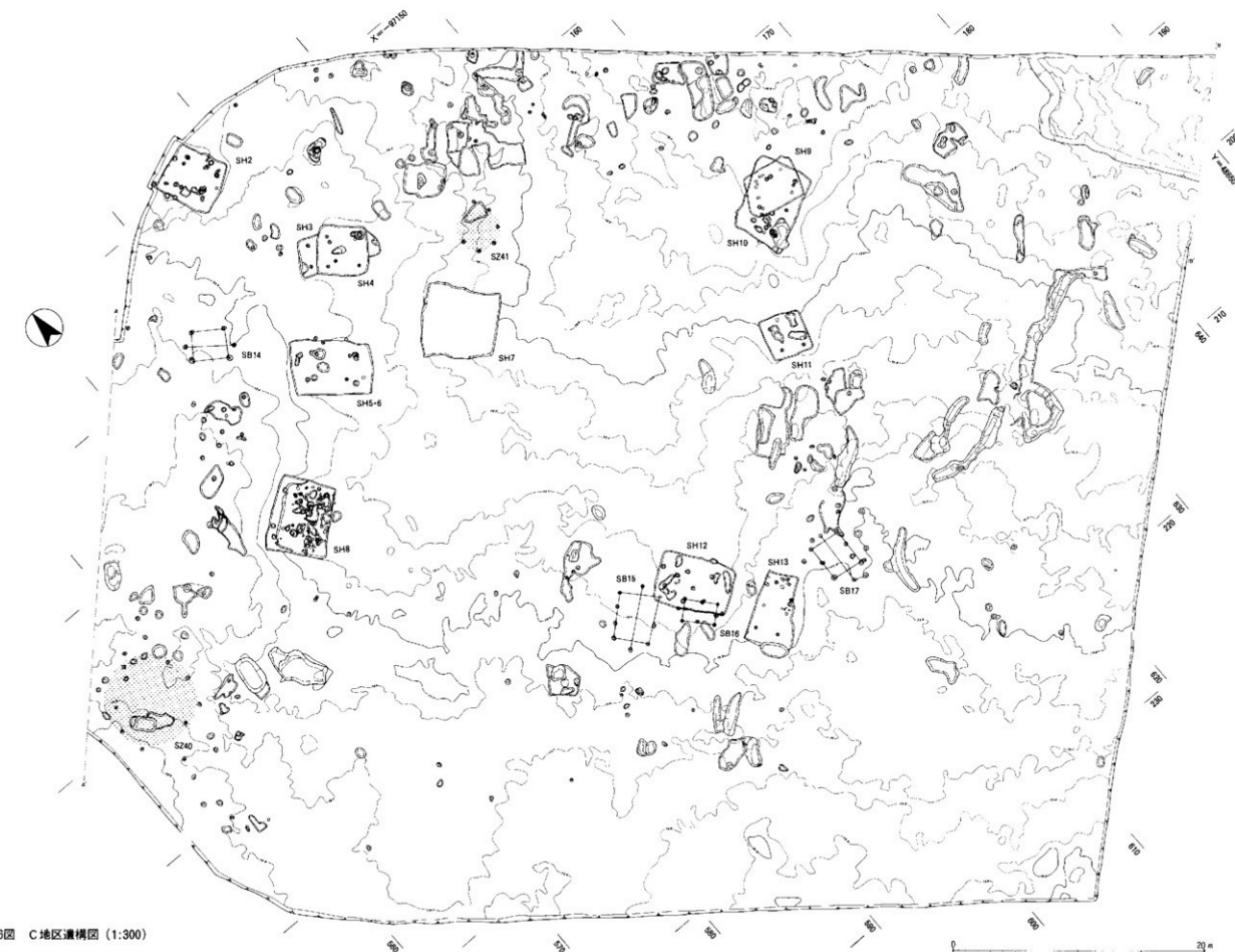
竪穴住居跡SH2（第15図）

長辺4.7m、短辺4.2mの若干長方形の平面形となる。主柱穴と考えられる小柱穴を4個所検出できた。しかし、炉跡は現状では確認できず、埋土中にも焼土等は混入しておらず、炉がほとんど使用されなかつたか、あるいは竪穴住居自体の使用期間が短かったとみるべきであろう。

出土遺物は、埋土中から弥生土器が若干みられた



第15図 竪穴住居跡SH2実測図 (1:50)



第16図 C地区遺構図 (1:300)

のみで、住居床面から出土したと考えられるものはなかった。

豎穴住居跡 SH 3・4 (第18図)

重複する SH 3 および SH 4 は、SH 3 が古く住居跡のほぼ半分ほどが SH 4 によって破壊されているが、主柱穴は確認できた。

SH 3 は残存部分からすると、平面形が一辺 3 m ほどの正方形の住居跡とみられ、SH 4 は一辺 4 m ほどの同じく正方形であり、SH 3 よりひとまわり大きい。ともに主柱穴は 4 本からなる。また、炉跡は焼土などの痕跡を含め、どちらからも確認することができなかつた。

遺物は SH 4 に伴う弥生土器が若干出土した。

豎穴住居跡 SH 5・6 (第20図)

豎穴住居の平面形では重複がみられなかつたが、主柱穴と考えられる 4 本単位のビットが 2 組確認できたため、2 棟の豎穴住居の存在を考えた。

現状では長辺 6.5 m、短辺 4.3 m の長方形の平面形を呈すが、これが SH 5 と SH 6 のどちらの平面形を示すものかは明らかにし難い。やはり炉跡は確認

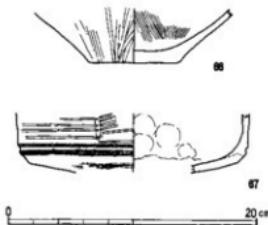
できなかつた。埋土中より弥生土器が若干出土した。

豎穴住居跡 SH 7 (第20図)

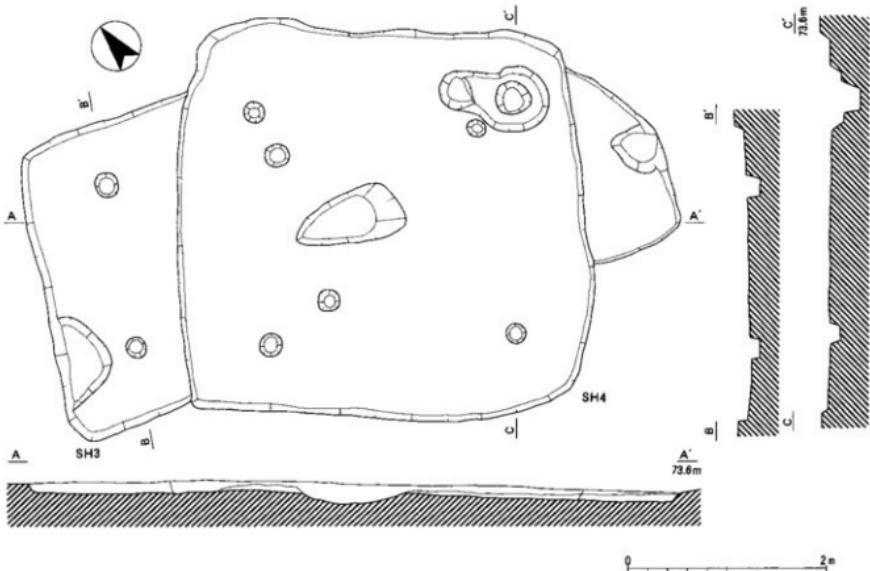
豎穴状の掘り込みのみが検出され、主柱穴などはまったく検出できなかつたが、遺構埋土や周辺の状況などから、豎穴住居跡と考えて誤りはないものと思われる。長辺 6 m、短辺 5.6 m のやや長方形となる。埋土から若干の弥生土器が出土した。

豎穴住居跡 SH 8 (第22図)

長辺 6 m、短辺 4.7 m の長方形の平面形を示す。



第17図 豊穴住居跡 SH4 出土遺物 (1:4)



第18図 豊穴住居跡 SH3・4 実測図 (1:50)

住居跡内から多数の大小の礫が乱雑に混じっていた。なかには石斧の原石として使用可能なものも含まれており、礫の一部は住居内に持ち込まれたものもあったのではないかと思われる。

やはり炉跡は明瞭でなく、弥生土器が若干出土した。

竪穴住居跡 SH 9・10（第27図）

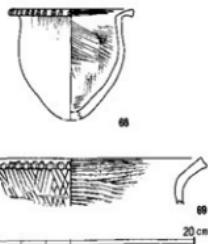
2棟が重複して検出されたが、SH 9が古い。

SH 9は平面形が長辺4.4m、短辺3.5mとやや長方形に近く、SH 10の方は長辺6.3m、短辺4.5mと長方形となる。

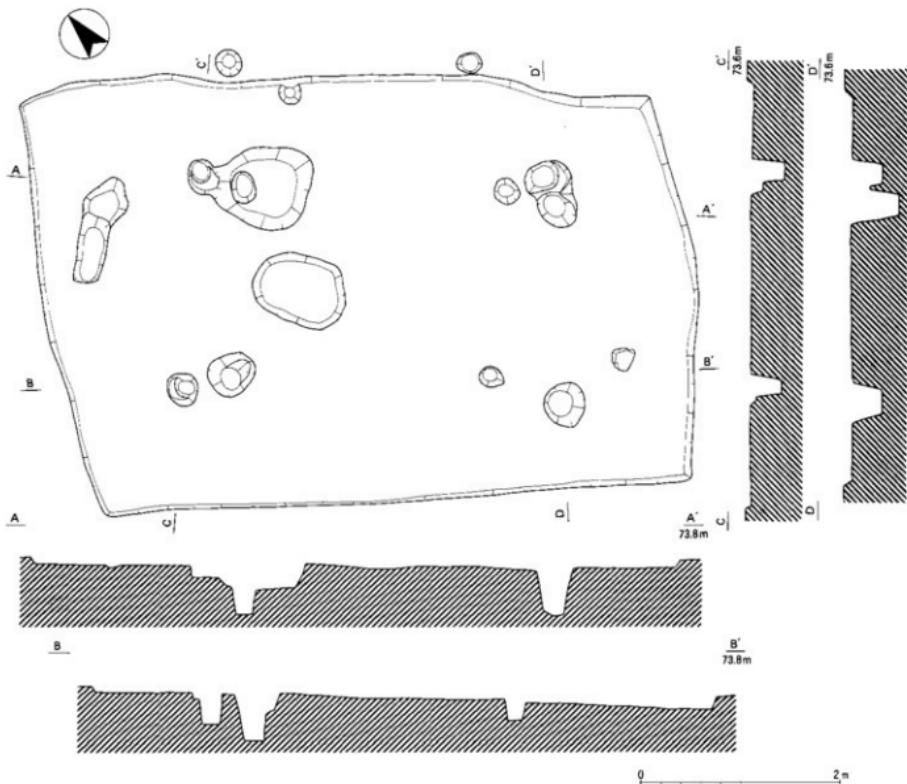
SH 9では炉跡が確認できなかったが、SH 10はややに片寄った位置に焼土がみられ、炉跡の可能性

が大きい。しかし焼土は薄く、炉があまり使用されていなかったような印象を受ける。

またSH 10の南隅付近に土坑状の落ち込みが検出



第19図 竪穴住居跡SH5・6出土遺物 (1:4)



第20図 竪穴住居跡SH5・6実測図 (1:50)

されたが、木の根との重複もあり、SH10に本来伴うものであったは明らかでない。

出土遺物はSH9に伴うとみられるものが若干あるほか、SH10からは2個体分の壺が一括して出土した。

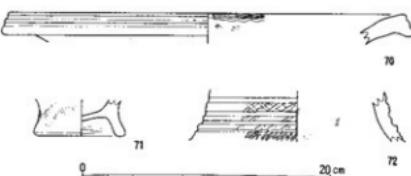
豊穴住居跡 SH11（第30図）

一辺3.5mほどの正方形の豊穴住居跡で、他の豊穴住居跡と比べるとやや小型である。炉跡は確認されず、埋土中より若干の弥生土器が出土している。

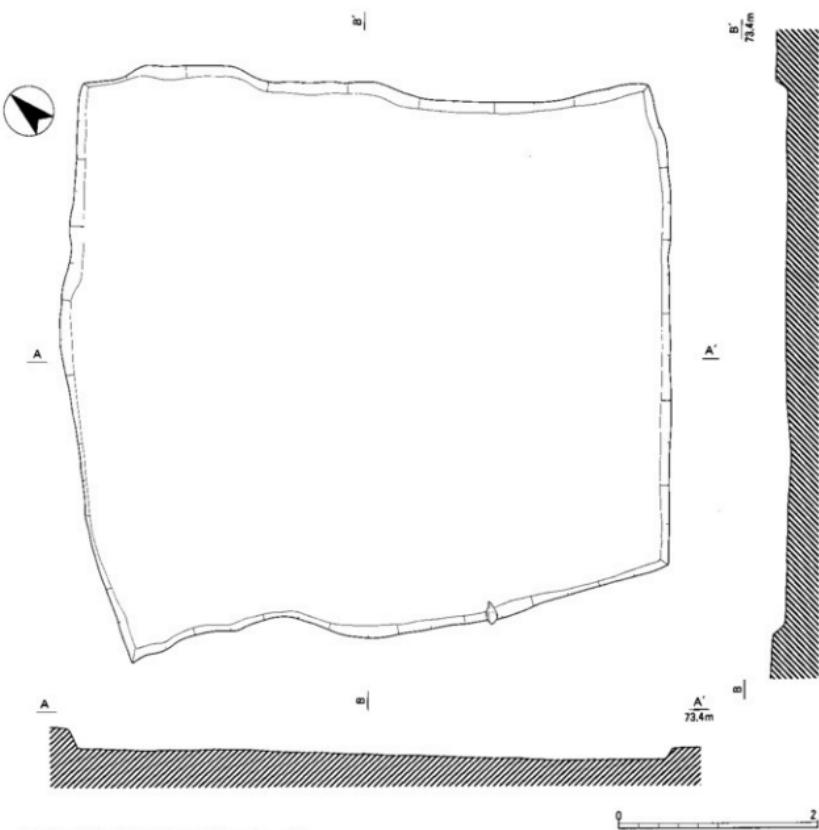
豊穴住居跡 SH12（第32図）

長辺6m、短辺4mの長方形の豊穴住居跡で、掘立柱建物SB15およびSB16と重複する。住居内の

やや北に片寄った位置に石畳みを伴うとみられる炉跡を確認した。炉の範囲は焼土の広がりや残存した石畳みの状況から、一辺0.4mほどの方形のものである。



第21図 豊穴住居跡SH7出土遺物（1:4）



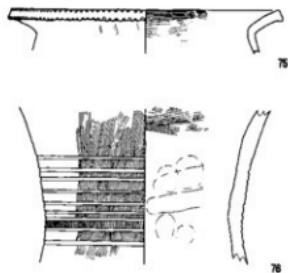
第22図 豊穴住居跡SH7実測図（1:50）

出土遺物は、埋土中から弥生土器がみられ、(86)
は床面に近くに残されていた。

竪穴住居跡 SH13 (第34図)

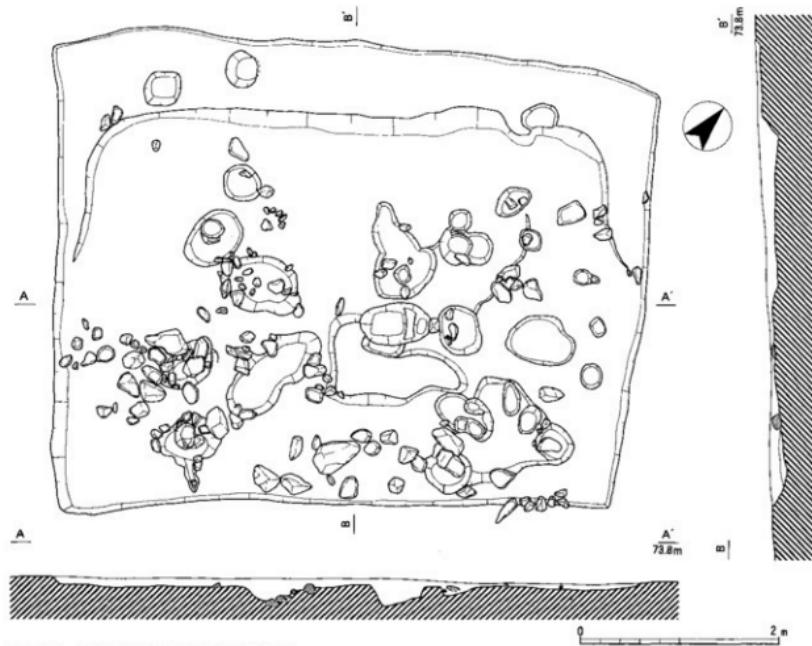
長辺 6 m、短辺は北側で 2.5 m をはかり、現状では
かなり長方形となるが、やや亜な平面形となること
と、主柱穴から考えると 2 棟が重複している可能性
もあるが、検出時の状況や土層観察からも確定はで
きなかった。

炉跡は確認できず、住居跡の南側は木の根による



第23図 竪穴住居跡SH8出土遺物 (1:4)

第24図 竪穴住居跡SH9出土遺物 (1:4)



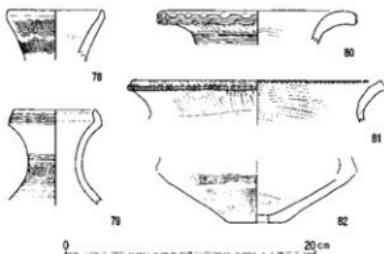
第25図 竪穴住居跡SH8実測図 (1:50)

と思われる土坑状の浅い落ち込みに切られている。

出土遺物は、埋土中から若干の弥生土器がある。

掘立柱建物 S B 14 (第35図)

S H5・6の北西方向にあり、独立棟持ち柱を伴う1間×1間の建物である。柱間隔は、梁方向がやや



第26図 穫穴住居跡SH10出土遺物(1) (1:4)

狭く2.4mほど、棟方向は2.9mとなる。

柱穴内からは出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B 15 (第35図)

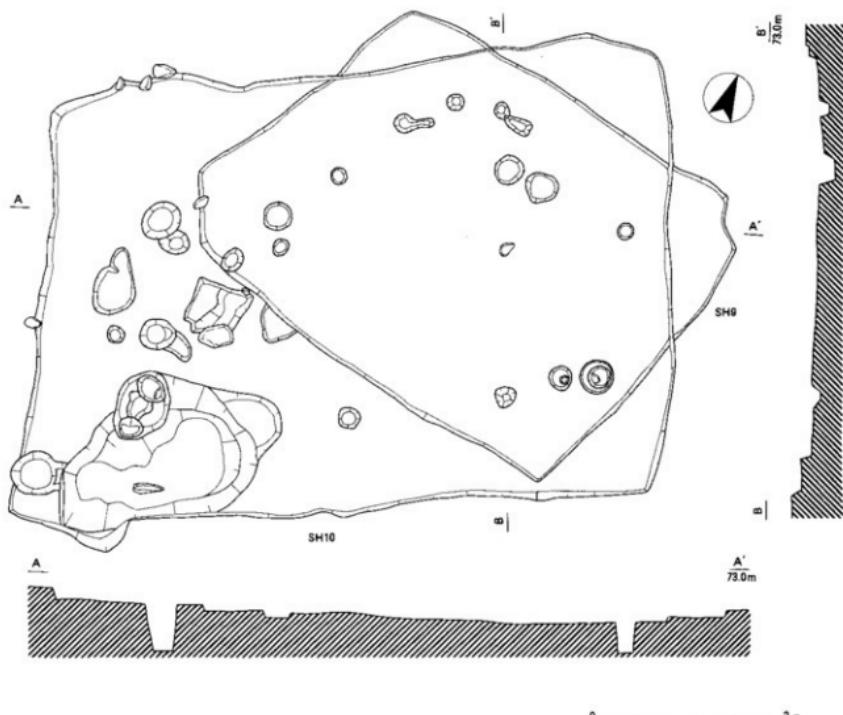
S H12と一部が重複するが、独立棟持ち柱を伴う1間×3間の建物で、南側棟方向の柱が一間分、遺構検出面に砂礫層が露頭しているためか検出できなかった。

やや平面形は正であり、柱間隔は梁方向が広く、2.9mほど、棟方向は、1.2mほどとなる。

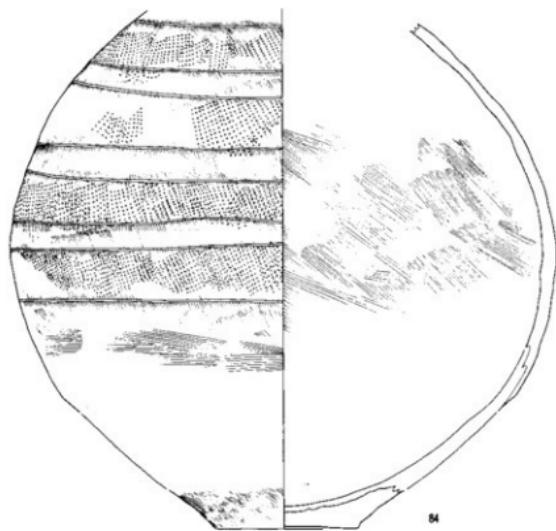
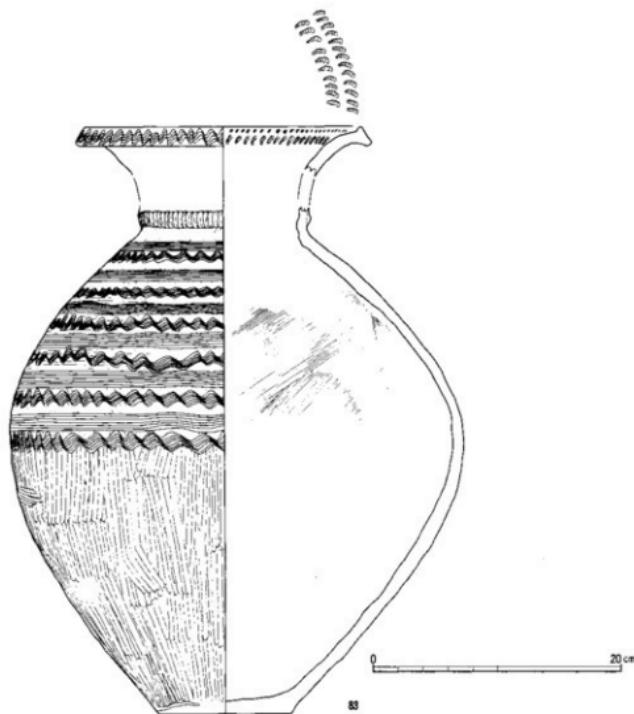
柱穴内からは出土遺物はみられなかった。

掘立柱建物 S B 16 (第36図)

S H12と重複し、やはり独立棟持ち柱を伴う1間×2間の建物となると思われるが、梁方向が2間としても捉えることが可能なピットも存在する。しかし、棟持ち柱との柱通りは悪く、1間×2間の棟持



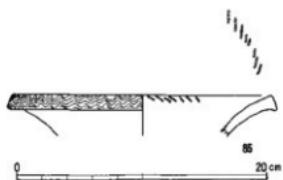
第27図 穫穴住居跡SH9・10実測図 (1:50)



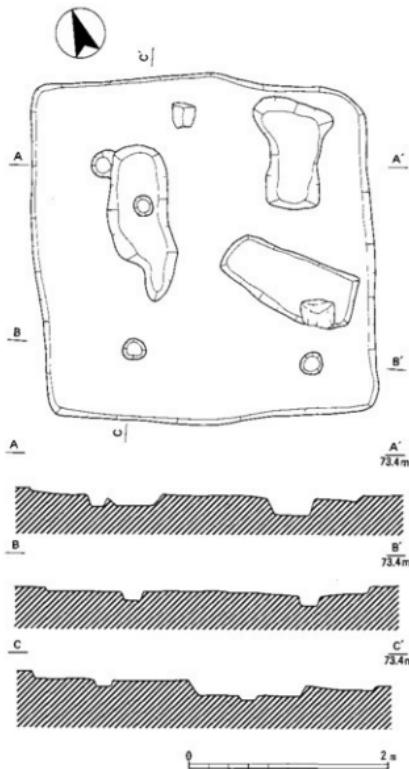
第28図 積穴住居跡SH10出土遺物〈2〉(1:4)

ち柱建物か2間×2間の側柱建物かの判断は微妙である。ただ、他の掘立柱建物すべてに独立棟持ち柱が伴うことから、前者の建物構造を考える方が妥当と思いたい。

そうすると柱間間隔は、梁方向で1.7m、棟方向で



第29図 壺穴住居跡SH11出土遺物 (1:4)



第30図 壺穴住居跡SH11実測図 (1:50)

1.3mをはかる。

柱穴内から出土遺物はなかった。

掘立柱建物 S B 17 (第36図)

独立棟持ち柱が併い、1間×2間の建物である。

柱間間隔は、梁方向で2.4m、棟方向で1.4~1.5mをはかる。

柱穴内から出土遺物はなかった。

住居跡 S Z 40・41

B地区で検出されたものと同様、環状にめぐる柱穴のまとまりである。S Z 40は径7mほどの範囲に、S Z 41は径4mほどの範囲に広がりをもつと思われる。炉跡や柱穴内の出土遺物などは確認されなかつた。

(2) 遺 物

C地区からは縄文晩期から弥生時代中期にかけての土器および石器が多く出土しているほか、わずかではあるがC地区南隅の方で山茶碗がみられた。

土器類

遺構出土のものとしては壺穴住居跡から弥生土器を中心とした遺物が出土している。

壺穴住居跡 S H 4 出土の遺物として(66・67)がある。

(66)は壺の底部片で、外面をタテ方向にヘラミガキし、内面をハケメ調整している。

(67)は磨消線文系壺と呼ばれているもので、底部近くで強く張る特徴的な器形で、キザミメ突帯の上を磨消線が横走りする。中期中葉に比定される。

壺穴住居跡 S H 5・6 出土の遺物として、壺(68・69)がある。(68)は口径9.8cmの小型の壺で、外反する口縁部の口唇部にキザミメが施され、体部はハケメ調整する。

(69)は口唇部下端にキザミメを加え、外面にはタテ方向に、内面にはヨコ方向に粗いハケメを施す。(68・69)とも弥生中期に比定されるものである。

壺穴住居跡 S H 7 からは、広口壺(70)および壺頭部(72)、台付壺の脚台部(71)などが出土した。

(70)の口唇部には二条の凹線文が施され、口縁部内面には波状文も認められる。(71)は低い脚台部片で、外面にハケメが施されている。(72)は、凹線間に斜格子文や刺突文を施す。

(70) は中期後葉に比定できるもので、(71-72) もこれに矛盾するものではないと思われる。

竪穴住居跡 S H 8 からは受口壺 (73-74) などが出土した。

(73) は口縁部外面に二条の凹線をめぐらし、頸部にも櫛描きの直線文を施す。(74) は口縁部外面に竹管文と細かな刺突を加えた隆帯を交互に施す。

これらは中期後葉に比定できるものである。

竪穴住居跡 S H 9 からは壺頸部 (76) および壺底部 (77)、甕 (75) などが出土した。

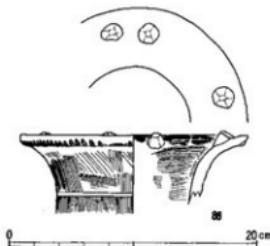
(76) は外面に 9 条の凹線をめぐらし、凹線間の一部には貝殻腹縁による鱗状の刺突が施されている。

(77) は器壁の厚さや体部の開き具合などから壺の底部と思われる。甕 (75) はくの字に外反する口縁部の口唇部の上端と下端にそれぞれキザミメを施す。

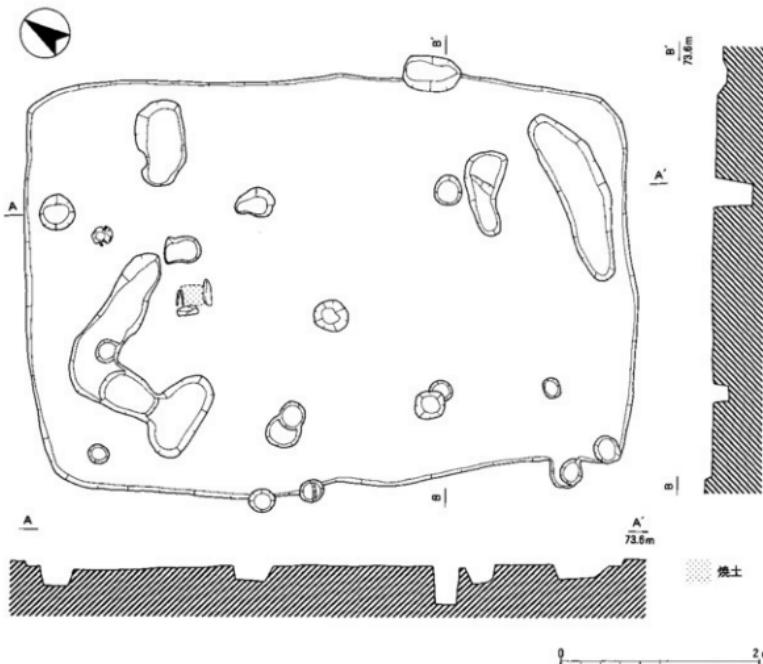
これらは中期後葉に比定できる。

竪穴住居跡 S H 10 からは細頸壺 (78-79-82)、広口壺 (80-83-84)、甕 (81) などがある。

(78) は口縁部が外上方に開き壺部が直上に立ち上がる。外面には波状文が施される。(79) は口縁部が内折するもので、口縁部外面には直線文上に竹管文を押圧した円形浮文を貼り、頸部でも直線文間の



第31図 竪穴住居跡SH12出土遺物 (1:4)



第32図 竪穴住居跡SH12実測図 (1:50)

貝殻旗縁による鱗状の刺突の上に同様の円形浮文を貼りつける。

広口壺(83)は口唇部に波状文をめぐらし、口縁部内面に二条単位に刺突文をめぐらす。頸部には細かな押し引きを加えた突帯を貼りつける。体部外面上半には直線文と波状文を交互にめぐらしている。

(84)は口頸部を欠くが、球形に近く膨らむ体部の外面はハケメ調整ののち、沈線で区切った文様帶と無文部を交互に配し、文様帶内には刺突による擬繩文をめぐらす。

(80)は強く外反する口縁部は器壁が厚く、口唇部下半は波涛を描く。頸部には直線文が施されている。

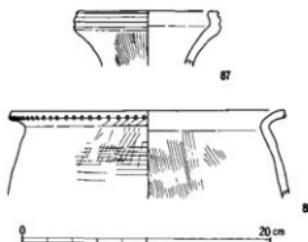
甕(81)は口唇部の上下端にそれぞれキザミメを施す。

以上のような竪穴住居跡SH10出土の土器は、弥生中期中葉の特徴をもつものである。

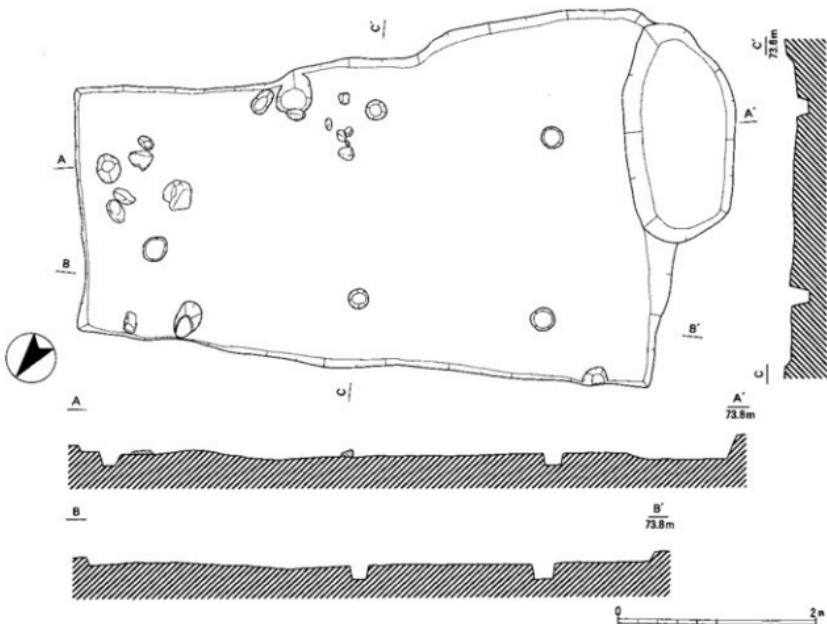
竪穴住居跡SH11出土遺物のうち、(85)は広口壺

の口縁部であり、口唇部に波状文、口縁部内面に刺突文をめぐらす。

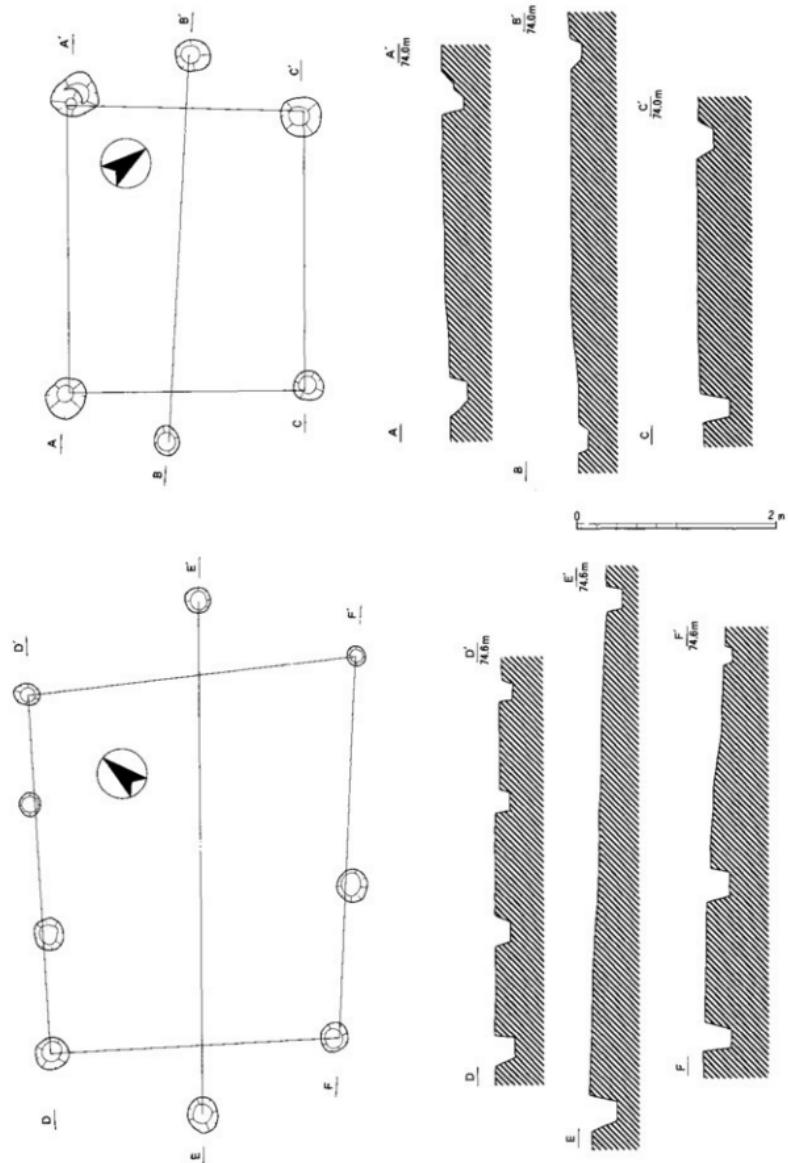
竪穴住居跡SH12出土遺物には(86)のような広口壺があり、口縁部内面に2個を1対にした4単位の瘤状突起がつく。口唇部には下端近くにキザミメを施す。また、頸部外面には沈線が1条めぐらされている。弥生中期中葉に比定できよう。



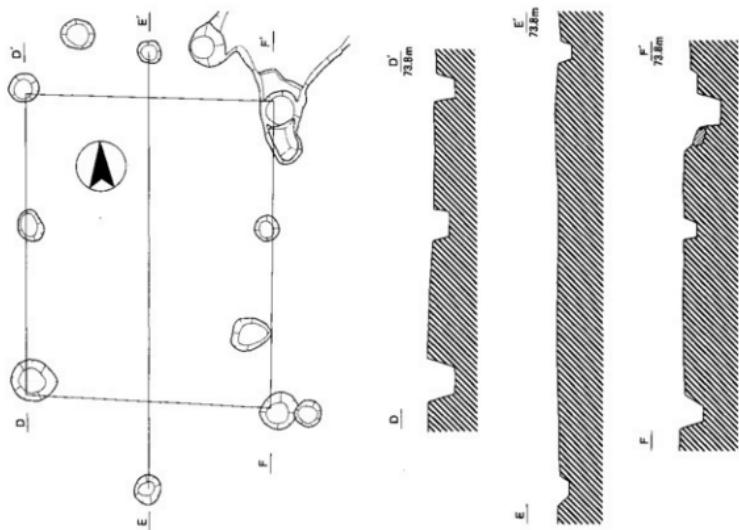
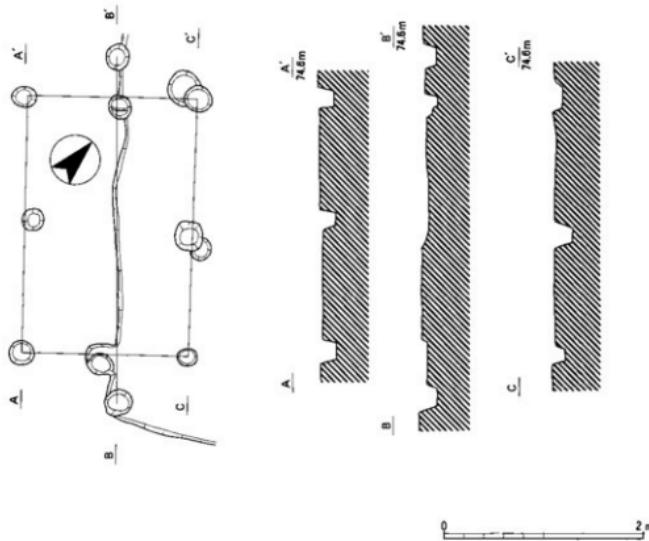
第33図 竪穴住居跡SH13出土遺物 (1:4)



第34図 竪穴住居跡SH13実測図 (1:50)



第35図 挖立柱建物SB14（上）・SB15（下）実測図（1：50）



第36図 据立柱建物SB16（上）・SB17（下）実測図（1：50）

堅穴住居跡 S H13からは受口壺（87）、壺（88）などが出土している。

受口壺（87）は口縁部外面に2条の凹線がめぐる。残存部分が限られるが、頸部は無文のようである。

壺（88）は強く外反する口縁部の口唇部下端にキザミメをめぐらす。（87・88）とも、中期後葉に比定できると思われる。

その他、遺構以外出土の土器として、（89～188）があり、繩文土器（178～181）および山茶椀（176・177）を除くと、すべて弥生土器である。

繩文土器（178～181）のうち、（181）は口縁部下に突帯をもつ浮線文系の浅鉢で、口縁部内面には1条の沈線をめぐらす。

弥生土器（89～175・182～188）は、受口壺（89～104）、広口壺（105～113）、袋状口縁壺（114～116）、壺（117～144）、無頸壺（150）、鉢（151）などがあり、受口壺は口縁部外面に凹線文を施すもの（89・90・94～97・99・102・103）や無文のもの（91・92）、貝殻腹縁による刺突を施すもの（93・100）、波状文を施すもの（98）、棒状浮文と波状文からなるもの（101）、波状文と口縁部下端にキザミメをめぐらすもの（104）などがある。

また、頸部は無文のもののほか、直線文をめぐらすもの（92・100・101）、直線文と波状文からなるもの（97・104）、沈線を施すもの（98）などがある。

広口壺のうち、口縁部内面に瘤状の突起をもつもの（105・106・108）があるほか、口唇部を刺突するものの（105・106・111）、タテ方向にキザミメを施すもの（107・110・112）、廉状文風に原体を細かく休止しながら一周するもの（108）、斜格子状にキザミメを施すもの（109）などバラエティに富む。

（114～116）は鉢あるいは袋状口縁壺となるもので、口縁部上半に凹線を3条程度めぐらすもので、やや大型の器形となるものが多い。

壺のうち、口縁部が単純に外反するもの（117～143）が多いが、（144）のように受口状口縁となるものもある。口唇部には全面、下端のみあるいは上端と下端にキザミメを施すもの（120～134・136～143）が大半を占めるが、無文のもの（117・135）も若干みられる。

頸部にハケ原体による直線文を施すもの（120・124・

125・128・131・135・143）があり、（117）には器壁に刺突を加えている。また、（144）は、外面全体に粗いハケメを施すものと思われる。

無頸壺（150）は、口縁部下に竹管文をめぐらすほかは無文で、鉢（151）は外面に羽状に刺突を加え、さらにその下に竹管文を施す。

脚台（169～171）のうち、（169）は台付鉢の脚台部になると思われ、（170・171）は台付壺の脚台と思われる。

（182～184）は頸部外面に数条の凹線をめぐらし、体部外面に櫛描直線文とゆるやかな波状文を描く点から、古井式など三河地方の系統に属する壺と思われる。

また（188）も体部外面に縦位の波状文を施す点は、同じく三河地方の土器に認められる特徴と共通する。以上の弥生土器は、中期中葉～中期後葉に比定されるものである。

山茶椀（176・177）は遺構は確認されなかったが、C地区で出土した数少ない歴史時代の遺物である。その出土地点が集中することや土器の残存状態が良好なことから、この時期の集落等の遺跡が近在し、包含層遺物が広がっていたとは考えにくい。

（176・177）はいずれも直線的に開く体部をもち、口縁部は丸くおさめる。高台には軽圧痕を残す。形態からすると、鎌倉時代前半のものと考えられる。

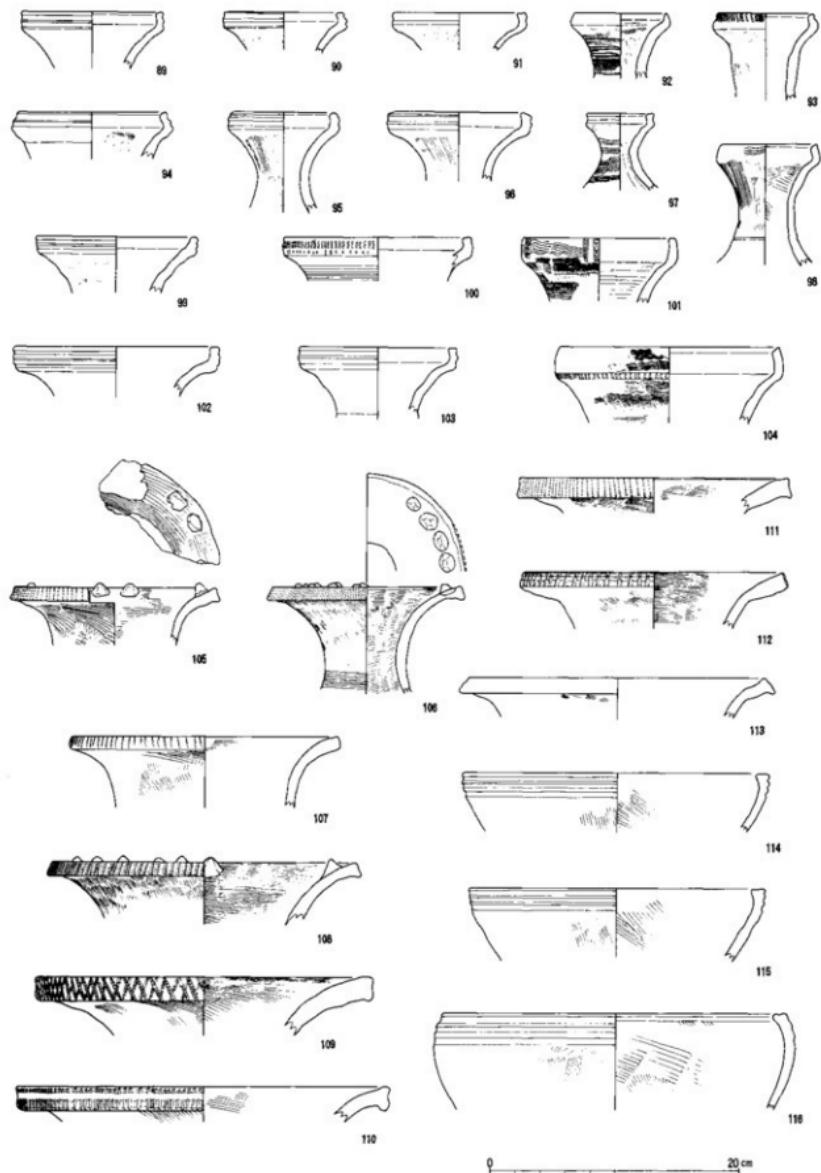
石器類

未成品を含めた磨製石斧（189～256）が67点と最も多く出土した。石斧以外では、敲打具（257～260）、叩石（261～268）、石棒あるいは石劍と考えられる磨製棒状石製品（269）、砥石および台石（270～300）などがある。

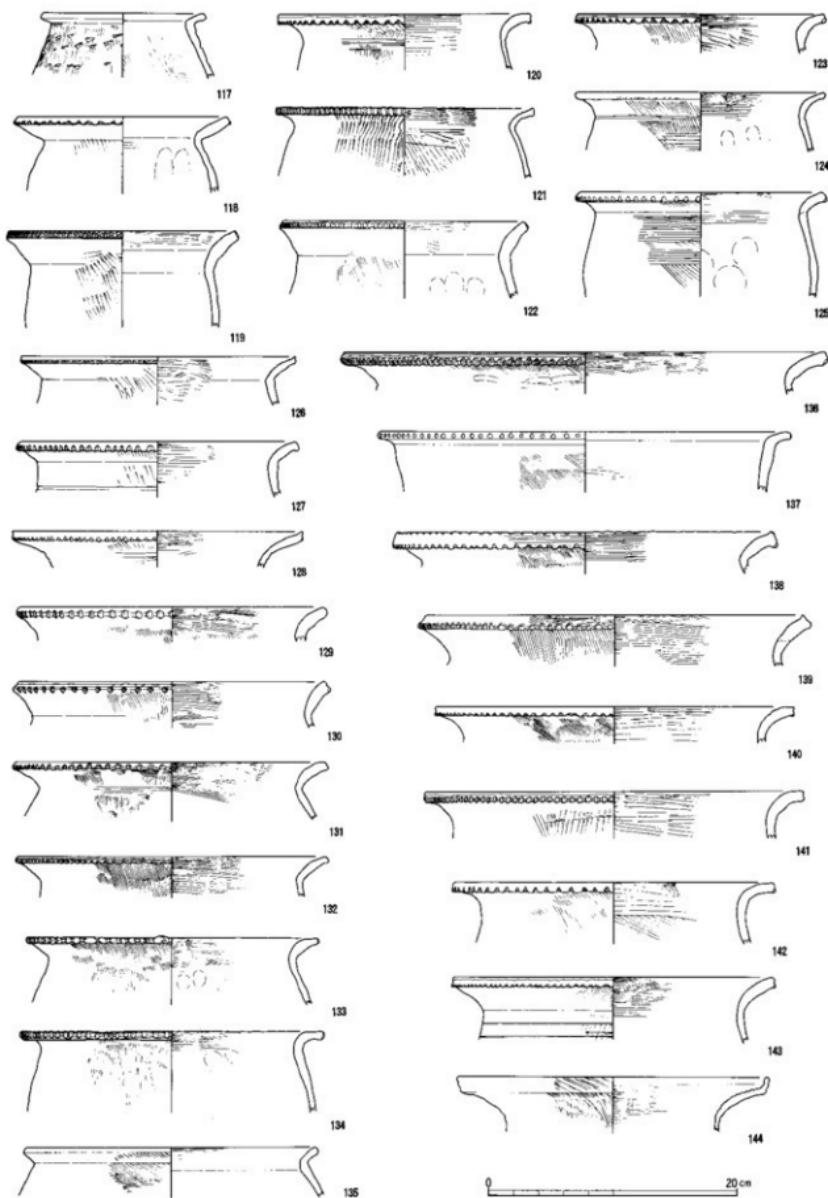
磨製石斧は未成品を多く含むが、少なくとも刃部あるいは基部に研磨がみられるもの（234・236～240・242・243・248・256）は、石斧として使用されていた可能性が大きい。

しかし、（234）は基部は剝離面を残したままであり、（235～237・240）については敲打痕を残し、いずれも基部の研磨はみられない。（239・240・248・256）についても基部に研磨が施されるものの、剝離面や敲打痕も多く残す。

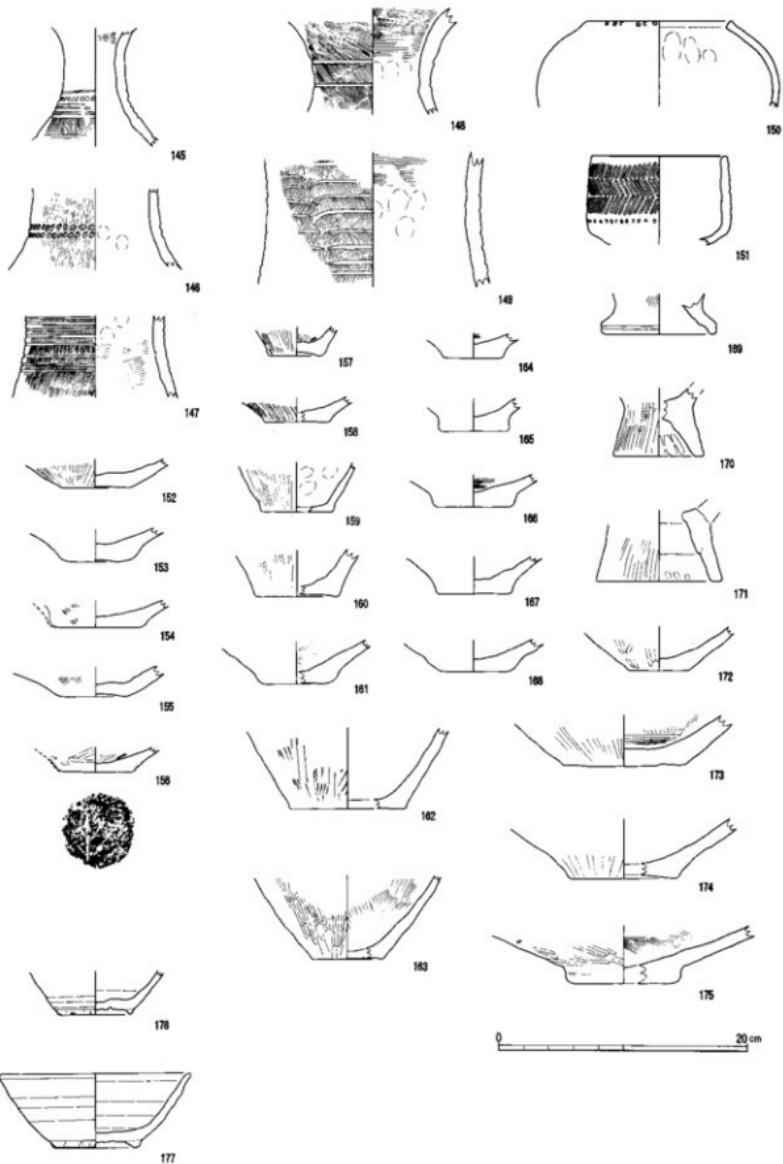
また磨製石斧には刃部形態や大きさ、重量感など



第37図 C地区出土遺物実測図〈1〉(1:4)



第38図 C地区出土遺物実測図(2)(1:4)



第39図 C地区出土遺物実測図〈3〉(1:4)

から判断して、その機能から伐採斧と加工斧があり、弥生時代の場合、その形態から伐採斧は大型蛤刃石斧、加工斧はさらに柱状石斧と偏平石斧とに分類して呼ばれることが一般的に知られてきている。

C地区出土のものにも、伐採斧と加工斧の両方みられるが、その形態にばらつきがあり、未成品や破損品では厳密に分類しかねるものも含まれる。伐採斧の未成品のうち、刃部に相当する部分を欠損したものは、前述の例から製品として使用されていた可能性もあるが、原石面あるいは剝離面を残すもの(189-202)と敲打痕の認められるもの(203-233・235)とがあり、剝離整形から敲打調整へという製作工程上の各段階を示すものである。

加工斧のうち、柱状石斧(241-244)はいずれも剝離面を残す未成品で、長さが15cmを超えるもの(244)と、10cmに満たない小型のもの(241)がある。

また偏平石斧(245-256)はやや綫長の形態となるものが一般的で、通常片刃となる。長さは6cm程度のもの(245-248)と、それよりやや大きいもの(249-256)があるが、後者の場合でも10cm未満の長

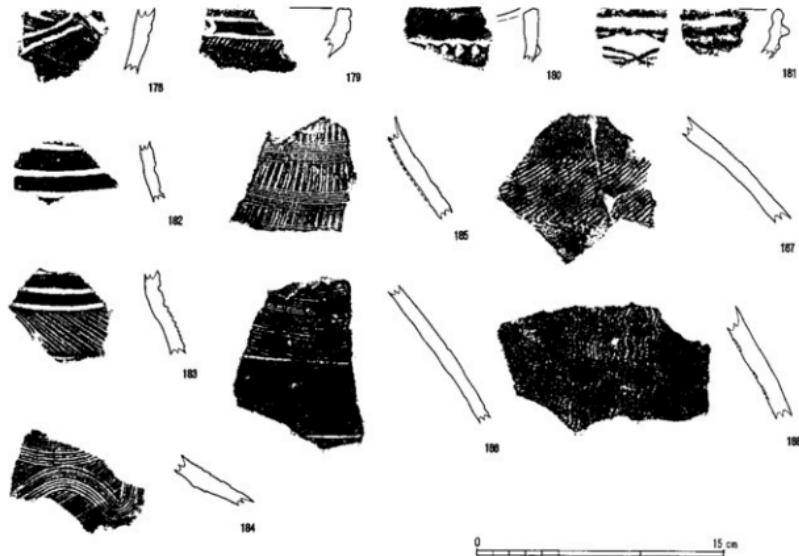
さにおさまるのではないかと思われる。

石斧製作に使用された石材は、ハイアロクラスタイトと呼ばれる変基性岩で、石材についてV-1で詳述する。

敲打具(257-260)は、石斧製作の際に用いる工具と考えられる。形態的な特徴として、拳大かそれ以下の大きさの砾塊で、敲打痕をもつ(259-260)か、敲打がすすみ、その結果敲打面が平滑化するもの(257-258)である。材質は石斧と同じハイアロクラスタイトとみられる。

叩石(261-268)は敲打具としたものと比べ、長辺円形となるもので、その側縁や中央付近に敲打痕をもつ。これらが、敲打具としたものと同様の用途を考えるか、あるいは縄文-弥生時代でしばしば認められる叩石・凹石そのものは即断し難いが、敲打具と異なり、石材がすべて砂岩である点は後者に近いと考えるべきかもしれない。

石棒ないし石劍(269)は円柱状の磨製の石片で、成品のごく一部分と考えられるため、全貌を復原しがたいが、石棒あるいは石劍の一部かと思われる。



第40図 C地区出土遺物実測図〈3〉(1:3)

砥石および台石（270～300）は、携帯可能な持ち砥石（270～276）、と通常携帯不可能な置き砥石あるいは台石（277～300）がある。

後者の場合、（299）のように伐採斧の砥ぎ出しに適するかのような縱断面が三角形となるものは置き砥石として、鼠齒状痕の明瞭なもの（294）や砥ぎ減りが認められない平坦な面をもつものは台石としての機能のみを考えればよいが、砥石か台石かの二者折一的な区別のつけ難いものもある。

（3）小 結

C地区は面積的に広範囲にわたる調査区であり、大きな成果もあげることができた。遺構としては弥生時代の12棟に及ぶ竪穴住居跡をはじめ、4棟の掘立柱建物、B地区と同様の平地住居跡と考えられる柱穴群などがあり、遺物としては磨製石斧の未成品とその製作に伴う工具類の出土である。

竪穴住居跡の広がりからすると、宮山遺跡全体としてはおそらくムラの中心部に近い部分であったと思われるが、なおC地区的東側に住居群が広がるのではないかと考えられる。

炉跡がみつかった竪穴住居跡は2棟のみで、そのうちS H10は地床炉で、土坑状の掘り込みはなく、S H12も同じく地床炉であったが、石囲みをもつ構造であった。どちらもあまり焼土が顯著でない。また、炉跡が検出することができなかった住居跡もあり、その使用頻度の寡少さが影響したものかもしれない。

磨製石斧の未成品および製作工具の出土は、宮山遺跡で盛んに磨製石斧の製作を行っていたことを示すもので、使用石材はハイアロクラスタイルと呼ばれる変塩基性岩で、組成的には玄武岩に類似する。

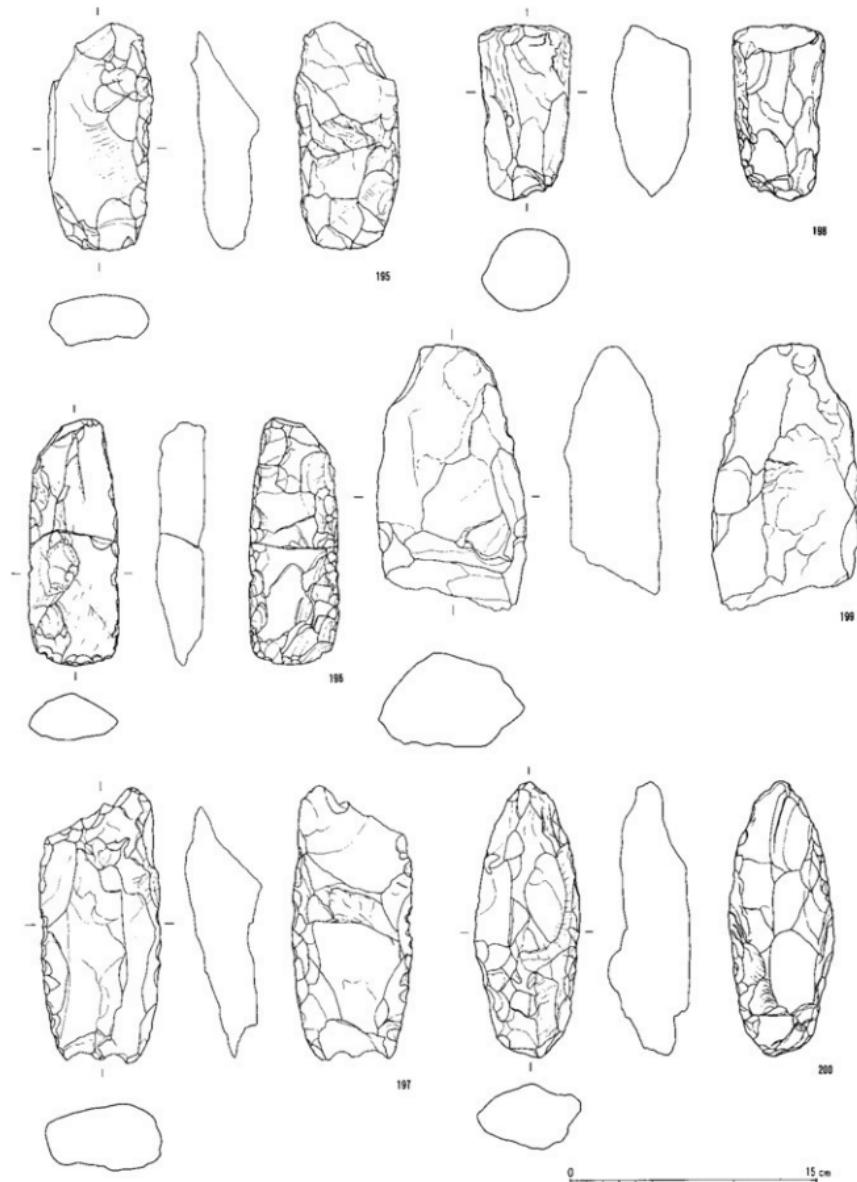
その原石は遺跡に隣接する青川の河原や遺跡内からでも入手可能で、原石採取から各製作工程を経て、完成品に至るまでの一貫した生産ラインを維持していたようである。

出土土器は若干の縄文土器、浮線網状文系の土器や山茶輪などもみられたが、ほとんどが弥生中期の土器で、中期中葉を中心とし、一部中期後葉に下るとみられるが、ほぼそれを最後に住居群が移動あるいは廃絶していくものとみられる。

土器は（144）などの受口状の口縁で粗いハケメを施す伊勢地方でも山麓部にみられるものは少なく、平野部の遺跡から出土する土器に近い。外来系の土器として（182～184・188）など、三河地方の特徴をもつものが若干認められる。宮山遺跡よりさらに員弁川を上流に遡った北勢町東村城跡でも、瓜郷系の壺が出土するなど、北勢北部山麓部と三河地方との交流をうかがい知ることができる。



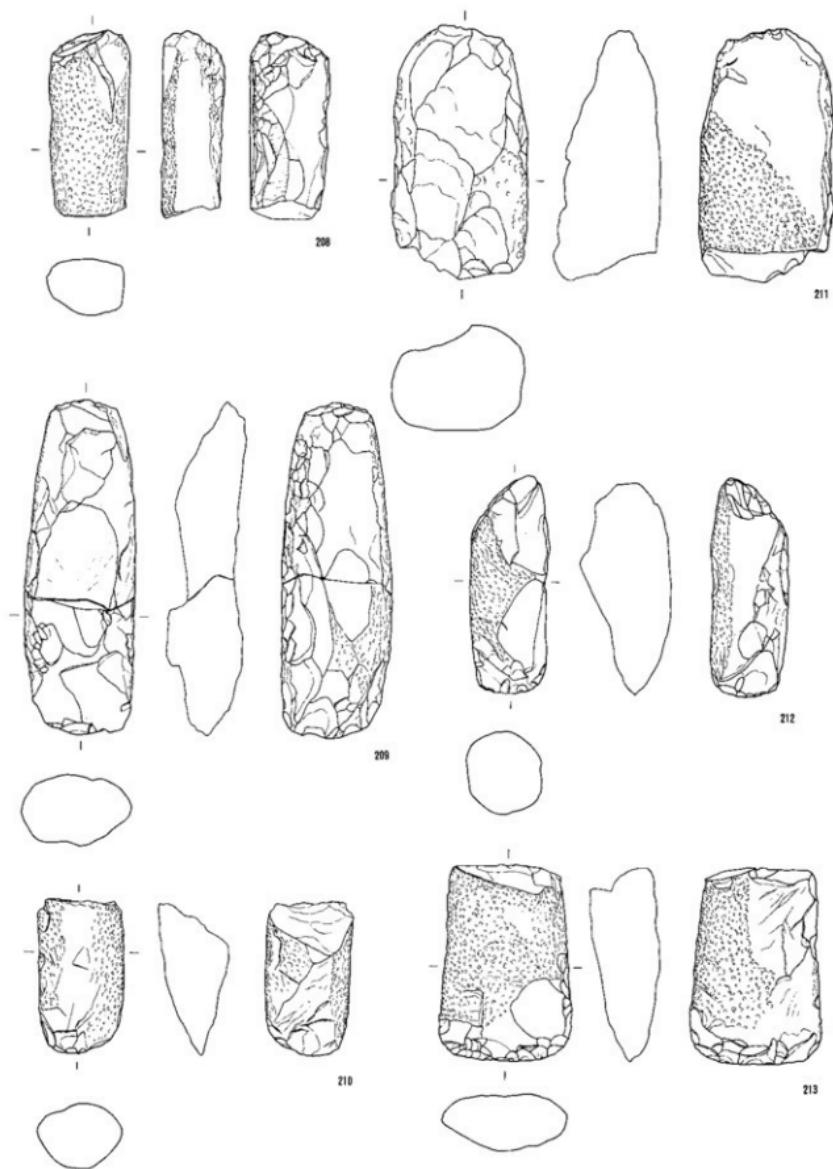
第41図 C地区出土遺物実測図(5)(1:3)



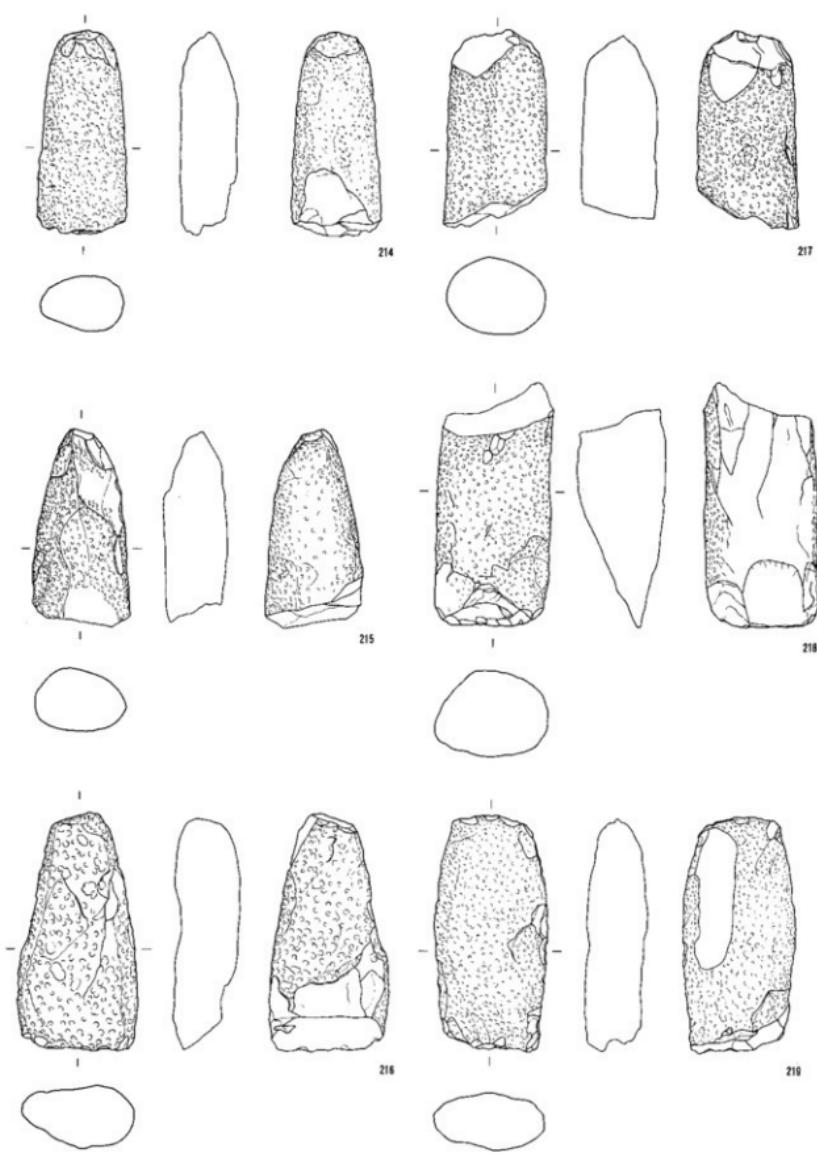
第42図 C地区出土遺物実測図〈6〉(1:3)



第43図 C地区出土遺物実測図(7)(1:3)



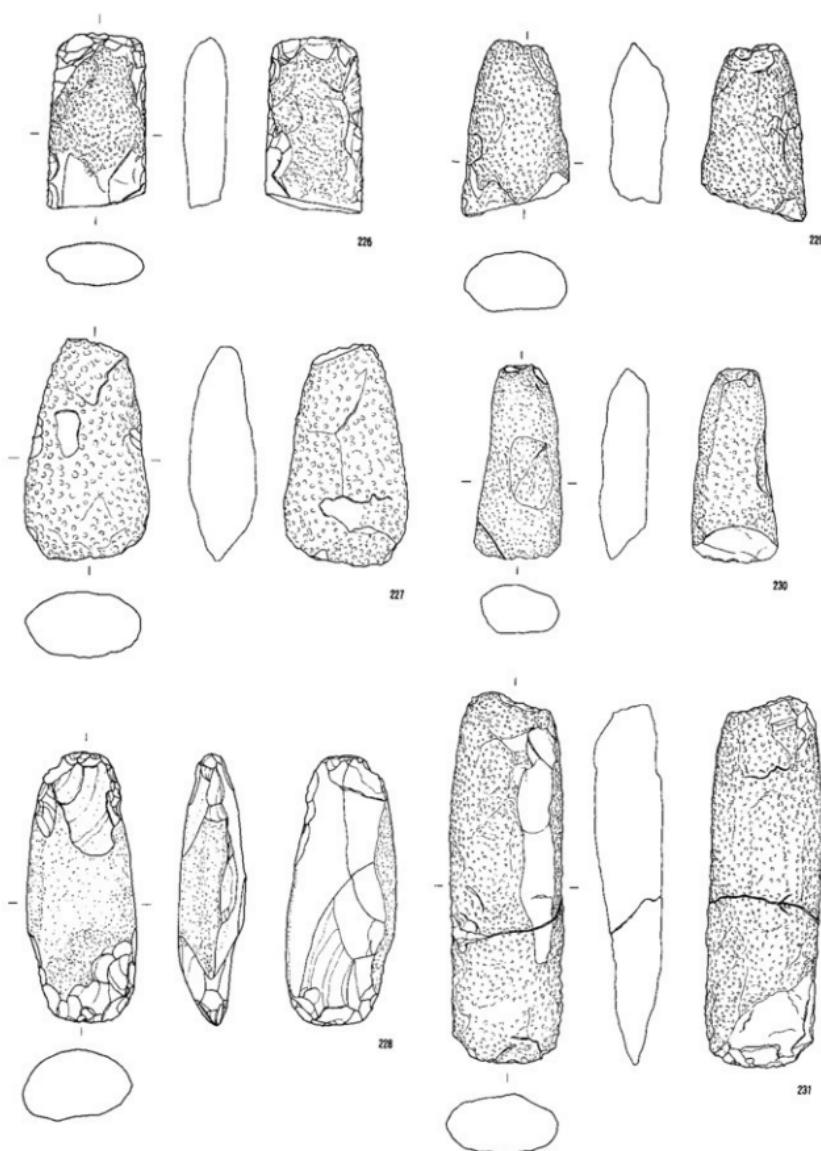
第44図 C地区出土遺物実測図〈8〉(1:3)



第45図 C地区出土遺物実測図〈9〉(1:3)



第46図 C地区出土遺物実測図〈10〉(1:3)



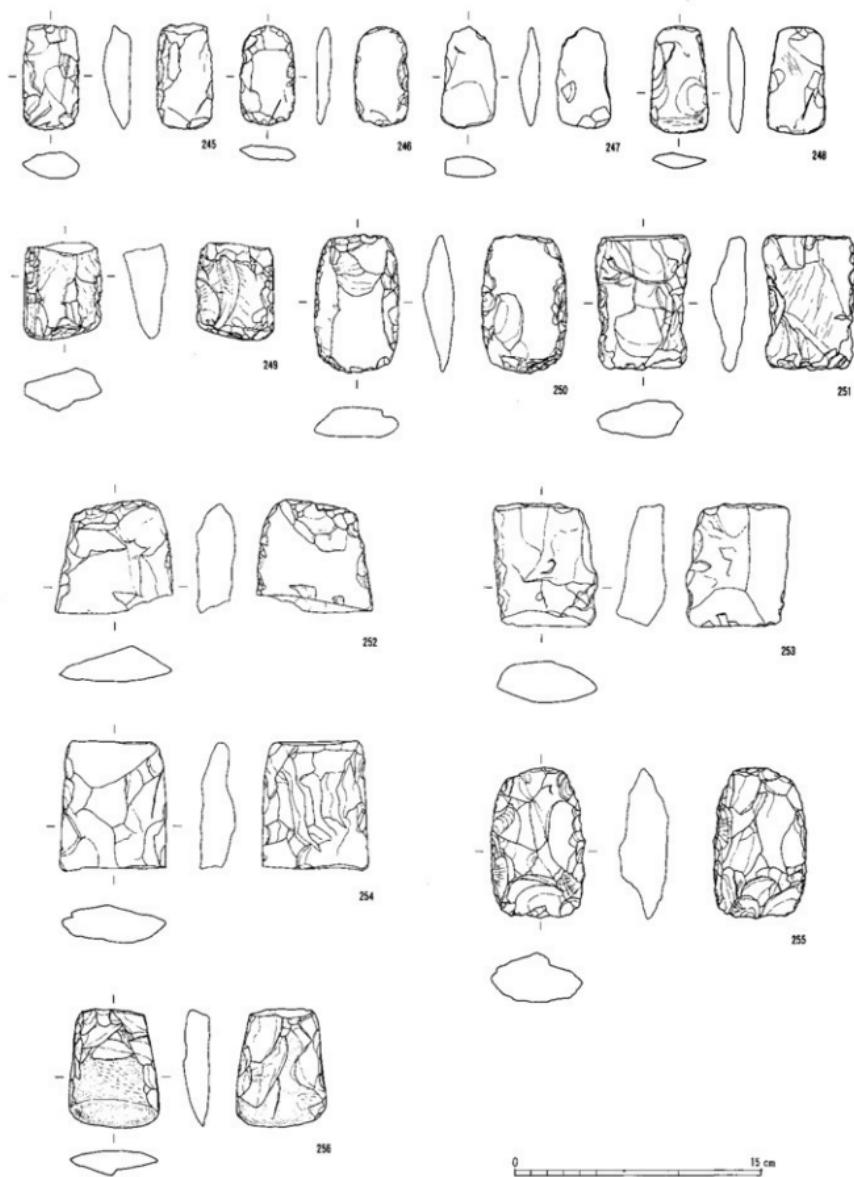
第47図 C地区出土遺物実測図〈11〉(1:3)



第48図 C地区出土遺物実測図(12)(1:3)



第49図 C地区出土遺物実測図(13)(1:3)



第50図 C地区出土遺物実測図〈14〉(1:3)



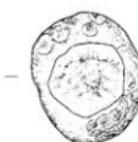
257



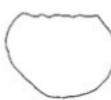
258



259



259



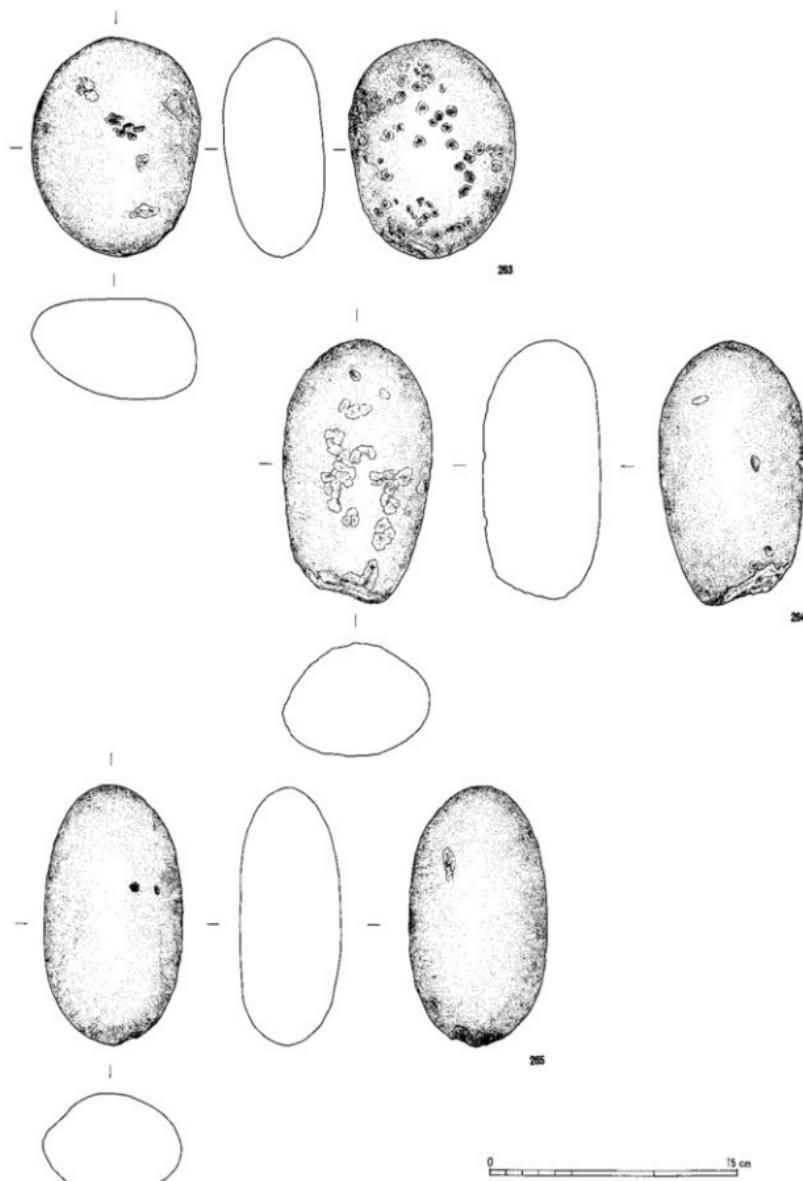
261



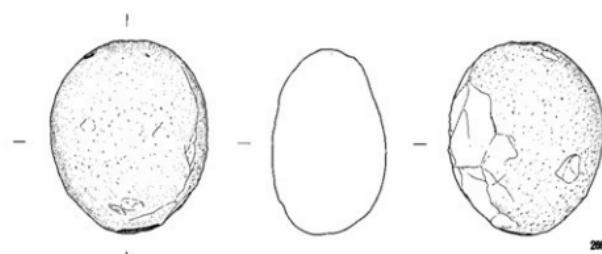
262



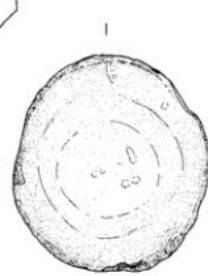
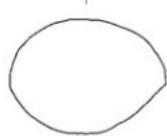
第51図 C地区出土遺物実測図〈15〉(1:3)



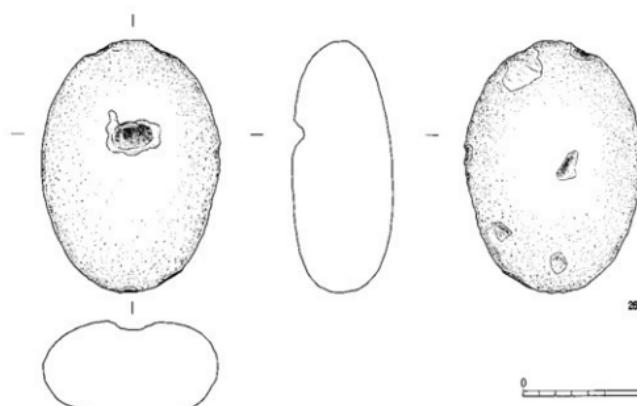
第52図 C地区出土遺物実測図〈16〉(1:3)



266



267



268

第53図 C地区出土遺物実測図〈17〉(1:3)

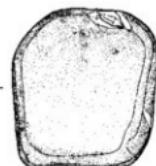
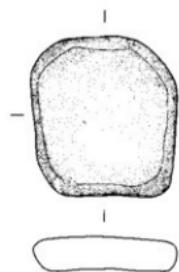




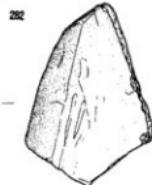
第54図 C地区出土遺物実測図〈18〉(1:3)



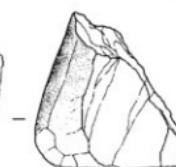
第55図 C地区出土遺物実測図〈19〉(1:4)



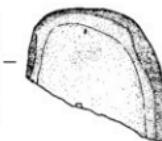
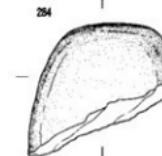
282



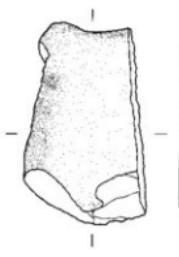
283



284



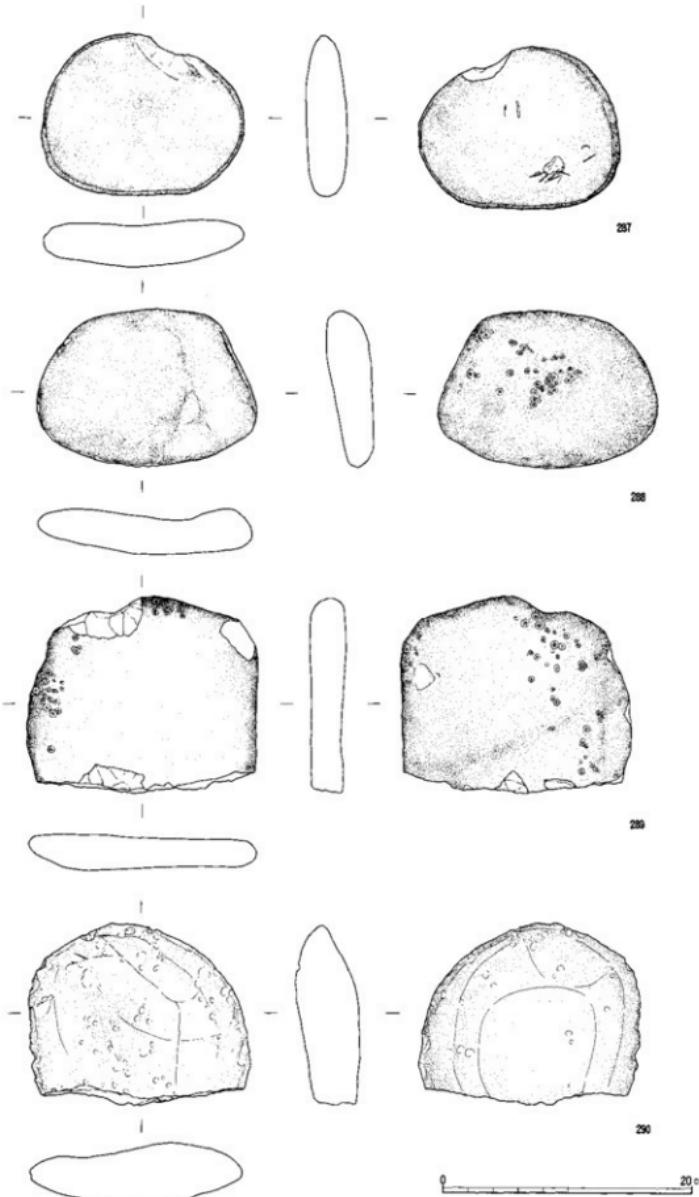
285



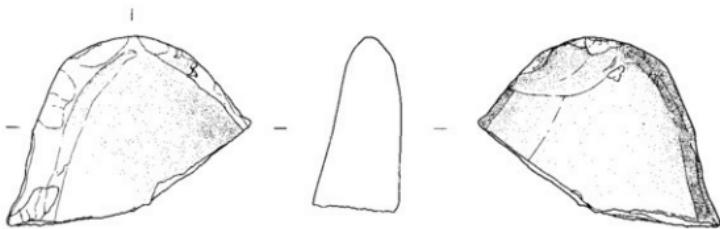
286



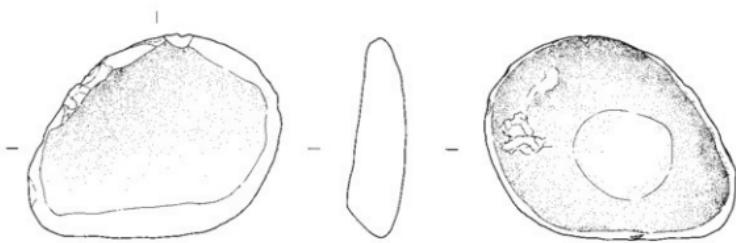
第56図 C地区出土遺物実測図〈20〉(1:4)



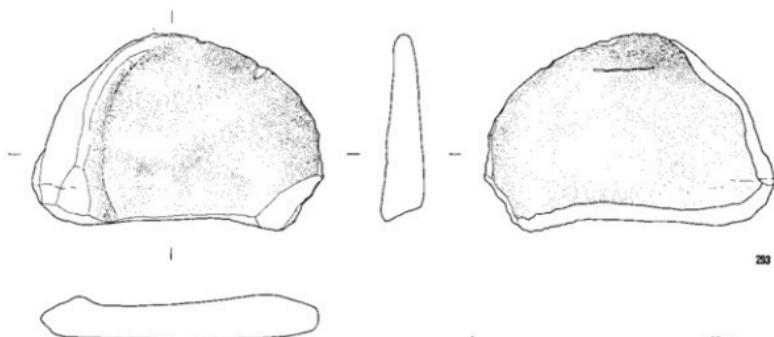
第57図 C地区出土遺物実測図〈21〉(1:4)



291



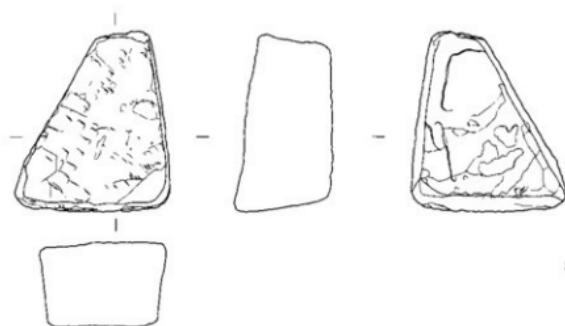
292



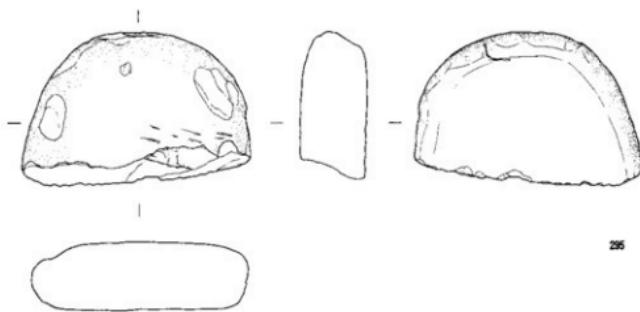
293

第58図 C地区出土遺物実測図〈22〉(1:4)

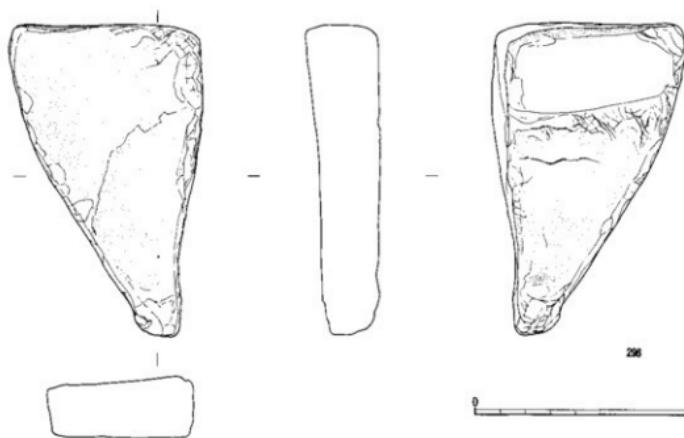




294



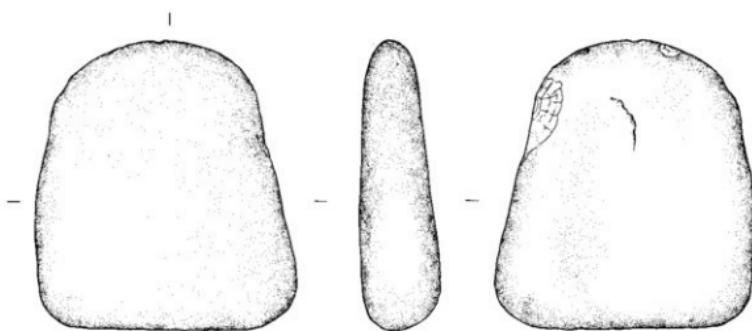
295



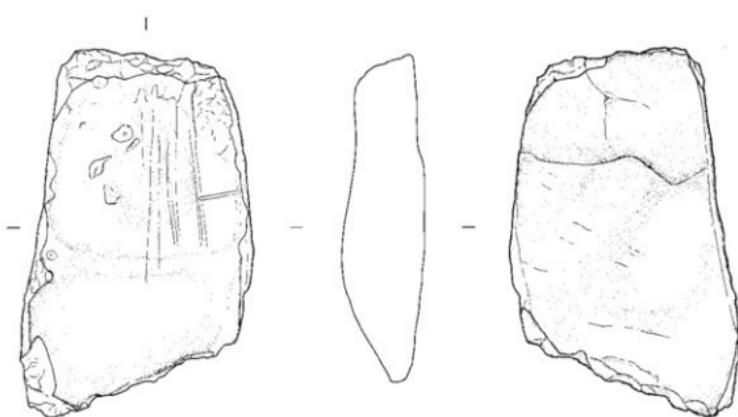
296



第59図 C地区出土遺物実測図(23)(1:4)



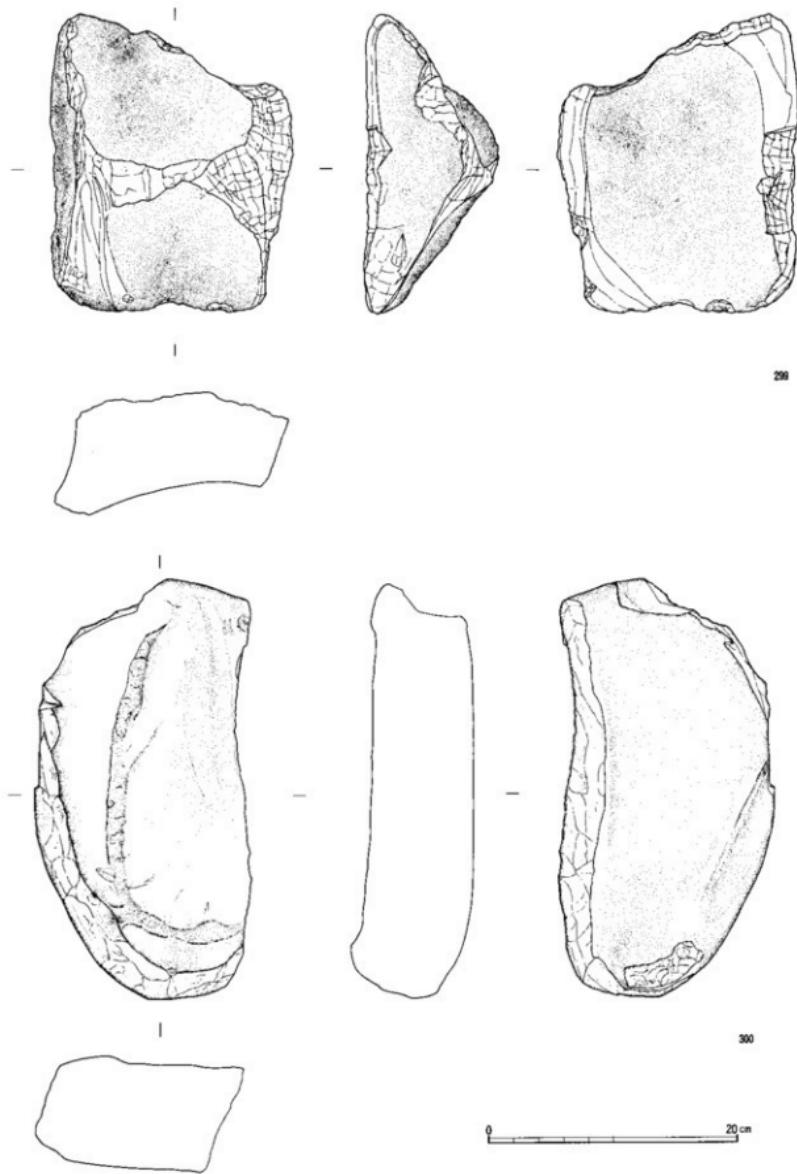
297



299



第60図 C地区出土遺物実測図(24)(1:4)



第61図 C地区出土遺物実測図〈25〉(1:4)

4. D地区の調査

(1) 遺構

D地区はC地区の東南部と隣接する調査区であるが、地元で「クロクワ」と呼ばれる土壤の天地返しが広範囲にわたって行われており、さらに風倒木を含めた樹木の根による攪乱のため、調査区のかなりの部分で遺構検出を困難にしている。

従って若干の柱穴などを除くと、明らかな遺構と呼べるものは認められず、C地区の竪穴住居跡群もD地区までは広がっていないようである。

遺物は縄文土器を中心に包含層中や攪乱土中から出土しており、とくに縄文後期の土器が多い。弥生土器はほとんどみられず、C地区との隔絶性は大きい。

(2) 遺物

出土した遺物の大部分は縄文土器で、若干の弥生土器を含む。縄文土器は深鉢および浅鉢があり、磨消縄文が施されるもの(301~332)、条線文が施されて

いるもの(333~352・358)が主体となるが、無文が内外面とも研磨される精製の浅鉢(360)やキザミメを施した縦方向の隆帯をもつもの(353)、円形の刺突文を口縁部に施した波状口縁のもの(355~356)などがある。

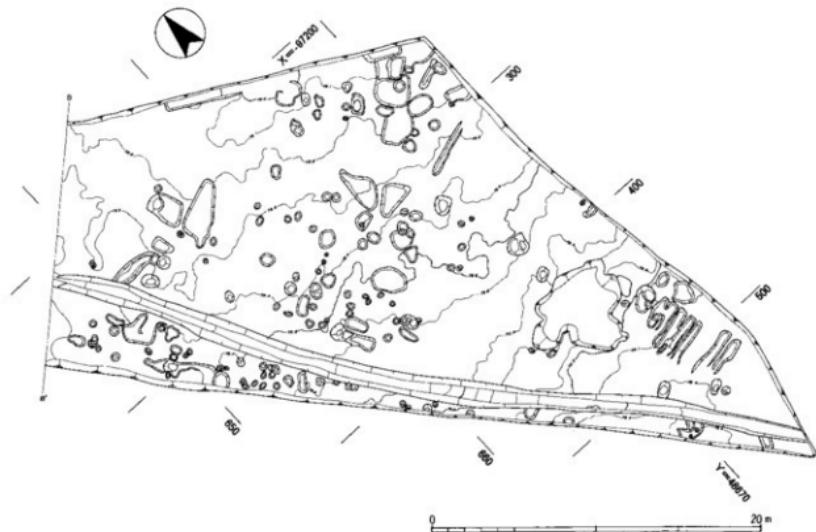
磨消縄文を施すもの(301~332)は、やや幅広の沈線間に縄文または擬縄文をもつもので、口縁端部の拡張も顯著でないものが多く、後期初頭の中津式の範疇におさまる一群と思われる。

弥生土器(361~366)は細頬壺、甕などがあり、細頬壺(361)は口縁部外面に波状文をもつ。(362)の甕は山形口縁となるもので、近江地方と共通する特徴を有するものである。(366)は甕の体部片で、直線文と無文帶を交互に配し、直線文帯には縦線によって分断されている。

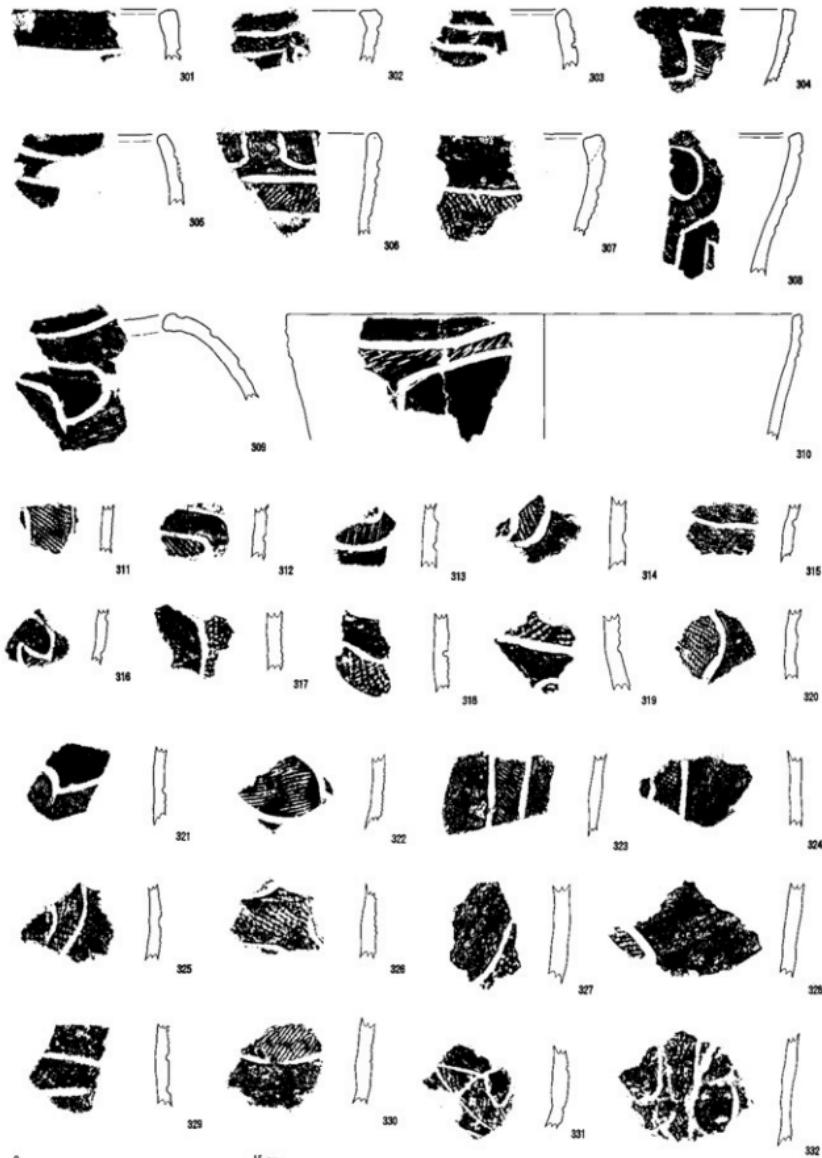
以上の弥生土器はその特徴から、弥生中期中葉と考えられるものである。

(3) 小結

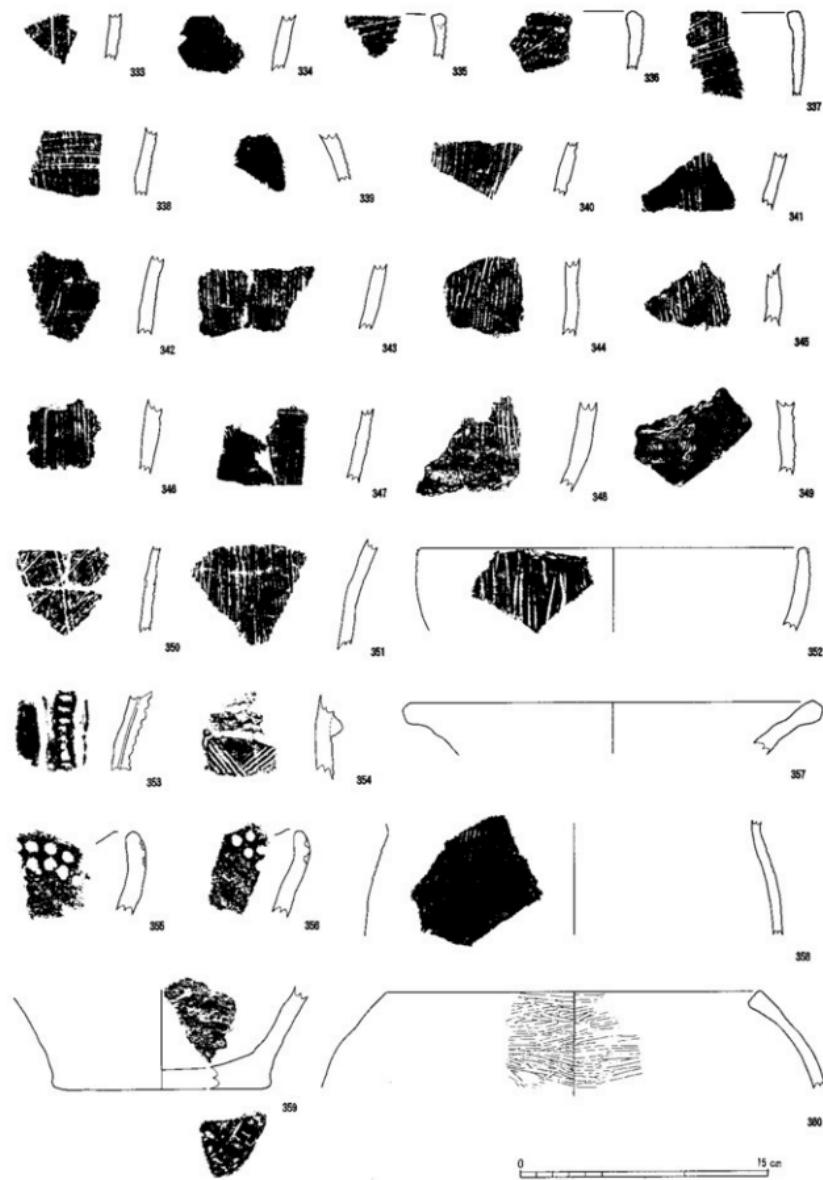
D地区は攪乱が多いこともあって、遺構はほとん



第62図 D地区遺構図(1:300)



第63図 D地区出土遺物実測図〈1〉(1:3)



第64図 D地区出土遺物実測図(2)(1:3)

と認められなかつたが、縄文後期の土器を中心に遺物が出土している。

出土した縄文後期の土器は、磨消縄文を施すものは中津式に相当するもので、条線文の施されたものもほぼそれに伴う時期のものであろう。

縄文後期初頭の遺物が比較的まとまって出土したことにより、当調査区では検出しえなかつたものの、同時期の遺構が近在する可能性は大きい。

5. E地区の調査

(1) 遺構

E地区はD地区と小径を挟み、段丘崖に沿つた低地部を見下ろすことができる位置にある。微地形的には全体的に段丘崖に向つて緩やかに傾斜している。

調査区の西端の小径に沿つて墳丘状の高まりを調査前から確認しており、古墳等の存在を推定していた。調査の結果、墳丘状の高まりは方形周溝墓と判明した。また、調査区のやや南寄りの段丘崖近くで検出された土坑状の浅い掘り込みは、前方後方形周溝墓に伴う溝の一部と考えるに至つた。

方形周溝墓 S X19 (第67図)

調査前の高まりが方形周溝墓の墳丘部分と判明したが、周囲を削り出して形成された高まりであり、盛土は現状では確認できなかつた。

周溝の中央部が切れて陸橋となるもので、いわゆるB型墳と呼称されるものである。墳丘中央付近には南北方向に主軸をもつ木棺直葬と思われる墓塚を検出したが、遺存状態が悪く棺の形状等を推定するまでには至らなかつた。

墳丘規模は、周溝内側下辺で約9m、周溝外周を

含めると、約11.5mとなる。また墓塚の規模は、長さ2.9m、幅1.2~1.3m、棺痕跡は、長さ1.9m、幅0.5m前後となる。

供獻遺物とみられる土器が、墓塚上と周溝内から出土したほか、墳丘を覆う旧表土である黒色土中を中心に、縄文土器の小片が多く出土した。

前方後方形周溝墓 S X20 (第69図)

遺構としては浅い土坑状の掘り込みがE地区中央から南寄りに連続して検出された程度で、墳丘そのものはまったく残存していない。

S X20を前方後方形周溝墓とみる想定根拠をあげるならば、屈曲して連続する深い土坑状の掘り込みは、前方部前面から後方部とのくびれ部にかけての周溝部に相当することと、出土遺物が赤彩されたものを含む壺に限られることである。

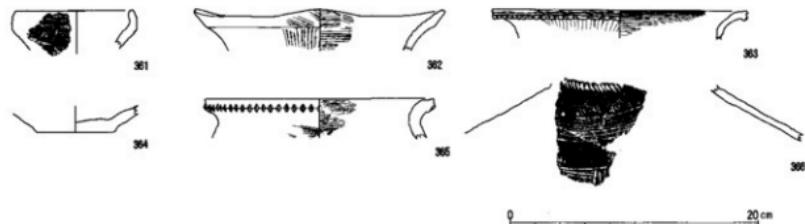
S X20の規模については、その遺存状態の悪さからまったくの推定となるが、全長30m以上、前方部長11m程度に復原が可能ではないかと思われる。

また、E地区を含めて今回調査した宮山遺跡の範囲内から、まったくこれら墳墓以外に弥生時代後・末期の遺構・遺物が認められない点も状況証拠の一つとしてあげておきたい。

(2) 遺物

E地区から出土した遺物は方形周溝墓 S X19、前方後方形周溝墓 S X20に伴うもののほか、縄文後期の土器、石器、弥生後期の土器、中・近世の土製品、錢貨などがある。

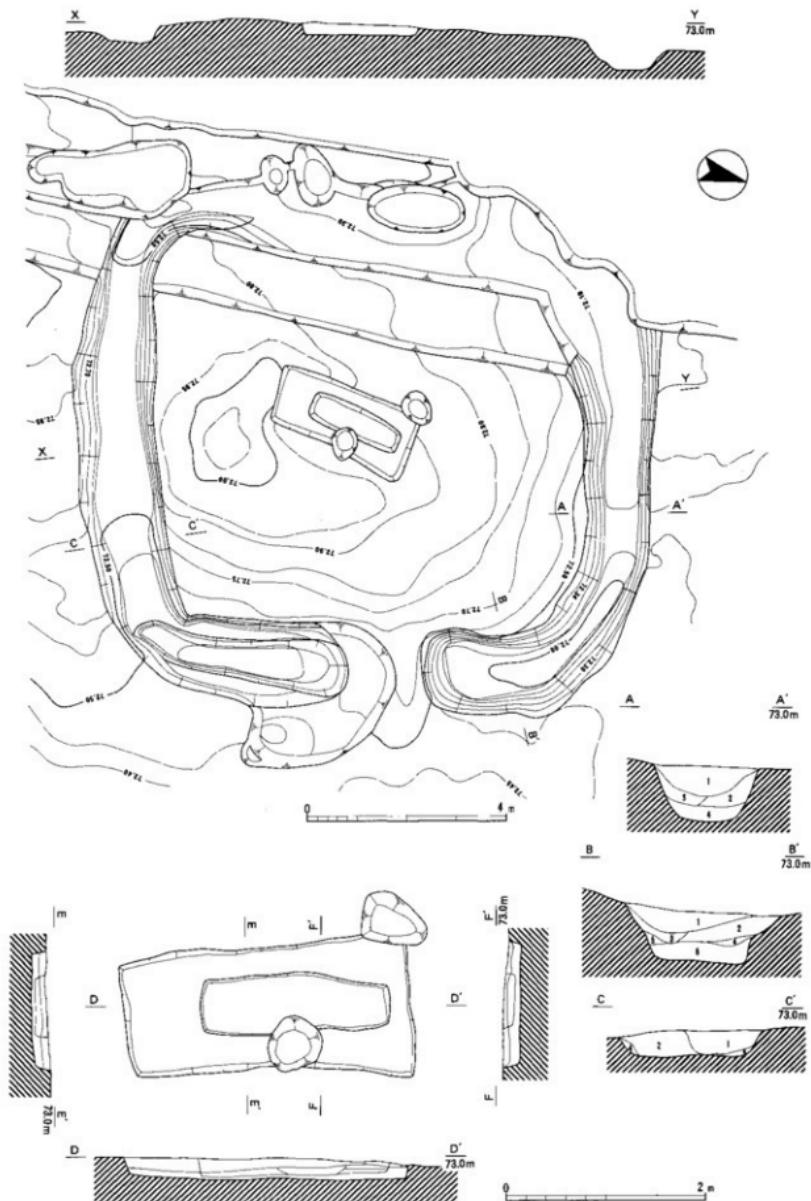
方形周溝墓 S X19の出土遺物(367-368)のうち、(367)が墓塚上から出土した台付壺で、外上方に開く口縁部と中央やや下に最大径をもつ胴部を大きく



第65図 D地区出土遺物実測図(3)(1:4)



第66図 E地区地図 (1:300)

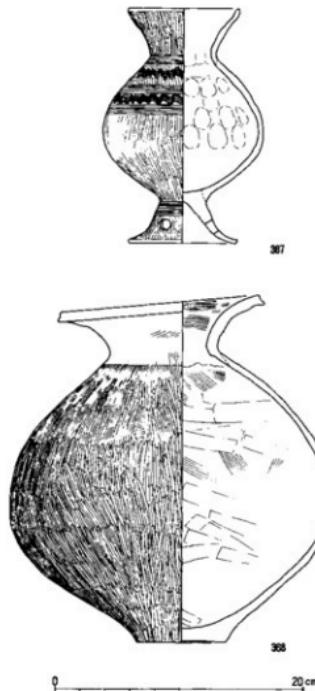


第67図 方形周溝基SX19実測図（1:100主体部は1:50）

開く脚台がつく。頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文と波状文を交互に施すほか、脚台部にも直線文を施す。また、脚台中央には円孔を穿つ。

(368) は外上方へ大きく開く口縁部をもつ広口壺で、胴部外面は全面的にヘラミガキが施されるものの、文様はもたない。ほぼ胴部中央付近に最大径をもつ。

前方後方形周溝墓 S X20の出土遺物 (369~376) はいずれも広口壺と考えられる。文様で加飾されたものは出土したものの中では見当たらなかつたが、(371-372) は頸部に突帯をもち、加飾壺の可能性がある。また、(374~376) の胴部外面にはハケメが施されており、S X19出土の壺がヘラミガキされているのと比べると、時期的にやや下るものと考えられ、S X19→S X20という時間的な前後関係をもつと思われる。



第68図 方形周溝墓SX19出土遺物実測図 (1:4)

遺構出土以外の遺物のうち、縄文土器 (377-378・382~402) は、(378) が後期後半、(400) が時期の特定が難しいことを除くと、いずれも磨消縄文をもつ後期初頭の中津式に相当するもので、(377) からすると、口縁部に沿って横走りする縄文帯から筋錐文が垂下する中津式でも古相に属するものである。

(403) は弥生後期の広口壺の胴部上半の小片で、櫛描直線文と刺突文を交互に施す。

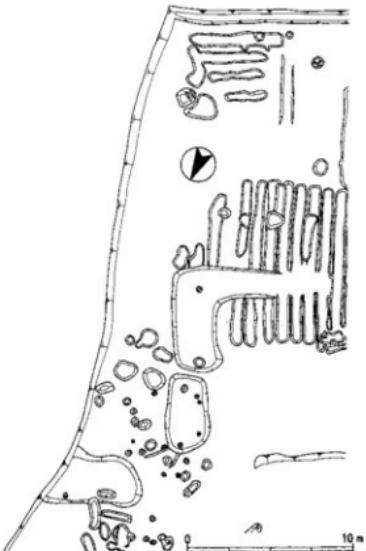
(404-405) は切目石錐で、(404) についてはE地区の北西、通称「田子の宮」と呼ばれる地点で表探したものである。

凹石 (406) は側縁に敲打痕が認められ、中央に窪みをもつ。

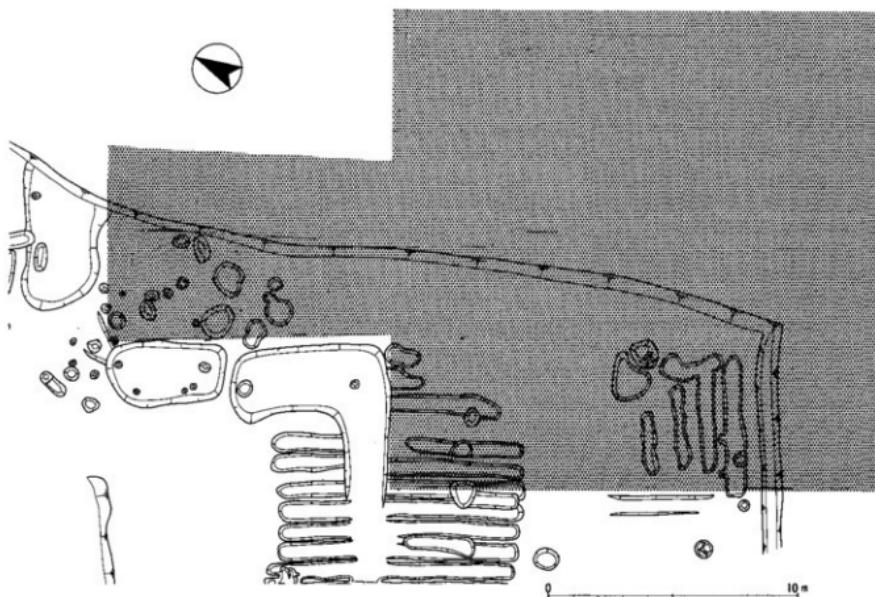
他に (380) は瓦ないし瓦製品を円形に打ち欠いたもので、いわゆる「加工円盤」と呼ばれるもので、銭貨 (381) は「寛永通宝」である。

(3) 小 結

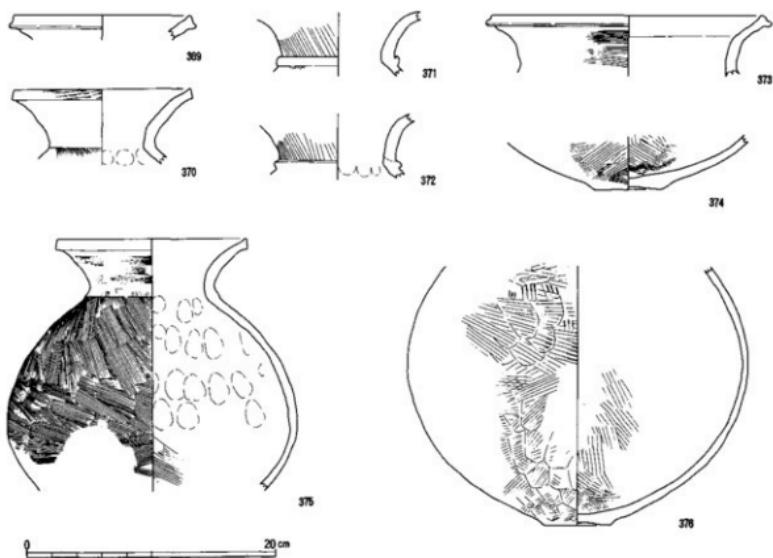
E地区では弥生後期末の墳墓が2基検出された。しかし同時期の住居跡等は調査区内からはみつかっておらず、墳墓も2基が時期的に前後し、同時に



第69図 前方後方形墳丘墓SX20実測図 (1:300)



第70図 前方後方形埴丘墓SX20推定復元図 (1:200)



第71図 前方後方形埴丘墓SX20出土遺物実測図 (1:4)

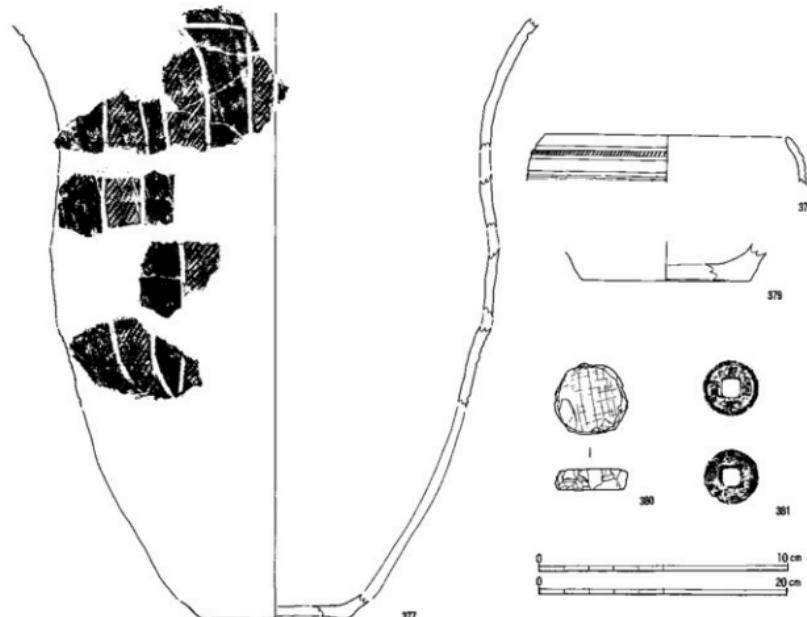
複数の墳墓が築かれた様子はない。

増加には期待できよう。

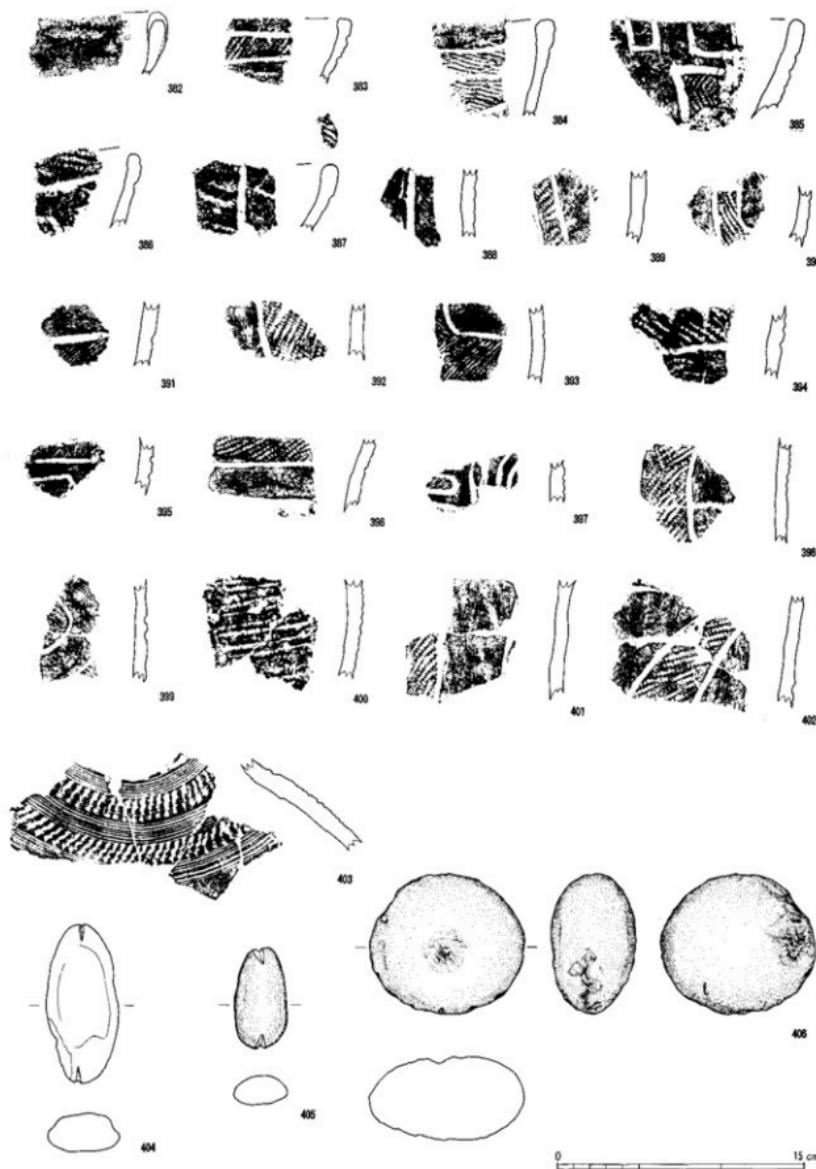
みつかった2基の墳墓は、溝中央部に陸橋をもつ方形周溝墓であるSX19と、前方後方形周溝墓と考えられるSX20があり、前者がやや古く、後者は後出する。出土遺物からすると前者は題問I新段階で、後者は同II新段階に相当すると考えられる。

ところでSX19に関しては問題がなかろうが、SX20は墳丘はおろか周溝すら局部的にしか遺存していないため、墳墓と決めつけるのは異論の余地も大きかろう。

しかし前述したように、遺構的には前方部全面からくびれ部にかけての周溝部に相当するとみられる土坑が存在すること、遺物の上からは赤彩されたものと含む壺の出土に限られることなどから、敢えてこれを前方後方形周溝墓の一例に加えることとした。SX20についてはこれ以上の追認は困難であるが周辺地域での発掘調査が進めば、あるいは状況証拠の



第72図 E地区出土遺物実測図 (1:4,381のみ1:2)



第73図 E地区ほか出土遺物実測図 (1:3)

IV. 調査成果のまとめ

1. 縄文土器について

現在、宮山遺跡と同じ在所の大神社には、柄部に精巧な文様を施した石刀をはじめ、石棒や御物石器などが神宝として保管されているが、これらの出土地の有力な候補地は宮山遺跡といわれている。今回の調査ではそれに匹敵するような縄文時代の石器はみられなかったが、D地区およびE地区で後期を中心とした土器片が多数出土したほか、B地区では晩期末の土器も若干出土している。

D・E地区の縄文土器はいずれも破片で、同時代の遺構に伴うものではない。中期あるいは晩期と考えられるものもわずかにみられるが、ほとんどが後期前半のもので、中津式～福田KⅡ式に属するものが中心である。

当該期の土器は、近年県内の多くの遺跡で出土しており、宮山遺跡の近辺でも北勢町覚正垣内遺跡で中津式初頭の堅穴住居跡や埋設土器などがみつかっている。

D・E地区の縄文後期の土器は、二本単位の沈線間に縄文を施すもので、三本単位の沈線を巡らす福田KⅡ式の新段階やそれ以降の縁帯文土器は若干の例外を除いてほとんどない。従ってD・E地区出土のものは中津式あるいは福田KⅡ式でも古段階に留まるものが主体を占めると判断できる。

一方、B地区で出土した晩期の土器は、突帯文系のものと条痕文系のものがあり、土器棺墓SK18で両者が用いられている。

SK18は棺身に用いた土器が素文のやや細い突帯を一条めぐらすもので、これに伴った棺蓋の土器は粗い条痕調整されたもので、条痕の特徴や口縁部の形態などから、「櫛王式」に併行するものではないかとみられる。

他から出土した突帯文系土器は、指による幅広のO字状となる押圧を加えた一条突帯を口縁部下にもつもので、伊勢湾西岸地域の縄文晩期末の土器編年を行った鈴木克彦氏によるIV期に比定できよう。

従ってB地区で出土した晩期の土器は、実際は弥生前期の遠賀川系土器と併行する可能性があるが、

宮山遺跡からは当該期の弥生土器は伴っていない。

ただ、宮山遺跡よりさらに上流域の北勢町東村城跡から、前期新段階とみられる遠賀川系土器の壺の破片が出土しており、弥生文化の到達は伊勢地方の海岸部と比べても著しい遅れがないと考えられるところから、B地区出土の突帯文系土器などは弥生文化到来の直前段階に相当するものかもしれない。

また、C地区で小片ではあるが浮線文系の土器とみられる浅鉢片が出土した。口縁部下に突帯をもつ点や、浮線文様の特徴から大洞A式段階に相当するものと思われ、先の突帯文系土器と近い時期が考えられる。

2. 縄文晩期の平地住居について

B地区とC地区の一部で検出された柱穴群は、その配列から環状あるいは多角形にめぐる平地住居跡の可能性を考えた。

この場合、最も問題になるのは柱穴群の時期であろう。一般に柱穴から出土する遺物は少なく、その時期比定は困難な場合が少なくない。こうした柱穴が多時代にわたる複合遺跡でみられるならば、柱穴だけではほぼその時代を特定することは不可能であろう。

しかし、B地区の場合、包含層中から出土する遺物もほぼ縄文晩期から弥生時代中期に属するものであり、掘立柱建物が普遍化する時代のものではない。

また、三河湾・伊勢湾周辺の縄文時代の住居について研究を進めている岩瀬彰利氏によれば、当遺跡でみられたような環状ないし多角形配列の柱穴群は、氏の住居構造の分類のなかでも一種の平地住居跡と捉え、このタイプの住居は晩期に沿岸部を中心に分布を広げていることを指摘している（岩瀬1997）。

宮山遺跡B地区でも、S236で地床炉と考えられる浅い掘り込みをもつ跡が確認されており、柱穴群を平地住居として捉えるに妥当であることを証明するものと考えている。

ただ、課題として残すことは掘立柱建物の抽出と同様、多数ある柱穴のいずれを組み合わせて住居跡

と認定するかであろう。今回は前章の報文の通り、B地区で20基、C地区で2基の計22基を抽出した。

これらを平地住居跡として稿をすすめると、その規模から5mほどの小型のものと、8mにもなる大型のものがある。各住居跡は重複が著しく、柱穴掘方の形状はほぼ直上に立ち上がり、直立した柱が掘えられたものと思われ、その住居構造はかなり簡易的な構造が考えられる。

また、炉跡はS Z36以外からは確認されておらず、S Z36の炉跡も焼土は薄く、長期間にわたり使用されたとは考え難い。

従って今回検出し得た平地住居跡群は、短期間あるいは季節的に設営・廃棄を繰り返したと思われ、同時に存在する住居数は少ないと思われる。

3. 弥生中期の住居群の特徴と広がり

今回の調査でB地区に1棟、C地区に12棟の堅穴住居跡を検出した。すべて弥生中期に属するもので、堅穴住居の平面形をみると、B地区的SH1が円形と考えられるほか、正方形のもの（SH2～4・7・11）と長方形のもの（SH5・6・8～10・12・13）のものとがある。

都出比呂志氏は、弥生時代の堅穴住居を列島の東西で比較し、その平面形態が求心構造の円形が主流となる西日本と対称構造の長方形を含めた方形が主流となる東日本といふような地域差が生じることを明らかにし、おむねその境界は前期の遠賀川文化圏と重なり、伊勢地方は当時の資料段階では西日本型である円形構造の住居が弥生時代を通して主流となると考えられた（都出1985）。

しかしその後、伊勢地方でも長方形の平面形態となる堅穴住居跡が、津市長遺跡や山籠遺跡などで多數見つかり始めた。これらは中期後半に属するものが中心と考えられ、少なくとも中勢地域の安濃川流域では、この時期に特徴的な平面形態となってきた。

宮山遺跡で確認された堅穴住居跡の平面形は、長方形のものと正方形に近いものとが割合的には半々といった程度だが、円形と考えられるものは1例のみで、他は対称構造の方形を基本とする。

これらの方形の堅穴住居が、東日本に多いタイプのものと解すると、住居構造の点において弥生中期の

伊勢地方には西日本よりも東日本的な要素が強いということになる。

炉跡をみると、SH1とSH12が石圍炉と考えられるほか、SH10で地床炉が検出されたが、他の住居跡からは炉の痕跡は確認することができなかった。また、検出された炉跡も焼土・灰とも薄く、長期間継続した使用は認め難い。

各堅穴住居跡群は出土遺物も少なく、ほとんどが埋土中の出土と考えられ、床面直上遺物が少ない。そのため各住居跡の新旧関係を明らかにするのは難しいが、重複した関係にあるものをあげると、SH3とSH4、SH5とSH6、SH9とSH10がある。このうちSH3とSH4とではSH4が、SH9とSH10とではSH10がそれぞれ新しい。しかしSH5とSH6とでは重複がありにも大きく、建て替えと判断できるが、その新旧は不明である。

また、堅穴住居の方位や位置関係および堅穴住居の平面形態からすると、調査区内では単独にしかみつかっていないB地区的SH1は除き、C地区的SH2～8の7棟、SH9～11の3棟、そしてSH12およびSH13の2棟が、比較的まとまりをもつ。これに掘立柱建物を加えると、SB14がSH2～8の近くに、SB15～17がSH12と13の近くに位置することがわかる。

さらに細かくみていくと、SH2～8、そしてSB14を加えたグループは、SH3と4、SH5と6が重複し、同時期には存在しない。同様にSH9～11のグループは、SH9と10が重複し、SH12・13、そして掘立柱建物のSB15～17を加えたグループは、SH12とSB15・16とが重複し、やはり同時期のものではないと判断できる。

4. 磨製石斧の製作とムラの性格について

C地区より出土した総数68本に及ぶ磨製石斧の未成品および完成品や、敲打具・台石・砥石などの工具類、そして剝離段階に生じるとみられる破碎石片の存在は、宮山遺跡で磨製石斧の製作を行っていたことを示すものである。

石斧未完成品や破碎石片は、堅穴住居内などからはほとんど出土せず、また廃棄土坑などに一括されることもなく、周辺に散乱しているような状況で出土

している。二次的な移動も考えるべきだが、離れた地点から出土した石斧未完成品の破片が接合するなどの現象も認められた。

出土した石斧の总数のうち、未完成品は59本で、刃部の研磨が認められる完成品が9本あり、未完成品には剝離段階のものと敲打段階のものの両者があり、これらのほとんどのものが欠損あるいは変形しており、完成品前段階の保管品というよりは失敗作とみるほうが妥当である。

また、刃部を研磨した完成品とみられるものでも、刃部以外の研磨はほとんど認められず、その全体の形状も一般的な完成品として集落に流通しているものからすると変則的なものが多く、本来製作工程のなかで生じた失敗品あるいは不良品のうち、最低限度使用に耐えるものに刃部を作り出し、活用したと考えられる。

これら二つの点から考えられることとして、宮山遺跡での磨製石斧の製作は完成品を他所へ出荷し、自らのムラでは良品でないものに改めて刃部を作り使用していた可能性がある。

さらに石斧の研磨に用いる砥石の出土が決して多いとはいえない、宮山遺跡での石斧製作が研磨段階にまで及ばずには他所に運び出されたものもあったと思われ、石斧の刃部の研ぎ出しが各消費地遺跡で個別に行われた場合もあったとの推定ができる。

そして集落の性格という視点から宮山遺跡をみた場合、次にあげる二通りの解釈が考えられる。

一つは宮山遺跡は、他所にある拠点的なムラの出先機関のような存在で、ここで生産した良質の完成品は、拠点集落を通じてかなり広域に流通した。宮山遺跡自体は、あくまでも石斧製作のためのムラで、一般的なムラとは異なり、ある季節あるいは必要に応じた一時的なムラと解釈でき、食糧生産など自立的な生活は営まれていなかったとみることである。

今一つは、今回の調査範囲外にも住居群が続く可能性があり、さらに段丘下の低湿地に可耕地をもち、食糧生産も当然行われ、全体として宮山遺跡は石斧生産をも一つの資産として集落内分業の進んだ、いわば専門的な集団を内包する自立した集落の一部として存在したとみることである。

そこで宮山遺跡の特徴を今一度まとめて挙げると、

・宮山遺跡の堅穴住居に炉の使用が顕著でない。

・磨製石斧およびその製作工具以外の石器がほとんどみられない。

・宮山遺跡で実際使用された磨製石斧は、本来製作途上の失敗品ないし不良品とみられるものを活用しており、良質の完成品がまったくみられない。

・石斧石材の原石の産出する所に遺跡が立地している。

・堅穴住居群が中期後半を境に無くなり、集落の移動または廃絶が想定される。ただし、後期末には墳墓が築造されている。

などといった点がある。

以上のこととは宮山遺跡が恒常的・自立的集落でなかったとみる前者の解釈にとって総じて有利な特徴といえる。とくに良品の石斧を遺跡内で使用していないという点は、前述したようにそれらは他所に供給することを第一義とし、自家消費のものとしないことを示す。

従って、原石を容易に入手できる所に設けられた作業所的なムラというのが宮山遺跡の性格を端的に表す表現であろうか。また、宮山遺跡の立地を今一度みると、集落の眼下には伊勢湾の湾口にまでつながる水運の良い員弁川の存在にも気づく。

こうした解釈をすると、宮山遺跡に足跡を残した集団は、石斧生産に対して強い専業性を發揮し、他地域と交易は拠点的な集落の介在があったとしても、その母集団から食糧ほか生活物資の保証を受けたある程度独立性のある集団として宮山遺跡を拠点に活動したとの見方はできず、むしろ農閑期を利用した季節的労働、すなわち農業との未分離な半農的な集団という印象が残り、弥生時代の社会的分業のなかでの石斧製作の専業性という点ではその位置づけはやや弱くなる。

これは可能性の問題であるが、磨製石斧はあくまでも生産手段のための工具であり、その主な用途は建築材や木製品の製作にあったことから、少なくともそれらの原材料の伐りだしと石斧の製作とは、これに携わった集団を切り離して考えずとも良いのではないか、という点である。

すなわち、磨製石斧の製作も一つの生業とするがこれにこだわらず、さらに別所では木製品の原料の

伐り出し、運搬までを視野にいれた、いわば「山の民」としての社会的分業も考慮してみる必要はないであろうか。

また、棟持柱をもつ掘立柱建物は、高床構造と考えられるが、祭祀的な性格を有する建造物や、石斧の収納施設とみるより、ここでは石斧製作集団の食糧を備蓄するための食糧庫とみる方がより妥当でないかと思われる。

5. 弥生末期の墳墓について

E地区でみつかった墳墓は、B1型墳と呼ばれる周溝の中央に陸橋をもつ方形周溝墓SX19と削平が著しく、遺存状況はきわめて良くないが、B3型墳とされる前方後方形周溝墓の可能性が大きいSX20とがある。

調査範囲内から同時期の住居跡はみつかっておらず、墳墓のみが築かれたことになるが、今回の調査区のほか、試掘結果から考えて、墳墓の南側や西側には住居跡も墳墓も確認されていない。もし住居群の可能性があるとすれば、E地区的北側か段丘崖で崩落の著しい東側に位置していたことになろう。

今回確認された2基の弥生墳墓のうち、SX19は調査前から高まりを残していたため、古墳等の構築物との推定を行っていたが、結果として盛土はほとんどないものの、方形周溝に画された一辺9mほどの墳墓であることが判明した。墳頂付近と周溝の一部から供獻されたとみられる土器が出土している。

これに対し、SX20は調査前にはまったくその痕跡を残しておらず、遺構としてもわずかに浅く土坑状の落ち込みがみられたのみであった。

しかし、2、3ヶ所でみつかった土坑状の落ち込みは寸断されてはいるが、本来連続したものとみると、ちょうど前方部前面から後方部とのくびれ部にまで至る屈曲に合致することがわかった。また、出土遺物が一部赤彩の痕跡をもつ壺形土器のみの破片であったことも、通常の廐窓土坑などとの相違点としてあげられよう。

残念ながら、後方部に関しては周溝についてもまったくその痕跡を残しておらず、全体の規模を推定することを困難にしており、しかも前方後方形周溝墓とみた場合、墳丘の縦半分ほどが段丘からはみ出す

こととなる。しかし、片岡博氏の聞き取りによると、宮山遺跡が所在する片瀬の段丘は、砂利採集も影響して段丘崖が崩壊を繰り返し、現在に至るまで数mほど段丘を後退させてきたという（片岡1997）。従って、SX20付近でも段丘が崩壊し、SX20の墳丘および周溝を破壊してきた可能性が大きい。

また、宮山遺跡とは員弁川を挟んで対岸の段丘上には、測量調査で前方後方墳と確認された麻績塚1号墳も立地し、これまで三重県内では一志郡の嬉野周辺に限られていた前方後方墳の分布が拡大する可能性をもつて至った。

麻績塚1号墳が位置する員弁川中流域の北勢町および大安町を含めた員弁郡周辺に前方後方墳の分布域が形成されていた可能性があるならば、その前段階の前方後方形周溝墓が宮山遺跡周辺で確認されても不思議はない。

むしろ昨今、尾張・美濃地方を中心とした東海地方で前方後方墳および前方後方形墳が急増しつつあり、宮山遺跡や麻績塚1号墳が所在する北勢地域もその枠組みの中に入れて考えたほうが良いのだが、さらに伊勢地方全体で考えると、SX19のようなB1型墳が四日市市大谷遺跡をはじめ館野町下之庄東方遺跡、松阪市草山遺跡、漸干遺跡、明和町寺垣内遺跡、多気町上ノ垣外遺跡などでこれまでみつかっている。

これに対し、陸橋部に発達したB2型墳や前方後方形となるB3型墳はあまり明らかでない。ただ、松阪市大足遺跡で前方後方形の墳墓に伴うとみられる周溝の一部が調査されており、周溝埋土下層より宮山遺跡SX20よりやや新しい土器が出土している。

従ってB型墳と呼ばれる墳墓は、伊勢地方南部である南勢地域にも広くみられ、むしろ分布上の一つの核となる地域とみなすことができる。

ところが南勢地域の場合、前方後方墳にまで昇華したのは嬉野町の中村川流域周辺のみであり、松阪以東の各地域は足並みを揃えることはなかった。

北勢地域では麻績塚1号墳の他には明確に前方後方墳を指摘することは現状では難しいが、例えば前期古墳であることが判明している四日市市志恵神社古墳は、すでに前方部は破壊されているものの、残された部分は現地あるいは測量図からの観察による

と、從来径30mほどの後円部とみなされてきたが、これより一回り小さい一辺27mほどの後方部とみなすことも可能ではないかと思う。

中勢地域にある津市・安濃町を含む安濃川流域は、納所遺跡や長遺跡といった弥生時代の代表的な遺跡を擁する地域だが、後期の墳墓の発見例も少なくない。

しかしこの地域では主に津市高松遺跡や安濃町大城遺跡、前田遺跡といった方形台状墓が丘陵部から発見されることが少なくなく、津市坂本山古墳群のように古墳時代前期に至っても同様の現象が続く。このような中勢地域の安濃川流域での状況は、北勢地域と南勢地域を繋ぐことなく、墳墓形態の上では両地域を寸断している。伊勢地方の弥生終末から古墳出現期に至る地域プロセスを解明しようとする場合、この点も見逃すべきではないであろう。

参考文献

- 岩瀬彰利（1997）「三河湾・伊勢周辺地域における縄文時代住居の変遷について（1）—三河・尾張編—」『三河考古』第10号
- 片岡博（1997）「大久保城跡」『一般国道475号東海環状自動車道 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』
- 都出比呂志（1985）「弥生時代住居の東と西」『日本語・日本文化研究論集』

試験番号	地名	土質	出土	出土量(g)	測定値(mm)	測定・検査	出土	焼成	色調
1 009-03	佐土器	砂質土	口 直	4.6	11.0	石器の口縁部に4条の凹線と両側面がめぐらし。	石英・白色軟粒む。やや細い。	外：汚黄褐色10YR8/4 内：灰白褐色2.5YR8/2	好
2 002-04	佐土器	土	佐吉寺	16.0	3.4	口縁部が丸らしく、口縁部下端にキサメを施す。口縁部内面にはヨコ方向のハメを施す。	ウンモ・石英粒多く含む。	内：灰青色10YR4/3	好
3 002-02	佐土器	土	佐吉寺	8.5	8.5	口縁部が丸らしく、口縁部下端にキサメを施す。	石英・白色軟多く含む。	緑褐色10YR6/6	好
4 002-01	佐土器	広口壺	佐吉寺	20.0	4.9	やや内側の口縁部が腰状で強く外反する。外面にはハメを施す。	石英・白色軟多く含む。	外：灰青色10YR6/2 内：灰白褐色10YR7/4	好
5 004-02	佐土器	受口壺	佐吉寺	23.8	3.1	口縁部が直線的に立ち上がり、受口となる。外面に凹縞文をめぐらす。	白色粒を含む。やや細い。	内：灰白褐色10YR6/4	好
6 009-02	佐土器	壺	佐吉寺	9.5	2.8	口縁部がくの字に外反する。口縁部にキサメを施す。	やや粗い。	外：汚黄褐色10YR6/6 内：黄褐色10YR8/6	好
7 006-01	佐土器	壺	佐吉寺	13.2	2.2	口縁部がくの字に外反する。内面にはハケ基部により波状文をめぐらす。	石英・白色軟粒む。やや粗い。	外：灰青色10YR4/2 内：灰白褐色10YR8/1	好
8 006-01	佐土器	壺	佐吉寺	18.5	5.0	口縁部がくの字に外反する。口縁部にキサメを施す。内面にはハケ基部により波状文をめぐらす。	石英・白色軟粒む。やや粗い。	外：汚黄褐色10YR4/3 内：灰白褐色10YR8/6	好
9 007-02	佐土器	壺	佐吉寺	18.6	3.4	口縁部がくの字に外反する。内面にはハケ基部により波状文をめぐらす。	石英・白色軟粒む。細い。	外：汚黄褐色10YR4/2 内：灰白褐色10YR7/6	好
10 004-01	佐土器	壺	佐吉寺	26.0	10.6	口縁部がくの字に外反する。内面にはハケ基部により波状文をめぐらす。	白色軟粒む。やや粗い。	内：灰白褐色10YR7/4	好
11 007-01	佐土器	壺	佐吉寺	22.2	16.5	口縁部がくの字に外反する。口縁部にキサメを施す。体部外観はトマト型を施し、内面にはヒザメを施す。	石英粒など含む。やや粗い。	外：汚黄褐色10YR7/2 内：明褐色10YR8/8	好
14 010-06	佐土器	壺	佐吉寺	—	—	外面は灰皮文と直縞文で切替られた円周状突起をめぐらす。	石英・白色軟粒む。	外：灰褐色10YR8/6	好
15 011-03	陶文土器	鉢	佐吉寺	—	—	2条の縦溝の底面に区切られた塊状者をもつ。いわゆる唐縫文土器。	石英・白色軟粒む。やや粗い。	外：小汚褐色10YR8/3 内：灰白褐色10YR4/4	好
16 011-04	佐土器	壺	佐吉寺	—	—	直縞文およびその上下に直縞文をめぐらす。	石英・白色軟粒む。やや粗い。	外：灰褐色10YR8/2	好
17 020-05	佐土器	壺	佐吉寺	—	—	底部に区切られた縞文突起をもつ。	石英・ウンモ・白色粒・赤色軟粒含む。やや粗い。	内：灰青色10YR7/2 外：灰青色10YR7/2	好
18 005-03	佐土器	壺	佐吉寺	3.4	直径5.2	平底の直縫。	石英・白色軟粒含む。粗。	外：黑褐色2.5YR3/2	好
19 009-04	佐土器	直筒	佐吉寺	4.1	直径7.4	平底の直縫。	石英・白色軟粒む。やや粗い。	外：灰白褐色10YR7/3 内：灰白褐色2.5YR8/2	好
20 009-01	佐土器	直筒	佐吉寺	3.4	直径5.3	平底の直縫。	白色軟粒含む。粗。	外：灰褐色3.5YR8/6 内：灰白褐色10YR8/4	好
21 005-02	佐土器	直筒	佐吉寺	4.7	直径13.0	平底の直縫。	石英・白色軟粒含む。やや粗い。	外：灰褐色3.5YR8/6 内：灰白褐色10YR8/4	好
22 011-01	佐土器	直筒	佐吉寺	—	—	有付脚の直縫とみられる。	石英・白色粒・黑色軟粒含む。やや粗い。	外：灰褐色3.5YR8/2 内：灰白褐色10YR8/4	好
32 005-03	佐土器	直筒	佐吉寺	4.0	高台10	筒などの脚付脚とみられる。	ウンモ・石英・チャート粒多く含む。	外：灰褐色10YR8/3	好
34 005-01	佐土器	直筒	佐吉寺	9.0	直筒8.0	平底の直縫。腹の底部と思われる。	石英・白色軟粒含む。やや粗い。	外：灰白褐色10YR8/2	好
35 007-01	佐土器	直筒	佐吉寺	5.5	直筒7.4	平底の直縫。腹の底部と思われる。	石英・白色軟粒含む。やや粗い。	外：褐色7.5YR8/6 内：灰黄色10YR7/2	好

第1表 A地区土器観察表

回数 番号	全 錄	出 土 器 物	出 土 法 遺 墓	法 墓 (m)	調 査・古 法 の 等 級	地 土	燒 色				
							口 径	深 度	遺 墓	其の他	燒 色
28	001-01	鶴文土器	漆器	SX8	34.4	25.1	口縁がわざりに施された漆器。漆器が肥厚し、内側した面をもつ。外側は2枚重ねにより各部異質である。	石英・黒鐵面白色粒含む。	好	鶴色7.5YR6/8	好
29	003-01	鶴文土器	漆器	SX8	29.2	30.4	口縁部に鶴文の模様がいる。漆器上半は内側にはヨコ方向の直條とし、下半はミナス及びナメ方向に折る。	石英丸平、白色粒多く含む。やや粗い。	好	内：淡黄褐色3.5YR6/3	好
30	006-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	27.8	1.9	口縁部からやや下がった位置に鶴文の模様を加えた漆器が1本。内側にはみられず、内面に各處めぐらしく。	石英・白色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/4	好
31	005-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	20.4	7.9	口縁部からやや下がった位置に鶴文の模様を加えた漆器が1本。内側にはみられず、内面に各處めぐらしく。	石英・白色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/8	好
32	007-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	20.4	7.5	口縁部がやや下へと変形となる。内側にはみられず、内面に各處めぐらしく。	石英・ウンモ・白色粒含む。馬印。	好	外：暗色2.5YR6/6	好
33	009-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	20.4	7.5	漆器の片片。外側にはハマメが施されたものち、ヨコ方向にヘラで削り取った。文様をつくつ。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：明赤褐色2.5YR6/6	好
34	009-02	鶴文土器	竹筒型	佐吉層	5.8	解体0.5	漆筒形の片片。外側にはハマメが施されている。	石英・白色粒・黒鐵粒・赤色粒含む。	好	外：淡黄褐色3.5YR7/4	好
35	006-03	鶴文土器	漆器	佐吉層	3.1	底径14.8	やや上部に鶴文の模様の漆器。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：明赤褐色2.5YR6/6	好
36	005-02	鶴文土器	漆器	佐吉層	3.6	底径10.5	平底の漆器。底部外面に直條あり。	石英・白色粒・黒鐵粒含む。やや粗い。	好	内：にじいろ模様10YR1/4	好
37	009-03	鶴文土器	漆器	佐吉層	2.6	底径7.5	平底の漆器。底部外面に直條あり。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い。	好	外：暗赤褐色7.5YR6/6	好
38	006-04	鶴文土器	漆器	佐吉層	26.5	3.2	大きく外方に開く口縁部。口縁部に直條が彫られている。	石英・白色粒・黒鐵粒含む。やや粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好
39	013-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	25.0	5.1	大きく外方に開く口縁部。口縁部に直條が彫られている。漆筒形に直條が彫られている。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	好	外：灰黃褐色10YR6/2	好
40	008-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	29.0	3.2	大きく外方に開く口縁部。口縁部に直條が彫られている。漆筒形に直條が彫られている。	石英・ウンモ・白色粒・赤色粒含む。	好	外：灰黃褐色10YR6/2	好
41	008-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	29.7	5.8	口縁部が外反する。やや肥厚した口筒部の上端と下端にキリシマ模様が施されている。表面に鶴文が彫られている。	石英・白色粒・赤色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/4	好
42	008-04	鶴文土器	東	SRI	17.0	2.4	強く外反する口縁部。口筒部にギザギザを施す。口筒部前面にヨコカッタ。	石英・白色粒含む。	好	外：にじいろ模様7.5YR7/4	好
43	008-03	鶴文土器	東	佐吉層	16.2	2.9	強く外反する口縁部。口筒部にギザギザを施す。口筒部前面にヨコカッタ。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好
44	012-01	鶴文土器	東	SRI	28.2	5.9	強く外反する口縁部。口筒部にギザギザを施す。口筒部前面にヨコカッタ。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：灰褐色10YR6/2	好
45	005-02	鶴文土器	東	佐吉層	29.0	5.8	強く外反する口縁部。口筒部にギザギザを施す。外側に直條を彫る。	白色粒多く含む。	好	外：暗色2.5YR6/6	好
46	014-01	鶴文土器	東	佐吉層	—	やや外反する口縁部。外側に直條の突条をめぐらす。	石英・白色粒含む。粗い。	好	外：灰褐色2.5YR7/7	好	
47	006-03	鶴文土器	東	佐吉層	—	やや外反する口縁部。外側に直條の突条をめぐらす。	石英・白色粒・黑色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
48	010-02	奈良文土器	漆器	佐吉層	—	口縁部が外反する。外側に直條の突条をめぐらす。	石英・白色粒含む。	好	外：にじいろ模様10YR7/4	好	
49	013-02	鶴文土器	漆器	佐吉層	—	口縁部前面をもつ。外側に2条のやや太い直條をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：灰黃褐色10YR6/2	好	
50	006-02	鶴文土器	漆器	佐吉層	—	口縁部が外反する。外側に2条のやや太い直條をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
51	010-01	鶴文土器	漆器	佐吉層	—	外側に太い直條をめぐらし、椭円形の突条を側面に加える。	石英・ウンモ・白色粒含む。やや粗い。	好	外：にじいろ模様7.5YR7/4	好	
52	010-04	鶴文土器	漆器?	佐吉層	—	2条の直條に区切られた横條による文様をもつ。いわゆる唐草文。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：淡黄褐色10YR6/4	好	
53	013-05	鶴文土器	漆器	佐吉層	—	輪郭に直條で区切られた口字形文様をめぐらす。体側部は柔軟性がある。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：灰褐色2.5YR6/3	好	
54	010-05	鶴文土器?	漆器?	佐吉層	—	外側に輪郭をもつ。外側に2条のやや太い直條をめぐらす。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：灰褐色2.5YR6/4	好	
55	011-01	奈良文土器	漆器	佐吉層	—	外側に細い直條文を羽条に施す。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：西黃褐色10YR6/4	好	
57	004-02	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	石英・白色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
58	004-01	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	石英・白色粒含む。	好	外：西黃褐色10YR6/3	好	
59	013-04	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	白色粒含む。やや粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
60	003-03	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	白色粒含む。	好	外：西黃褐色10YR6/3	好	
61	013-03	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	白色粒含む。やや粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
62	014-02	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	石英・白色粒含む。やや粗い。	好	外：灰褐色2.5YR6/7	好	
63	004-03	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	白色粒含む。	好	外：暗色2.5YR6/8	好	
64	006-04	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	白色粒含む。	好	外：暗褐色10YR5/1	好	
65	010-03	奈良文土器	漆器?	佐吉層	—	外側に細い直條文を施す。	石英・白色粒含む。粗い。	好	外：暗色2.5YR6/6	好	
							外：灰褐色2.5YR4/1				

第2表 B地区土器観察表

測定	標	出	土	法	度	度	測定	度	度	度	度	度	度
	名	土	種	土	度	度	度	度	度	度	度	度	度
66	031-31	衛生土器	底部	SH34	4.4	底度15	底の底面。外側にハリミキ、内側にハタケを施す。底の底。	石英・白色粒含む。	外：浅緑色15YR5/3 内：浅緑色10YR5/3	好			
67	031-42	衛生土器	底	SH34			体形下部部の底面。2条の凹痕から右側部の底面に斜角をテクニカルで2点。左側部にハリミキを施す。いわゆる唐草文底面。	石英・白色粒含む。	外：刷毛色10YR5/6 内：内に浅緑色10YR6/4	好			
68	033-04	衛生土器	底	SH35-6	9.8	8.8	二点の凹痕と2点の斜角を施す。口部部にハリミキを施す。	石英・白色粒含む。	内に浅緑色10YR5/4	好			
69	033-05	衛生土器	底	SH35-6	20.6	3.7	大きな外底部の口部部。口部部にハリミキを施す。外底部はナラメ内向のハリミキ、な図形の口向のハリミキ。	石英・白色粒含む。やや粗い。	外：灰青色3.5Y6/2 内：灰青色3.5Y6/2	好			
70	033-02	衛生土器	底口部	SH37	31.6	2.4	大きな外底部の口部部。底外底反するハリミキ。口部部にハリミキを施す。2条の凹痕が並んでいる。口部部の底面に浅緑文底面。	やや粗い。	外：赤褐色10YR6/6 内：赤褐色10YR6/6	好			
71	031-03	衛生土器	台行量	SH7	2.9	脚径6.5	台行量の脚部分。脚台は無い。外側にハリミキを施す。	ウシモ多く含む。	外：淡綠色10YR6/3 内：白10YR10R1	好			
72	034-04	衛生土器	底	SH7			底の底面付。外側は網目文子のもの。凹痕をめぐらし。その下に斜状文底面している。	白色粒多く含む。	外：淡綠色10YR6/7 内：白10YR10R1	好			
73	032-02	衛生土器	底口部	SH8	11.4	6.3	口部部外底部には2条の凹痕がある。底部は外底部に2条の凹痕がある。外側は底面が生きている。	石英・チャート・白色粒含む。	外：灰青色3.5Y6/3 内：灰青色3.5Y6/3	好			
74	034-03	衛生土器	受口部	SH8	15.8	3.4	受口部口縁に窓。口部部外底部には2条の凹痕を加えます。底部は外底部に2条の凹痕がある。外側は底面が生きている。	ウシモ・白色粒含む。	外：灰青色3.5Y6/7 内：灰青色3.5Y6/6	好			
75	032-04	衛生土器	底	SH9	21.4	3.5	多くの凹痕する口部部。口部部の底面と下部にハリミキを施す。口部部にハリミキを施す。口部部の底面に斜状文底面。	石英・白色粒・白色粒含む。やや粗い。	外：灰青色3.5Y6/7 内：灰青色3.5Y6/6	好			
76	032-03	衛生土器	底	SH9			多くの凹痕する口部部。口部部の底面と下部にハリミキを施す。口部部にハリミキを施したのも底面にハリミキ以上なのだろう。	石英・ウンモ・白色粒・黑色粒含む。やや粗い。	外：灰青色3.5Y6/7 内：白10YR10R1	好			
77	033-01	衛生土器	底部	SH9		8.5	底度15.5	手形の底面。内側と外側ともハリミキを施す。唇の底部。	石英・白色粒多く含む。	外：灰青色3.5Y6/7 内：白10YR10R1	好		
78	033-01	衛生土器	底面蓋	SH10	7.4	4.1	口部部が外方に立ち上がる。底部が底面上に立ち上がる。外側に底面蓋が施されている。	石英・白色粒含む。	外：灰青色10YR5/3 内：浅緑色10YR5/3	好			
79	035-03	衛生土器	底面蓋	SH10	6.4	7.6	口部部の内側する。外側には黒墨文のもの。凹痕部を黒墨で引きつけ。底面に2条の凹痕と2条の斜角を施す。口部部の底面に斜状文底面。	石英・白色粒・赤色粒含む。	外：灰青色3.5Y6/4 内：灰青色3.5Y6/4	好			
80	033-03	衛生土器	底口部	SH10	13.9	2.7	大きな外底部の口部部。口部部底面を底状に押す。底部に直底部を施している。	石英・白色粒・白色粒含む。やや粗い。	外：灰青色3.5Y6/1 内：灰青色3.5Y6/1	好			
81	033-01	衛生土器	底	SH10	19.7	3.3	大きな外底部の口部部。口部部の底面と下部にハリミキを施す。内側と外側ともハリミキ。底部は内側に浅緑文底面。	石英・ウンモ・白色粒含む。	外：灰青色10YR10R1 内：内に灰青色10YR10R1	好			
82	032-02	衛生土器	底部	SH10	4.0	底度4.5	底度4.5。底部の底面と脇部を思われる。内側と外側ともハリミキを施す。底部は内側に浅緑文底面。	石英・白色粒含む。	外：灰青色10YR5/4 内：黑10R10R1	好			
83	031-01	衛生土器	式口部	SH10	18.0	44.5	底度16.5。口部部の底面には2条の凹痕文。内側と外側ともハリミキを施すと底度16.5。底部の底面には2条の凹痕文。内側と外側ともハリミキを施すと底度16.5。	石英・白色粒含む。	外：灰青色10YR5/4 内：内に灰青色10YR10R1	好			
84	032-02	衛生土器	底口部	SH10		底度11.4	口部部に底度文。口部部外底部には2条の凹痕文。内側と外側ともハリミキを施すと底度11.4。底部の底面には2条の凹痕文。	石英・白色粒多く含む。	外：灰青色10YR5/3 内：黑10R10R1	好			
85	038-01	衛生土器	底口部	SH11	20.6	3.3	大きな開く口部部。口部部に底度文。口部部内側に底度文を施すと底度11.4。底部に口部部に底度文を施す。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	外：明黄色10YD7/8 内：明黄色10YD7/8	好			
86	038-01	衛生土器	底口部	SH11	18.5	6.6	大きな外底部する口部部。内側には底度11.4の底度文を施す。外側には2条の凹痕文と2条の斜角を施す。底部にハリミキを施す。	石英・白色粒多く含む。やや粗い。	外：明黄色10YD7/8 内：明黄色10YD7/8	好			
87	034-02	衛生土器	底面蓋	SH11	11.1	4.4	口部部が受口部に立ち上がる。外側に2条の凹痕文をめぐらす。底部にハリミキを施す。	白色粒含む。	外：内に灰青色10YR5/7 内：浅緑色10YR5/6	好			
88	037-01	衛生土器	底	SH11	21.8	7.0	多くの凹痕する口部部。口部部下部にハリミキを施す。底部にハリミキのもの。底部の底面にハリミキを施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	外：灰青色10YR5/6 内：明黄色10YD6/6	好			
89	032-02	衛生土器	底面蓋	底口部	11.0	4.3	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。底部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。	白色粒多く含む。粗い。	外：明黄色10YD6/6 内：灰青色10YR5/6	好			
90	033-04	衛生土器	底面蓋	底口部	9.4	3.3	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。底部にハリミキを施す。	白色粒多く含む。	外：灰青色10YR5/4 内：灰青色10YR5/4	好			
91	038-04	衛生土器	底面蓋	底口部	10.9	3.0	口部部が受口部に立ち上がる。底部にハリミキを施す。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	外：灰青色10YR5/7 内：灰青色10YR5/7	好			
92	037-03	衛生土器	底面蓋	底口部	7.3	5.3	口部部が受口部に立ち上がる。底部が内側に底度文となる。底部に直底部を施す。	石英含む。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
93	030-04	衛生土器	底面蓋	底口部	7.6	6.9	口部部が受口部に立ち上がる。底部が外側に底度文である。	ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
94	038-01	衛生土器	底面蓋	底口部	11.4	3.8	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。	石英・白色粒多く含む。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
95	037-01	衛生土器	底面蓋	底口部	7.9	8.0	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。底部にハリミキを施す。	石英・白色粒多く含む。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
96	038-02	衛生土器	底面蓋	底口部	10.3	6.6	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。底部にハリミキを施す。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
97	037-00	衛生土器	底面蓋	底口部	5.2	6.1	口部部が受口部に立ち上がる。底部に底度文と底度文をめぐらす。	砂粒多く含む。やや粗い。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
98	039-04	衛生土器	底面蓋	底口部	12.0	4.5	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。	石英・白色粒多く含む。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
99	032-05	衛生土器	底面蓋	底口部	12.6	4.5	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。	砂粒多く含む。やや粗い。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
100	039-04	衛生土器	底面蓋	底口部	14.9	3.5	口部部が受口部に立ち上がる。口部部外側に底度文。底部に直底部を施す。	石英・白色粒含む。やや粗い。	外：内に灰青色10YR5/7 内：灰青色10YR5/6	好			
101	032-01	衛生土器	底面蓋	底口部	17.4	6.1	口部部が受口部に立ち上がる。口部部外側に直底部の底度部を施す。	白色粒多く含む。粗い。	外：内に灰青色10YR5/7 内：内に灰青色10YR5/6	好			
102	033-04	衛生土器	底面蓋	底口部	16.0	4.0	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。	白色粒多く含む。	外：灰青色2.5Y7/3 内：灰青色2.5Y7/3	好			
103	039-30	衛生土器	底面蓋	底口部	12.4	5.7	口部部が受口部に立ち上がる。外側には2条の凹痕文をめぐらす。底部にハリミキを施す。	ウンモ・白色粒多く含む。	外：浅緑色10YR5/3 内：灰青色10YR5/3	好			
104	039-02	衛生土器	底面蓋	底口部	17.5	6.0	口部部が受口部に立ち上がる。口部部下部に斜角を施す。底部から底部にかけて直底部をめぐらす。	石英・白色粒多く含む。	外：内に灰青色10YR5/7 内：内に灰青色10YR5/6	好			
105	036-01	衛生土器	底口部	底口部	15.9	4.7	大きな外底部する口部部。内側には直底部の底度部をもつ。口部部にはハリミキを施す。底部より口部部内側にハリミキを施す。	石英・ウンモ・白色粒含む。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
106	033-01	衛生土器	底口部	底口部	14.9	8.7	大きな外底部する口部部。内側には直底部の底度部をもつ。口部部にはハリミキを施す。底部に底度文をめぐらす。	砂粒多く含む。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
107	035-01	衛生土器	底口部	底口部	21.0	2.7	大きな外底部する口部部。口部部にハリミキを施す。底部および口部部内側にハリミキを施す。	白色粒多く含む。	外：暗褐色10YR7/6 内：暗褐色10YR7/6	好			
108	033-02	衛生土器	底口部	底口部	24.0	5.8	大きな外底部する口部部。内側には直底部の底度部をもつ。口部部内側に斜角文底面。	ウンモ多く含む。やや粗い。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
109	033-02	衛生土器	底口部	底口部	26.6	4.7	大きな外底部する口部部。口部部に斜角文底面。	白色粒多く含む。	外：灰青色10YR5/6 内：灰青色10YR5/6	好			
110	039-32	衛生土器	底口部	底口部	29.6	2.8	大きな外底部する口部部。口部部に斜角文底面。	砂粒多く含む。	外：暗褐色10YR6/6 内：暗褐色10YR6/6	好			

第3表 C地区土器觀察表(1)

番号	型 名	出 土 地 點	土 器 種	形 式	通 用	口 径	底 高	その他	調 査・方 法の特 徴	社 土	成 色
111	06-02	佐佐木村	広口壺	仮合壺	21.0	3.8			大きく外反する口縁部。口唇部に切妻を有す。	石美・ウンモ・白色粒含む。	青 内: にい・青色7.5YR7/4 内: にい・青色5YR7/4
112	03-02	佐佐木村	広口壺	仮合壺	20.6	4.5			大きく外反する口縁部。口唇部の上端と下端にキザミを施す。	石美・ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/6
113	06-02	佐佐木村	広口壺	仮合壺	23.5	3.3			大きく外反する口縁部。口唇部の上端と下端にキザミを施す。	石美・ウンモ・白色粒多く含む。	青 内: 7.5YR7/6
114	02-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.0	4.7			内側にしがらみ立ち上る。口縁部にはカーメを施す。口縁部に3条の印模めぐらし。体部は外側ともカーメを施す。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/3
115	03-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	13.5	5.8			内側にしがらみ立ち上る。口縁部にはカーメを施す。口縁部に3条の印模めぐらし。体部は外側ともカーメを施す。	石美・白色粒多く含む。	青 内: 7.5YR7/2
116	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	17.0	7.7			内側にしがらみ立ち上る。口縁部にはカーメを施す。口縁部に3条の印模めぐらし。体部は外側ともカーメを施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/2 内: 4.5YR7/3
117	03-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	12.0	5.2			口縁部がくぼんで外反する。体部は外側ともハケツ調査。外: やや粗い。 裏面に凹凸が現れる。	砂粒多く含む。外: やや粗い。	青 内: 4.5YR7/1 内: 4.5YR7/3
118	01-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	16.0	6.1			口縁部がくぼんで外反する。口縁部下端にキザミを施す。体部は外側ともハケツ調査。	石美・白色粒含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/4
119	02-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	18.0	7.7			口縁部がくぼんで外反する。口唇部に3条の印模めぐらし。内側に3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 外: 青褐色7.5YR7/2 内: 粉褐色5YR7/6
120	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	20.0	4.5			内側に3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/6
121	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	20.4	6.6			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部に3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/3
122	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	19.0	6.1			口縁部がくぼんで外反する。口唇部に3条の印模めぐらし。体部内面にはハケツ調査。内側にはテテ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 黑褐色3.5YR7/2 内: 黑褐色3.5YR7/5
123	02-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	19.5	5.9			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 内: にい・黄色3.5YR7/3
124	02-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	19.0	4.6			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 黑褐色3.5YR7/3
125	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	19.4	6.3			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・ウンモ・チャート・白色粒多く含む。	青 外: 青褐色7.5YR7/3 内: 4.5YR7/6
126	02-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	20.8	3.9			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	ウンモ・チャート・白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/3 内: 4.5YR7/4
127	03-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	21.0	4.4			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・白色粒多く含む。外: にい・白色7.5YR7/4	青 内: 7.5YR7/4
128	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	23.0	1.9			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 外: にい・青褐色10YR7/4 内: 青褐色10YR7/4
129	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	14.0	2.7			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白。	青 外: 2.5YR7/6 内: 青褐色10YR7/4
130	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.5	3.7			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 外: にい・青色7.5YR7/5 内: にい・青色7.5YR7/3
131	02-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.6	4.6			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 7.5YR7/8
132	04-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.6	3.2			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口唇部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・ウンモ・白色粒含む。やや粗い。	青 内: 青褐色7.5YR7/4
133	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	23.2	3.4			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 内: にい・青褐色10YR7/4 内: 青褐色10YR7/4
134	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.0	6.5			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・白色粒多く含む。やや粗い。	青 外: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/6
135	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	23.0	4.1			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	ウンモ・白色粒多く含む。	青 内: にい・青褐色10YR7/5 内: にい・青褐色10YR7/3
136	03-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	38.4	3.4			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・ウンモ・白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 青褐色7.5YR7/6
137	03-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	32.5	4.8			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: にい・青褐色10YR7/4
138	02-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	29.8	3.3			口縁部がくぼんで外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・白色粒多く含む。	青 外: にい・青褐色10YR7/4 内: 青褐色10YR7/4
139	04-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	30.0	4.1			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	ウンモ・白色粒多く含む。	青 内: 7.5YR7/8
140	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	36.7	2.9			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。	青 外: にい・青褐色10YR7/4 内: 青褐色10YR7/4
141	04-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	30.0	5.8			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・白色・黑色粒含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 青褐色7.5YR7/4
142	05-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	28.4	5.0			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	白色粒多く含む。粗い。	青 内: 2.5YR7/6
143	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	15.5	5.3			口縁部が強く外反する。口唇部下端にキザミを施す。口縁部内面には3条の印模めぐらし。体部は外側ともハケツ調査。	石美・ウンモ・白色粒含む。やや粗い。	青 内: 5-7.5YR7/6
144	00-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	24.8	4.4			口縁部が強く外反する。全体的にハケツ調査。	ウンモ・石美粒多く含む。やや粗い。	青 内: 5-7.5YR7/6
145	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	15.0	5.0			外側にハケツのもの、泥痕と撰文をめぐらす。	石美・ウンモ・白色粒多く含む。粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
146	02-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	11.0	6.9			外側にハケツのもの、泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。	青 内: にい・青褐色10YR7/4 内: 4.5YR7/6
147	02-04	佐佐木村	瓶	仮合壺	11.0	7.1			外側にハケツのもの、泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
148	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	11.0	7.1			外側に泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
149	01-01	佐佐木村	瓶	仮合壺	11.0	7.1			外側に泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
150	01-02	佐佐木村	瓶	仮合壺	2.5	底径4.0			底部に泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
151	02-05	佐佐木村	瓶	仮合壺	2.7	底径4.0			底部に泥痕と撰文をめぐらす。	白色粒多く含む。やや粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4
152	01-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	2.2	底径7.0			底部に泥痕と撰文をめぐらす。	石美・白色粒多く含む。粗い。	青 内: にい・青褐色10YR7/4 内: 4.5YR7/3
153	01-03	佐佐木村	瓶	仮合壺	2.4	底径4.6			底部に泥痕と撰文をめぐらす。	ウンモ・白色粒多く含む。粗い。	青 内: 4.5YR7/6 内: 4.5YR7/4

第4表 C地区土器観察表(2)

樹種	科	属	種	生長地	高さ (cm)	特徴	葉 実・花 法 の 特 徴	根 土	地 色	
156	085-05	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.0	高さ5.0 平底の底部。底部外面に木質層。	根多く含む。重い。	根多く含む。重い。	灰 内: 黄褐色2.5Y6/4	
157	085-06	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.4	高さ5.4 平底の底部。外側にハケメを施す。	根多く含む。重い。	根多く含む。重い。	灰 内: 黄褐色2.5Y6/6	
158	086-05	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.0	高さ5.0 平底の底部。外面にハケメを施す。	白色粉多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y6/2 内: 内: 黄褐色NS	好	
159	086-01	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.0	高さ5.0 平底の底部。外側にハケメを施す。	ウシモ・白色粒多く含む。重い。	外: 黄褐色2.5Y7/3 内: 黄褐色2.5Y7/4 根多く含む。重い。	好	
160	086-05	衛生土壌	麻部	佐吉層	3.8	高さ6.6 平底の底部。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/4 内: 黄褐色2.5Y6/2 根多く含む。	好	
161	087-04	衛生土壌	麻部	佐吉層	3.4	高さ5.0 平底の底部。内側にハケメを施す。	白色粉多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y6/2 内: 黄褐色2.5Y6/4 根多く含む。	好	
162	011-02	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.4	高さ6.0 平底の底部。外側にハケメを施す。	白色粉多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y6/4 内: 黄褐色2.5Y6/6	好	
163	011-01	衛生土壌	麻部	佐吉層	6.7	高さ6.5 平底の底部。内側にハケメを施す。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/1 内: 黄褐色2.5Y6/3 根多く含む。	好	
164	085-05	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.0	高さ4.3 平底の底部。	石英・白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/6 内: 黄褐色2.5Y6/4 根多く含む。	好	
165	022-06	衛生土壌	麻部	佐吉層	1.6	高さ5.2 平底の底部。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/4 内: 黄褐色2.5Y6/2 根多く含む。	好	
166	086-04	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.6	高さ5.2 平底の底部。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/8 内: 黄褐色2.5Y6/5	好	
167	089-03	衛生土壌	麻部	佐吉層	3.0	高さ5.8 平底の底部。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y7/5 内: 黄褐色2.5Y7/6 根多く含む。	好	
168	017-04	衛生土壌	麻部	佐吉層	2.6	高さ5.0 平底の底部。	根多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/3 内: 黄褐色2.5Y7/4 根多く含む。	好	
169	085-03	衛生土壌	麻部	佐吉層	3.2	脚付8.6 難見る个体の脚部。大きく縮ん併す。	ウンモ・白色粒含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
170	089-08	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.7	脚付3.2 白付葉の脚部。外側をハケメ調整する。	白色粉多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/3 内: 黄褐色2.5Y7/4 根多く含む。	好	
171	084-04	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.5	脚付9.8 白付葉の脚部。外側をハケメ調整する。	石英・ウンモ・白色粒多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
172	089-06	衛生土壌	麻部	佐吉層	3.5	高さ6.5 平底の底部。茎の基部。	根多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
173	016-03	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.1	高さ6.8 平底の底部。茎の基部。外側にハケメを施す。	砂粒多く含む。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y6/6 根多く含む。	好	
174	037-01	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.8	高さ6.8 平底の底部。茎の基部。	砂粒多く含む。重い。	黄褐色2.5Y7/3 好	好	
175	025-01	衛生土壌	麻部	佐吉層	4.6	高さ7.7 平底の底部。茎の底部。外側をハケメガキ、内側をハケメ調節する。	砂粒多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/6 内: 黄褐色2.5Y6/5 根多く含む。	好	
176	089-03	山系楓	純	佐吉層	3.5	高さ7.6 平底の底部。茎の基部。外側をハケメ調整する。	石英・白色粉多く含む。重い。	外: 白色2.5Y7/3 内: 白色2.5Y7/4 根多く含む。	好	
177	085-02	山系楓	純	佐吉層	15.0	6.0	山系楓。平均高さに近い高さがつく。体形は斜上方に直立する。 茎と葉には元来の特徴をもつ。	石英。	外: 黄褐色2.5Y7/1 内: 黄褐色2.5Y7/1 根多く含む。	好
178	089-03	純文土壌	—	佐吉層	—	外側に比較による文様をもつ。	ウンモ・白色粒多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
179	037-03	純文土壌	複数	佐吉層	—	山系楓の内部に直立している上部がつく。葉部は茎をもつ。外側に直立する。 茎と葉には元来の特徴をもつ。	石英・ウンモ多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/3 内: 黄褐色2.5Y7/4 根多く含む。	好	
180	029-04	純文土壌	—	佐吉層	—	山系楓の内部に直立する。葉状に巻くらるるか。葉部に直立をもつ。 叶縁より立ちあがった葉状にキサギを施す。	白色粉多く含む。	外: 小葉細葉2.5Y6/6 内: 小葉細葉2.5Y6/5 根多く含む。	好	
181	018-03	純文土壌	複数	佐吉層	—	山系楓(枝葉の特徴)。外側に葉状をもつ。瓣文部を施す。内側に 瓣文部を施す。瓣文部は葉状をもつ。	ウンモ・白色粒多く含む。	外: 黄褐色2.5Y7/5 内: 黄褐色2.5Y7/6 根多く含む。	好	
182	086-06	衛生土壌	—	佐吉層	—	瓣文部。瓣文部は葉状をもつ。	石英・白色粉多く含む。重い。	外: 黄褐色2.5Y7/5 内: 黄褐色2.5Y7/6 根多く含む。	好	
183	086-05	衛生土壌	—	佐吉層	—	瓣文部。瓣文部は葉状をもつ。	石英・ウンモ多く含む。	外: 黄褐色2.5Y7/4 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
184	029-02	衛生土壌	—	佐吉層	—	瓣文部。瓣文部は葉状をもつ。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y6/6 内: 黄褐色2.5Y6/5 根多く含む。	好	
185	016-04	衛生土壌	—	佐吉層	—	外側にハケメを施す。直立葉文をめぐらす。	チャット・白色粒含む。	外: IC: 黄褐色2.5Y7/3 内: IC: 黄褐色2.5Y7/4 根多く含む。	好	
186	016-04	衛生土壌	—	佐吉層	—	外側に化粧で施した瓣文部と瓣文部を交互に配する。	白色粉多く含む。	外: 黄褐色2.5Y7/6 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
187	086-02	衛生土壌	—	佐吉層	—	瓣文部による瓣葉部と瓣文部を交互に配するものと思われる。	砂粒多く含む。	外: IC: 黄褐色2.5Y7/6 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	
188	086-04	衛生土壌	—	佐吉層	—	外側に波状の文様をテテ方向に垂下させる。	石英・白色粉多く含む。やや重い。	外: 黄褐色2.5Y7/6 内: 黄褐色2.5Y7/5 根多く含む。	好	

第5表 C地区土器觀察表(3)

図版 番 号	出 土 遺 物	出 土 地 点	法 面 (m)	調 査 ・ 探 査 の 特 徴	地 下 土	色 調	
						後 方 側 部 左 右 各 面	後 方 側 部 左 右 各 面
301 015-03	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を施す。	白色粘合。やや粗い。	良 好	淡黄色3.5YR8/3 好 好
302 010-02	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は内側にやや弧張り、面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	石英・白色粘多く含む。 好 好	好 好	好 好 好 好
303 015-01	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	石英・白色粘合む。粗い。	良 好	好 好 好 好
304 015-04	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	石英・ウンモ・白色粘合む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
305 008-01	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を施す。	石英・ウンモ・白色粘・黑色粘・赤 粘合。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
306 019-02	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
307 015-03	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	石英・白色粘多く含む。粗い。	良 好	好 好 好 好
308 010-02	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	石英・白色粘合む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
309 010-01	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。やや太めの花瓶形を縄文で施す。	白色粘合む。やや粗い。	良	好 好 好
310 005-01	縄文土器	深鉢	佐古層	30.8 7.5	縄部は面をもつ。ための花瓶形で削して尖頭で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好 好
311 018-03	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	白色粘多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
312 017-02	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
313 017-04	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。	良 好	好 好 好 好
314 003-03	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
315 017-05	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を施す。	白色粘多く含む。粗い。	良 好	好 好 好 好
316 018-02	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	ウンモ・白色粘多く含む。	良 好	好 好 好 好
317 009-01	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘合む。粗い。 好 好	好 好 好 好 好	
318 009-02	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘合む。粗い。	良 好	好 好 好 好
319 018-03	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。粗い。	良 好	好 好 好 好
320 010-01	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
321 003-02	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	石英・白色粘合む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
322 008-04	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	石英・白色粘・白色粘合む。粗い。 好 好	好 好 好 好 好	
323 010-04	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。粗い。	良 好	好 好 好 好
324 017-06	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。	良 好	好 好 好 好
325 020-01	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘多く含む。や や粗い。 好 好	好 好 好 好 好	
326 019-06	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
327 020-02	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	石英・白色粘多く含む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
328 019-05	縄文土器	深鉢	佐古層	やや太めの花瓶形を縄文で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
329 008-02	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘・赤色粘合む。 やや粗い。	良 好	好 好 好 好
330 017-01	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘合む。 好 好	好 好 好 好	
331 011-01	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	砂粒多く含む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
332 017-03	縄文土器	深鉢	佐古層	比縄部を縄で光滅する。	石英・ウンモ・白色粘多く含む。や や粗い。 好 好	好 好 好 好	
333 001-04	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘合む。	良 好	好 好 好 好
334 020-03	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・ウンモ・白色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
335 001-05	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部は面をもつ。外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・白色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
336 003-06	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部を丸くおさめる。外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
337 002-01	縄文土器	深鉢	佐古層	縄部に面をもつ。外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
338 003-01	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。	良 好	好 好 好 好
339 002-03	深鉢	佐古層		外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
340 002-05	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。粗い。 好 好	好 好 好 好	
341 002-04	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘・黑色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
342 001-02	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	縄部を丸くおさめる。外面に朱絵文を施す。	良 好	好 好 好 好
343 003-05	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・ウンモ・白色粘合む。やや粗い。 好 好	好 好 好 好	
344 018-04	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好
345 018-00	縄文土器	深鉢	佐古層	外面に朱絵文を施す。	石英・白色粘合む。やや粗い。	良 好	好 好 好 好

第6表 D地区土器観察表(1)

試験 番号	器 種	出 土 地 點	出 土 形 態	直 径 （cm）	底 厚 （cm）	底 存 在 状 態	其 他	調査・技法の特徴		地 土	變 色 調
								外 面	内 面		
346 001-03	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒・黑色粒含む。やや粗い。	真 内：にぼい褐色5YR6/4 外：にぼい褐色5YR5/2
347 001-06	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒含む。	真 内：にぼい褐色5YR6/2 外：にぼい褐色5YR5/2
348 002-02	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒・黑色粒・赤色粒含む。やや粗い。	真 内：褐色5YR5/2 外：褐色5YR5/1
349 011-02	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		白色粒含む。	真 内：灰白色2.5YR7/2 外：灰白色2.5YR7/4
350 001-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒含む。粗い。	真 内：にぼい褐色5YR6/5 外：にぼい褐色5YR5/3
351 003-04	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒含む。	真 内：褐色5YR6/5 外：にぼい褐色5YR7/5
352 004-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾	33.0	4.9		縄部を丸くおさめる。外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒・黑色粒含む。やや粗い。	真 内：灰白色5YR6/4 外：灰白色10YR5/4
353 016-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上にキザミを施した縄部を垂下する。		やや粗い。	真 内：褐色5YR4/2 外：褐色5YR4/4
354 016-04	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に病害子状に朱痕を施す。		石英・ウンモ・チャード白色粒含む。	真 内：褐色5YR5/2 外：褐色5YR5/1
355 016-02	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				縄部は丸くおさめる。口縁部外面上に2段の刻文をめぐらす。		白色粒多く含む。粗い。	真 内：褐色5YR5/4 外：褐色5YR5/4
356 016-03	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				縄部は丸くおさめる。口縁部外面上に2段の刻文をめぐらす。		白色粒多く含む。粗い。	真 内：褐色5YR5/6 外：褐色5YR5/6
357 014-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾	94.0	3.2		大きくて反する口縁部。		石英・白色粒含む。やや粗い。	真 内：明褐色2.5YR5/8 外：褐色1.5YR6/6
358 004-02	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾				外面上に多綴文を施す。		石英・白色粒・黑色粒含む。やや粗い。	真 内：灰白色10YR8/4 外：褐色5YR8/4
359 007-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾	6.1	底径13.0		平底の直縁形。		石英・白色粒多く含む。やや粗い。	真 内：褐色5YR6/6 外：褐色5YR6/3
360 013-01	縄文土器	深井	陶鉢	伝 佐 曾	22.7	3.8		内寄する複数の浅鉢。内外面を磨く。		石英・白色粒・黑色粒含む。	真 内：褐色5YR5/1 外：にぼい褐色5YR7/3
361 013-02	削化土器	陶鉢	陶鉢	伝 佐 曾	9.0	3.2		口縁部が突出状となる。		白色粒含む。	真 内：褐色5YR2/1
362 006-01	削化土器	削	陶鉢	伝 佐 曾	20.0	3.4		山形にとまる。内外面に高いハケミを施す。		白色粒含む。	真 内：灰白色5YR6/2 外：にぼい褐色5YR5/3
363 012-03	削化土器	削	陶鉢	伝 佐 曾	20.4	2.3		大きく外反する口縁部。口縁部下面にキザミを施す。		白色粒多く含む。	真 内：褐色5YR4/2 外：にぼい褐色5YR5/2
364 012-01	削化土器	削	陶鉢	伝 佐 曾	2.2	底径5.2		平底の直縁形。		白色粒多く含む。やや粗い。	真 内：褐色5YR7/6 外：褐色5YR7/3
365 012-04	削化土器	削	陶鉢	伝 佐 曾	18.4	3.3		大きく外反する口縁部。口縁部下面にキザミを施す。		白色粒含む。	真 内：褐色5YR6/6 外：明褐色10YR6/5
366 013-01	削化土器	削	陶鉢	伝 佐 曾				削の削成工の跡片。底部下に削痕文。外側に口縁部と口縁部を交叉に削する。底面文部にはテラコ内にキザミを施す。		白色粒多く含む。	真 内：にぼい褐色5YR7/4 外：灰白色1.5YR7/3

第7表 D地区土器観察表(2)

測定番号	器種	出土場所	土 士	底	高さ (mm)	調査・技法の特徴		地 土	地 色
						柱	壁	底	側面
347	005-01	土師器	台付壺	SX19	8.8	16.5		石美・白色粘・黑色粘合。	良 内: 深褐色2.5YR7/8
								好	
348	004-01	土師器	広口壺	SX19	15.9	27.0	外方に向いて縦割れやや下垂れの体部に横跡の跡合がつく。 体部に直線形と成角形を交互に配し、底部にも底被文を施す。	石美・白色粘合む。	良 外: 深褐色2.5YR7/8
								好 内: 深褐色2.5YR7/4	
349	002-03	土師器	広口壺	SX20	13.9	2.0	口縁部が大きく外反する。	石美・白色粘合む。	良 外: 深褐色2.5YR7/5
								好 内: 深褐色2.5YR7/6	
370	001-02	土師器	広口壺	SX20	14.0	6.1	口縁部が大きく外反し、腹部に突起をめぐらす。	石美・白色粘・黑色粘合。	良 外: 明褐色2.5YR6/6
								好 内: 明褐色2.5YR6/6	
371	001-01	土師器	広口壺	SX20			口縁部が大きく外反する。	石美・ウンセ・白色粘合。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/4
								好 内: にふる黒褐色3.5YR7/4	
372	003-04	土師器	広口壺	SX20			口縁部が大きく外反する。	石美・ウンセ・白色粘合む。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/4
								好 内: にふる黒褐色3.5YR7/5	
373	002-01	土師器	広口壺	SX20	31.4	4.0	口縁部が大きく外反し、腹部に突起をめぐらす。	石美・ウンセ・白色粘合む。やや粗い。	良 外: 深褐色2.5YR8/4
								好 内: 深褐色2.5YR8/5	
374	005-01	土師器	広口壺	SX20	4.3	差幅3.3	底被文。ややあらぬ光沢となり、体部内外面にハケテ網目。	石美・白色粘・黑色粘合。	良 外: 初赤褐色2.5YR8/6
								好 内: にふる黒褐色3.5YR6/6	
375	001-01	土師器	広口壺	SX20	15.0	20.2	大きく外反する口縁部と颈部に直線からなる。体部内面はハケテ網目。内面は下部側にハケメ、上半部はナメを施す。	石美・白色粘・黑色粘合。	良 外: 深褐色2.5YR8/4
								好 内: にふる黒褐色3.5YR8/5	
376	006-01	土師器	広口壺	SX20	20.7	底被文4.4	ほぼ環状の底被文。底被文はややあらぬ光沢となり。体部内面はハケテ網目。外側をハケメを施す。	石美・白色粘・黑色粘合。	良 外: 明赤褐色2.5YR8/6
								好 内: にふる黒褐色3.5YR8/5	
377	011-01	埴文土器	深鉢	伝合層			口縁部が横被文が横走し、体部には輪被文の網目がある。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 外: 深褐色2.5YR8/3
								好 内: 深褐色2.5YR8/3	
378	007-03	埴文土器	浅鉢	伝合層	19.1	3.8	口縁部が内側で立ち上がる。外側には底被文で区画されたギザギザが施される。	石美・ウンセ・白色粘合。	良 外: にふる黒褐色3.5YR6/4
								好 内: にふる黒褐色3.5YR6/4	
379	013-03	埴文土器	深鉢	伝合層	12.2	底径9.8	平底の底被文。	石美・白色粘多く含む。粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/4
								好 内: にふる黒褐色3.5YR7/5	
380	010-03	埴文土器	深鉢	伝合層			縁部は底をなす。やや太めの底被文で埴文で充満する。	砂粒多く含む。粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/1
								好 内: 浅褐色2.5YR8/3	
381	011-04	埴文土器	深鉢	伝合層			縁部は底をなす。やや太めの底被文で埴文で充満する。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/2
								好 内: 浅褐色2.5YR7/4	
382	010-06	埴文土器	深鉢	伝合層			縁部は底をなす。やや太めの底被文で埴文で充満する。	ウンセ・白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR7/1
								好 内: 浅褐色2.5YR7/4	
383	010-01	埴文土器	深鉢	伝合層			縁部は底をなす。やや太めの底被文で埴文で充満する。	白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/6
								好 内: にふる黒褐色3.5YR7/6	
386	012-02	埴文土器	深鉢	伝合層			縁部は底をなす。やや太めの底被文で埴文で充満する。	砂粒多く含む。粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR8/6
								好 内: 明褐色2.5YR7/6	
387	011-02	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/1
								好 内: 浅褐色2.5YR8/3	
388	010-02	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	やや粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/2
								好 内: 浅褐色2.5YR8/2	
389	013-02	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	石美・白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/1
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
390	013-03	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	ウンセ・チャート粘多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/3
								好 内: 浅褐色2.5YR7/4	
391	011-05	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	石美・白色粘多く含む。粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/6
								好 内: 浅褐色2.5YR8/6	
392	013-03	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	石美・ウンセ・白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/4
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
393	013-04	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	白色粘多く含む。粗い。	良 外: 黑褐色3.5YR8/4
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
394	011-03	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	砂粒多く含む。粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR8/4
								好 内: 明褐色2.5YR8/6	
395	010-03	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	砂粒多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR8/4
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
396	011-06	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	ウンセ多く含む。やや粗い。	良 外: 黑色N2
								好 内: にふる黒褐色3.5YR8/3	
397	011-02	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	砂粒含む。やや粗い。	良 外: 深褐色2.5YR8/3
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
398	014-01	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	石美・白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/3
								好 内: 明褐色2.5YR7/3	
399	014-02	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	石美・ウンセ多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色3.5YR7/2
								好 内: 浅褐色2.5YR7/2	
400	012-01	埴文土器	深鉢	伝合層			外壁を垂直配置する。	砂粒多く含む。粗い。	良 外: 黄褐色10YR8/6
								好 内: 夏青色5SY7/3	
401	013-04	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: にふる黒褐色2.5YR8/4
								好 内: 浅褐色2.5YR8/4	
402	013-01	埴文土器	深鉢	伝合層			やや太めの底被文を施す。	白色粘多く含む。やや粗い。	良 外: 深褐色2.5YR7/3
								好 内: 浅褐色2.5YR7/3	
403	013-05	埴文土器	透	伝合層			透の内部上の破片。	底被文と鉛黄文を交互に配する。	石美・白色粘合。
									外: 錫色T5Y7/6
									内: 浅褐色T5Y7/3

第8表 E地区土器觀察表

参考 伊勢地方の磨製石斧の例

本報告に関連して、北・中勢地域の弥生時代の遺跡から出土した磨製石斧の一部について、未発表例を中心に、一部既報告のものも含めて掲載した。

中山遺跡（員弁郡北勢町）（第74図A1～A4）

いずれも磨製石斧の未成品とみられるが、採集品ということもあり、縄文時代のものか弥生時代のものかは不明のものも含まれるが、A1・A2についてには、形態的に弥生時代のものと思われる。

A2を除き、他はいずれも工程的には敲打段階まで至ったもので、A1は敲打がかなり進んでいることと、その長さからしてすでに刃部を作りだし使用していた可能性もある。いずれも材質はハイアロクラスタイトと考えられる塩基性岩である。

野々田遺跡（員弁郡大安町）（第74図B5～B7）

B5・B7は剝離段階の未成品で、B6は敲打段階の未成品である。野々田遺跡は、縄文時代からの遺跡であるが、B6・B7は未成品ながらもその厚みから考えて、弥生時代の伐採斧となるものであった可能性が大きい。いずれも材質はハイアロクラスタイトと考えられる塩基性岩である。

大谷遺跡（四日市市）（第75図C8・C9）

ともに成品であり、基部も研磨されている。断面形はやや偏平となる。

大谷遺跡は弥生前期の堅穴住居跡や環濠、および後期の方形周溝墓が確認されているが、中期については明確でない。従って、石斧は前期に遡る可能性がある。材質はハイアロクラスタイトと判別される塩基性岩が用いられている。

永井遺跡（四日市市）（第75図D10）

偏平片刃石斧で、研磨が全面に施されている。材質はハイアロクラスタイトと判別できる塩基性岩である。

永井遺跡は弥生前期遺構の遺構・遺物が確認されているが、発掘調査で出土した石器の大半は前期のものとされる。

上畠遺跡（四日市市）（第75図E11）

刃部は丁寧に研磨されていることから、成品として使用されていたと考えられるものだが、細かな敲打痕を残す。両刃で断面形はやや厚みのある楕円形となる。材質はハイアロクラスタイトである。

上畠遺跡は永井遺跡と隣接する遺跡で、弥生後期の堅穴住居跡が発掘調査で確認されているが、それ以前の遺構については未発見である。

上野遺跡（四日市市）（第75図F12）

長さ19cmをはかる大型の両刃の石斧で、断面形も厚みのある楕円形となる。刃部は丁寧に研磨されているが、それ以外の部分は細かな敲打痕が残る。

上野遺跡は弥生時代中期でも後半を中心とした堅穴住居跡などが発掘調査で確認されており、F12も第1次調査のSK01出土のものである。

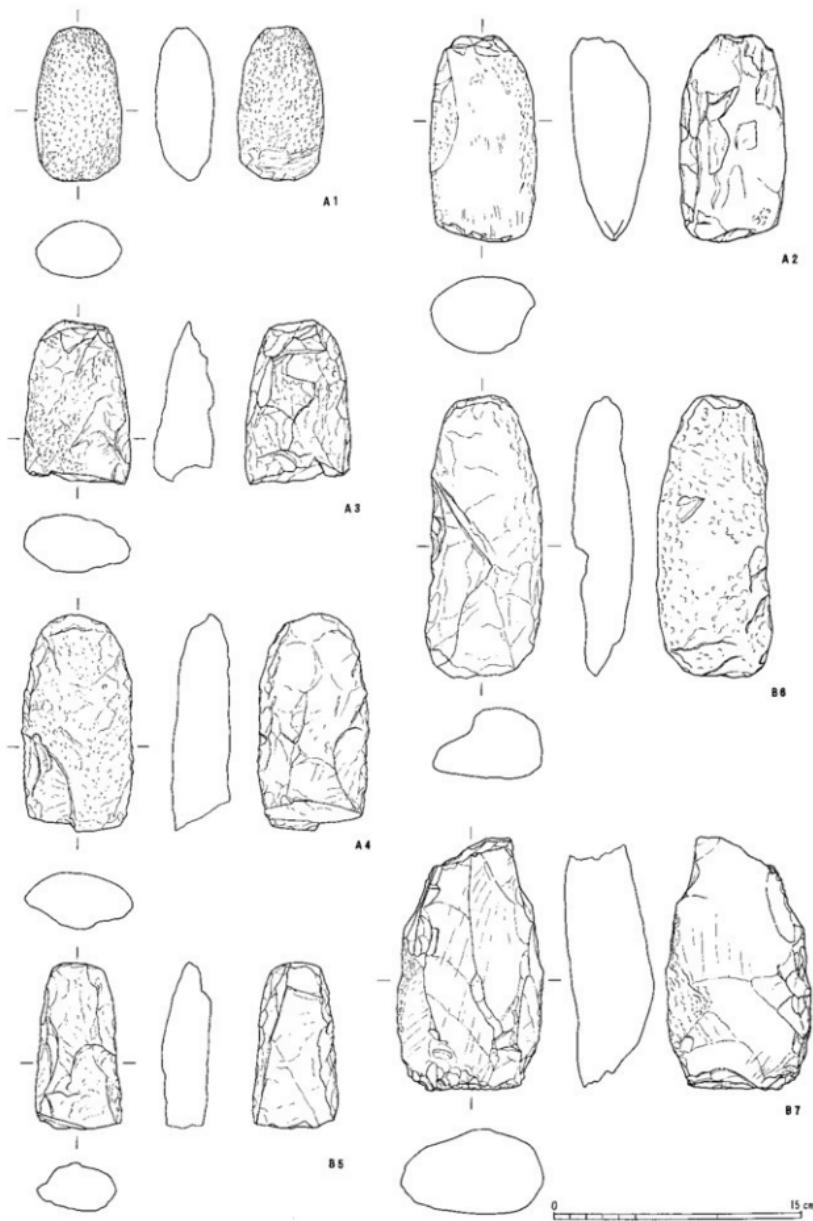
納所遺跡（津市）（第76～79図G13～G40）

G13～G34が両刃の石斧で、G35・36～G38が偏平片刃石斧、G37・39・40が柱状片刃石斧である。伐採斧として使用されたと思われる両刃石斧のいくつからは、使用頻度により本来の長さからかなり短くなったりものが多く、さらにG28・29・34などは、凹石などに再利用された痕跡をもつ。

両刃石斧の形態は太型始刃ないしその類似形態となるものが大半であるが、G15のような乳棒状となるものもある。基部にまで研磨を施すものが普通であるが、敲打痕が目立つものも少なくない。

使用石材は、G14・29が堆積岩系の泥岩製であるのに対し、他はハイアロクラスタイトを中心とした塩基性岩製である。ただし塩基性岩のなかにはハイアロクラスタイト以外にG24が変玄武岩、G17が変蛇紋岩などのものも含まれるが、分析結果からすると、ハイアロクラスタイトが大多数をしめることには違いがなさそうである。

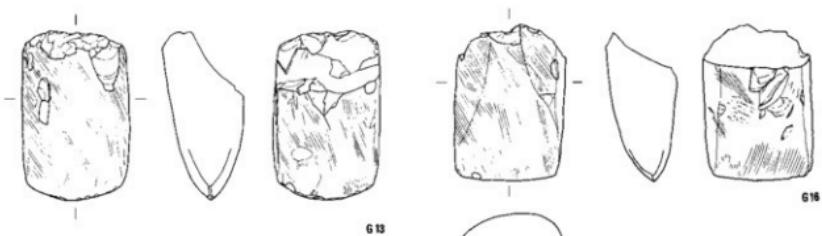
納所遺跡は、弥生時代のほぼ全期間におよぶ、津市周辺の中心的な集落遺跡と考えられる。ハイアロクラスタイト製の石斧が主体をなす遺跡の一つである。



第74図 北勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)



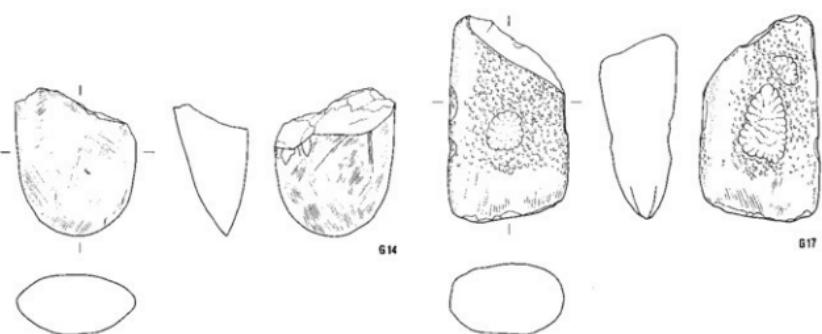
第75図 北勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)



G13

G14

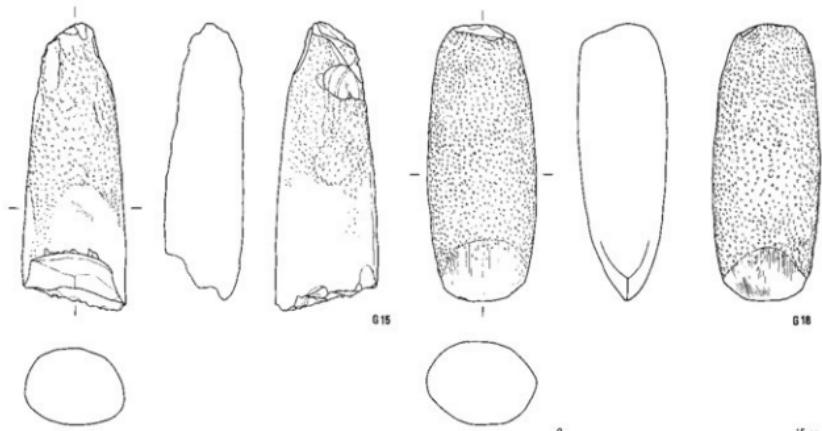
G15



G16

G17

G18



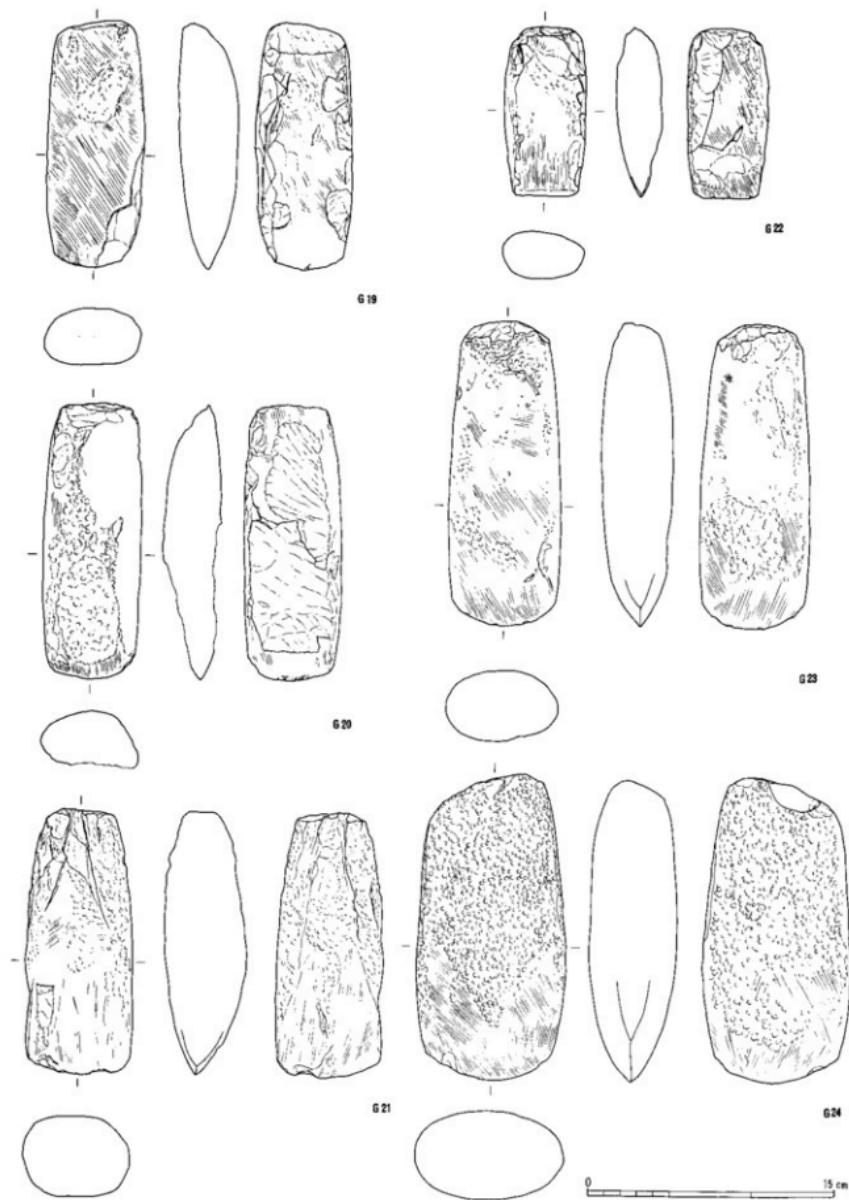
G19

G20

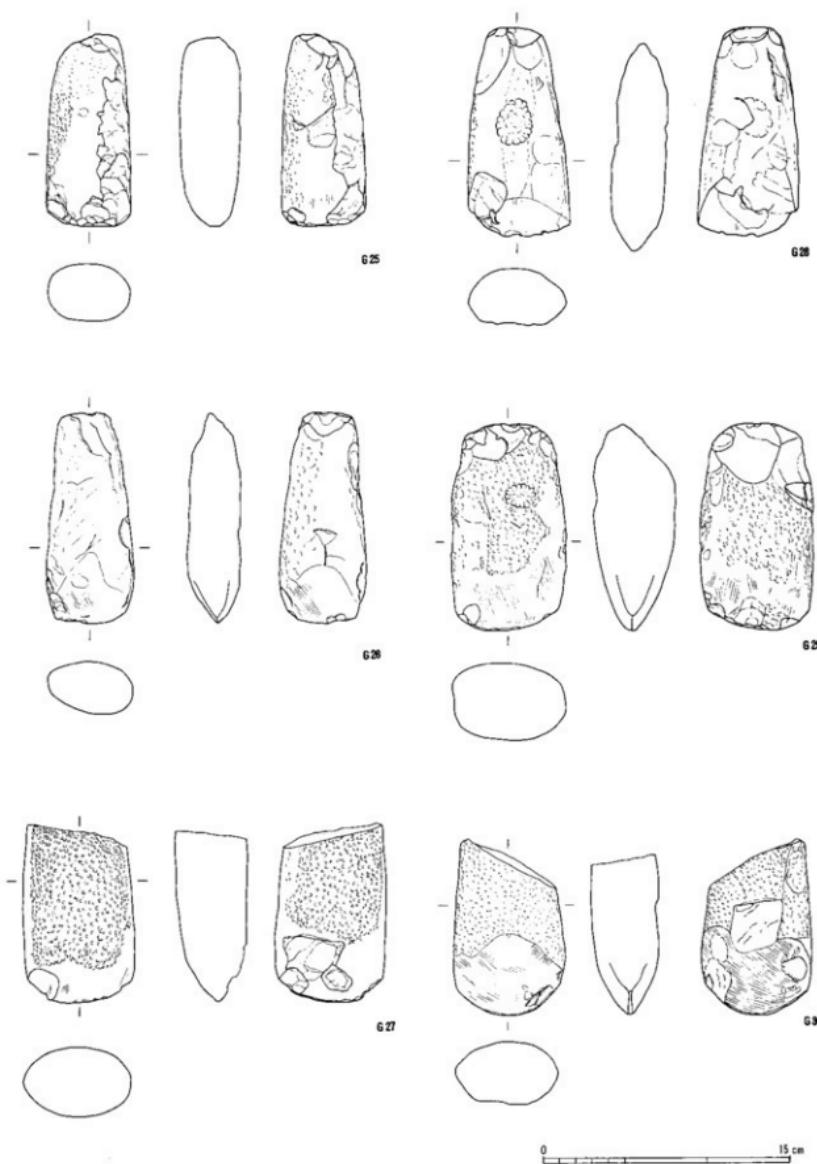
G21

0 15 cm

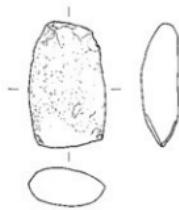
第76図 中勢地域出土の磨製石斧〈1〉(1:3)



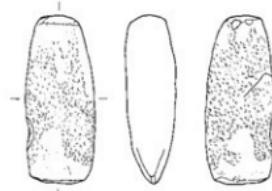
第77図 中勢地域出土の磨製石斧〈2〉(1:3)



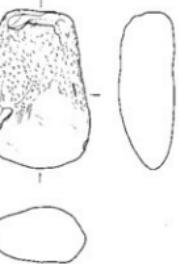
第78図 中勢地域出土の磨製石斧〈3〉(1:3)



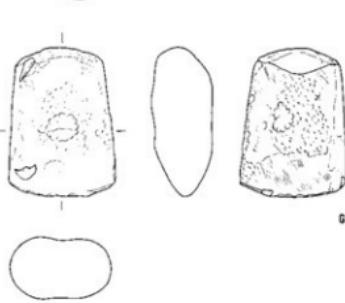
G31



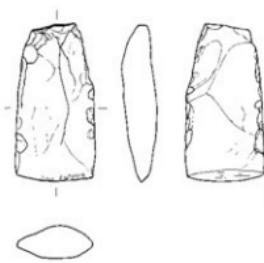
G32



G33



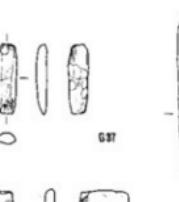
G34



G35



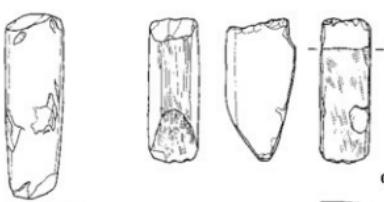
G36



G37



G38



G39



G40



第79図 中勢地域出土の磨製石斧（4）（1:3）

V. 考 察

1. 石斧石材の分析

(1) はじめに

宮山遺跡では、磨製石斧の未製品が数多く出土した。これら磨製石斧に用いられている岩石はすべて、風化した表面では灰緑～黒色を呈し、新鮮な断面で黒～暗緑色を呈する緻密な組織を持つ岩石である。このような岩石は伊勢湾周辺の弥生時代の遺跡で、磨製石斧に多く利用されている（樋1992）。これまで、これらの岩石の供給地は特定されることがなかった。しかし、今回宮山遺跡から磨製石斧の未成品が大量に出土したことから、供給地の問題に言及することができることを目的に分析を進めた。今回分析を行った試料は、宮山遺跡出土の磨製石斧の未完成品や未加工の岩石を含め、三重県内の主な遺跡から出土した弥生時代の磨製石斧47点について、表面観察および岩石学的な測定を行った。

(2) 分析方法および分析試料

今回観察等を行った試料は、磨製石斧45点（宮山遺跡5点・納所遺跡34点・永井遺跡2点・大谷遺跡2点・上野遺跡1点・上畠遺跡1点）および宮山遺跡出土の未加工の岩石1点、宮山遺跡の近傍を流れる青川の転石1点の合計47点である（第9表）。

分析方法は、非破壊分析として表面観察・比重測定を全試料に対して行い、破壊行為を伴う岩石薄片の観察を18点の試料に対して行った。

a. 表面観察

表面観察は、これまで非破壊で岩石名を決定する手段として多く用いられてきた方法である。これは考古遺物を破壊することなく、岩石名が決定できることから最も一般に用いられる観察方法である。しかし、肉眼や実体顕微鏡下においては観察できる鉱物や組織に大きさの限界が生じることや観察者の経験が必要になることから、観察者によって詳細な岩石名が異なる場合がある。

b. 比重測定

岩石の比重はその構成鉱物によって異なっているので、岩石名を決定するときの一つの参考データと

堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）

なりうる。たとえば、遺跡で黒色で緻密な岩石が出土し、泥岩か玄武岩かどうかしても判断がつかない場合に比重を測定する。すると堆積岩である泥岩の比重はおよそ2.6であり、火成岩の玄武岩ではおよそ2.8であることから、測定結果をみて、どちらかに決定することができる。

測定は、浮力をを利用して体積を求め、その体積と重さによって比重を算出する方法を用いた。測定には最大6,000 g 最小0.1 gまで測定できる電子天秤（LIBROREB-6200S：島津製作所）を用い、1/10 gまで測定した。試料はテグスを使用してつり下げた。使用したものは今回用いた測量機器で測定不能であったが、その重量は0.1 g未満と考えられる。そこで今回測定した試料のうち、全重量が10 gに満たないものは、測定値にテグスの影響が及んでいる（1%程度）と予想されるため、測定を行わなかった。

c. 岩石薄片観察

岩石の薄片観察は、遺物の破損を免れないが、正確な岩石名を決定する際の最も基本的な観察方法の一つである。観察の対象は、組織と主成分鉱物の種類である。たとえば黒色で緻密な組織をもつ安山岩の場合、古銅輝石が含まれていることが確認されれば古銅輝石安山岩（サヌカイト）と判断することができる。また、黒雲母や角閃石が多く含まれる安山岩であれば、黒雲母角閃石安山岩と岩石名が決定されるのである。

薄片は、分析試料の風化をしていないと思われる部分から約10×10×5mm程度の切片をダイアモンドカッターを用いて切り出し、それぞれのチップを研磨してゆくことによって作成した。岩石薄片を作成した資料は、宮山遺跡3点・納所遺跡13点・永井遺跡・大谷遺跡・上畠遺跡各1点づつの合計18点である。

d. 蛍光X線による全岩化学組成

蛍光X線による全岩化学組成は、岩石の科学的特徴をとらえるために岩石学では一般に用いられている方法である。遺物を破壊しなければならないが、

遺跡名	試料番号	回収番号	比重	岩名	特徴	表面の特徴および表面観察で観察できる岩石・組織
宮山遺跡	C33	-	2.83	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
宮山遺跡	FC24	-	3.01	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・纖維状黑色不定形包有物
宮山遺跡	BT6	-	30.4	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
宮山遺跡	DP23	-	2.97	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
宮山遺跡	EX3	-	2.95	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
宮山遺跡	往坂地出土	-	-	塩基性岩	緻密	青灰状の風化面あり
納所遺跡	3FNO039	-	2.67	砂岩	緻密	産状のドレッピングを含む
納所遺跡	3FNO055	-	2.93	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO079	-	2.95	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・纖維状黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO043	-	2.80	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO081	-	2.85	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色不定形包有物・摩擦が多い
納所遺跡	3FNO1145	-	-	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物
納所遺跡	3FNO238	G17	3.07	塩基性岩	緻密	白色の黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO278	G13	2.97	塩基性岩	緻密	白色の黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO248	-	2.97	塩基性岩	緻密	白色の黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO286	G16	2.97	塩基性岩	緻密	纖維状黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO291	G40	2.55	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO115	G15	2.91	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO007	G14	2.79	泥岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO094	G32	3.01	塩基性岩	緻密	纖維状黑色円形包有物
納所遺跡	3FNO204	G26	2.97	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO117	G30	3.04	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO224	G25	3.01	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO-C	G39	2.93	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO005	G27	2.94	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO114	G18	3.12	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO065	G29	2.70	泥岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO035	G28	2.86	塩基性岩	緻密	纖維状黑色円形包有物
納所遺跡	3FNO170	G55	5.04	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO169	G34	2.87	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO053	G33	2.97	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO162	-	2.75	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO144	-	2.75	泥岩	緻密	白色の黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物・白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO163	-	5.04	塩基性岩	緻密	白色の黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物・白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO060	-	2.98	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO134	-	2.95	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり・纖維状黑色円形包有物
納所遺跡	3FNO150	G36	3.00	塩基性岩	緻密	白色の黑色不定形包有物
納所遺跡	3FNO81	G31	2.95	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO98	G37	-	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
納所遺跡	3FNO014	G38	2.83	塩基性岩	緻密	白色脈状部分あり
水井遺跡	O64/G56D	-	2.99	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物
水井遺跡	56	D10	2.91	塩基性岩	緻密	纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物
大谷遺跡	3E07G4KR6	C 8	2.93	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物
大谷遺跡	62KR10	C 9	2.93	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物
上原遺跡	333	F12	2.91	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物
上原遺跡	004-g	E11	2.86	塩基性岩	緻密	斜長石・纖維状黑色円形包有物・纖維状黑色不定形包有物

第9表 表面観察および比重測定結果

遺跡推定のためには大変有力な資料となる。今回実施した蛍光X線分析はガラスピート法を用いた。分析用の試料はめのう鉄鉱を用いて#200の大きさまで粉碎した。その粉末試料1 gに対し、四ホウ酸リチウム5 gを加え、白金るっぽ内で加熱し、ガラスピートを作成する。測定機器は(株)リガク製波長分散型system3080で測定し、データ処理システムDATA FLEX-151を用いた検量線法で定量分析を行った。測定は(株)パレオラボに依頼した。全岩化学組成の測定を行った試料は、宮山遺跡出土未成品1点・成品1点・水井遺跡・大谷遺跡各1点の合計4点である。

(3) 分析結果

a. 表面観察

表面観察結果および比重の測定結果を第9表に示す。47点中42点が塩基性岩であり、泥岩3点(納所遺跡3FNO007, 3FNO044, 3FNO265)・砂岩1点(納所

遺跡3FNO039)となる。ここで塩基性岩とするものは、玄武岩・塩基性凝灰岩・ハイアロクラスタイト・変玄武岩などSiO₂の少ない岩石の総称として用いている。これは、磨製石斧に多く用いられている岩石の組織が緻密で、肉眼および実体顕微鏡による観察では、主成分鉱物や組織の観察ができないために正確な岩石名が決定できないからである。

塩基性岩の表面の特徴を見てみると、おおむね3種類の組織がみられる。組織の項目で“緻密”としたものは、全体に緻密な組織を持つもので斑晶等は観察できないが、黒色の不定形の暗色包有物をふくむことがある。また脈状の白色部分をもつものもある。この項目に分類された試料数は20点である。“緻密岩状”としたものは、円形や不定形の暗色包有物を多くもち、所々に濃緑色の部分や灰緑色部分が礫状に含まれているものである。斜長石などの斑晶が観察できるものもある。試料数は7点である。“凝灰岩状”としたものは、溶結凝灰岩状の組織を持つもの

遺跡名	試料番号	岩石名	組織	主成分鉱物
上野遺跡	004-g	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac>
大谷遺跡	3BOTC4KR6	ハイアロクラスター	杏仁状組織	KF
納所遺跡	3FNO039	砂岩	等粒状組織	Qt>Pl
納所遺跡	3FNO115	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO028	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
水井遺跡	064/G56D	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO043	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO061	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO1145	変蛇紋岩	不定組織	Ac
納所遺跡	3FNO058	変蛇紋岩	蛇紋岩状組織	Ac
納所遺跡	3FNO078	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO048	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO086	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
宮山遺跡	C33	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO081	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac
納所遺跡	3FNO115	ハイアロクラスター	杏仁状組織	Ac

Ac=アクチノ閃石、KF=カリ長石、Qt=石英、Pl=斜長石

第10表 薄片観察結果

や礫状部分がすべて同じ自破碎熔岩状態のものである。斜長石の斑晶が認めらることもある。試料数は16点である。“緻密”および“礫岩状”でみられ黒色の不定形の暗色包有物は、石材がハイアロクラスターであればアクチノ閃石が集合した部分か不透明鉱物である。玄武岩であればカンラン石である。変蛇紋岩であれば蛇紋石の集合したものとなる。つまり岩石薄片を作成しなければ判断ができない物質であるため、ここでは暗色包有物とした。

b. 比重測定

比重測定の結果は、表面観察結果とともに第9表に示す。砂岩では2.67を示し、泥岩では2.70、2.79、2.76を示している。塩基性岩では2.78-3.04を示す。塩基性岩のうち、組織の様子と比重の関係をみると、“緻密”2.80-3.04、“礫岩状”2.92-2.97、“凝灰岩状”2.86-3.01となった。比重測定では、風化のひどい遺物については、水中に没したときに水分を吸収してしまい、正確に体積を測定することができないものも存在した。

c. 薄片観察結果

観察結果一覧を第10表に示す。納所遺跡出土の3点(3FNO039,3FNO1145,3FNO0238)以外は、すべてアクチノ閃石を主成分鉱物とするハイアロクラスターである。組織はガラスが発砲したような組織(杏仁状組織)を持つものである。アクチノ閃石以外の鉱物では緑簾石、緑泥石、カリ長石が見られた。長柱状の不透明鉱物を含むものもある。

納所遺跡3FNO039は、表面観察においても砂岩と判断できたのだが、薄片も作成した。等粒状組織を持つ。主成分鉱物は、石英・長石・斜長石である。泥岩の小礫を含んでいる。

納所遺跡3FNO1145は、表面観察では礫岩状の組織をもつ塩基性岩であったが、薄片の監査の結果、変質したカンラン石の斑晶をもつドレライトであると判断された。

納所遺跡3FNO0238は、緑泥石と蛇紋石を主成分鉱物とする変蛇紋岩である。蛇紋岩状の組織をもつが、主成分鉱物が緑泥石もしくは緑泥石に置換されつつある蛇紋石であることから、変蛇紋岩とした。

d. 蛍光X線による全岩化学組成

	宮山遺跡	宮山遺跡	水井遺跡	大谷遺跡	納所遺跡	朝日遺跡								
S02	51.79	50.14	51.54	46.92	51.61	50.74	49.95	47.59	48.02	51.08	49.72	48.90	47.89	43.91
T02	2.07	2.11	2.36	2.48	20.8	2.25	2.29	2.43	2.44	1.83	2.27	2.04	2.45	1.39
Al2O3	12.58	14.76	13.78	14.17	15.00	13.84	14.60	14.11	15.07	13.88	13.98	14.40	14.15	6.72
Fe2O3	11.02	11.27	12.74	13.68	9.82	10.49	10.73	11.26	11.28	10.26	10.78	10.34	10.92	11.95
MnO	0.18	0.14	0.20	0.20	0.16	0.17	0.14	0.17	0.18	0.15	0.17	0.16	0.16	0.17
MgO	7.84	7.08	9.18	8.05	9.13	8.00	8.19	10.10	8.94	8.55	8.44	8.09	10.35	21.78
CaO	6.81	7.32	7.29	7.26	6.05	7.97	7.48	7.72	6.73	7.12	7.32	7.96	5.41	7.30
Na2O	5.64	6.08	5.98	4.40	4.75	4.43	4.18	2.42	3.95	3.86	3.98	4.48	3.60	1.26
K2O	0.14	0.50	0.14	0.27	0.18	0.42	0.41	0.17	0.49	0.41	0.25	0.19	0.19	0.16
P2O	0.22	0.26	0.24	0.25										

第11表 蛍光X線による全岩化学組成

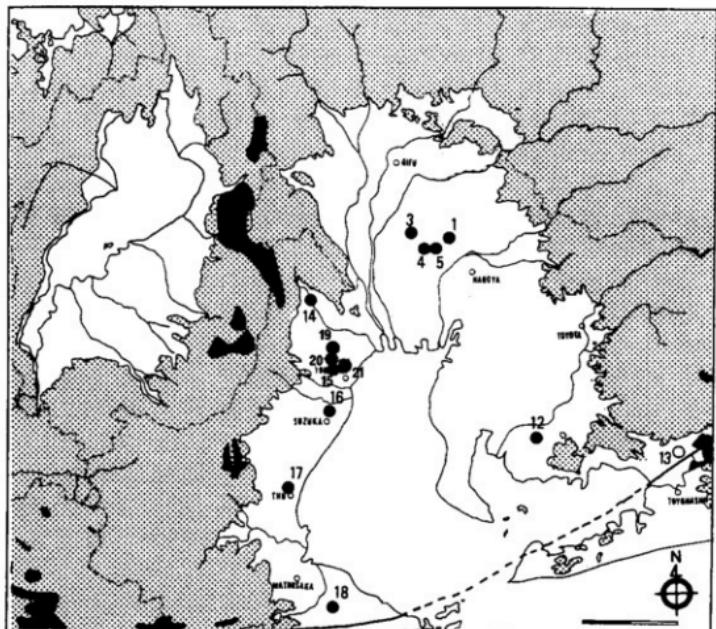
今回分析を行った4点の分析結果を第11表に示す。また、橋(1992)が行った納所遺跡および朝日遺跡の分析結果を合わせて表記する。いずれの試料も SiO_2 の含有量が52%以下を示し、 Na_2O や K_2O の含有量が多いことから塩基性の岩石であることが裏付けられた。またその他の成分においても、1992年の分析値と大きく違わない。これらのことから朝日遺跡で多く出土したハイアロクラスタイトと、今回分析を行ったハイアロクラスタイトが同一の岩石であることが確認できた。また、宮山遺跡で出土した未成品の分析値も他の分析値と差が認められない。

(4) まとめ

a. ハイアロクラスタイトと変蛇紋岩

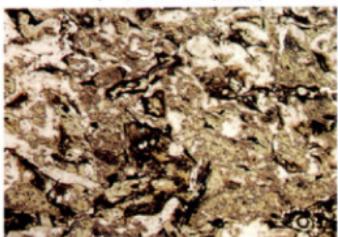
ハイアロクラスタイトは、伊勢湾周辺地域および濃尾平野の弥生時代中期の遺跡において、磨製石斧として共通して用いられる岩石である(第80図)。橋(1992)によれば、岩石中の角閃石の化学組成や組織・鉱物などから内帯に産する岩石の一種である可能性が指摘されていたが、その供給地を特定するには至っていない。今回の分析のきっかけとなった宮山遺跡では、ハイアロクラスタイト製と思われる磨製石斧の未成品が大量に出土していたことから、磨製石斧を供給した遺跡ではないかと考古学的に指摘された。

ハイアロクラスタイトが出土している遺跡のうち、納所遺跡では磨製石斧にハイアロクラスタイト以外の岩石で砂岩や泥岩などが数点認められた。その中には薄片観察によって、変蛇紋岩と判断されたもの

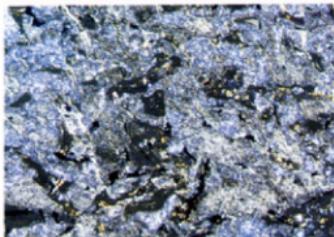


塩基性の岩体を含む地域	1. 朝日遺跡 (津洲町) 3. 一色長畠遺跡 (稻沢市) 4. 大羽遺跡 (基目寺町) 5. 阿弥陀寺遺跡 (基目寺町) 12. 岡島遺跡 (西尾市)	ハイアロクラスタイト製磨製石斧
標高100m以上の山地	13. 麻生田大橋遺跡 (龜川市) 14. 宮山遺跡 (大安町) 15. 永井遺跡 (四日市市) 16. 上美田遺跡 (鈴鹿市) 17. 納所遺跡 (津市) 18. 金剛坂遺跡 (津市) 19. 大谷遺跡 (四日市市) 20. 上畑遺跡 (四日市市) 21. 上野遺跡 (四日市市)	变蛇纹岩製磨製石斧

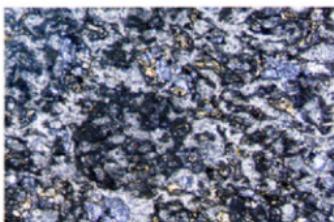
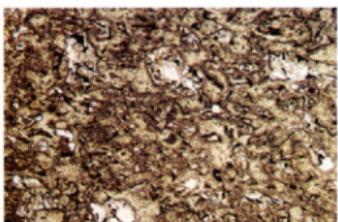
第80図 塩基性岩の分布域と磨製石斧出土遺跡

オーブンニコル ($\times 400$)

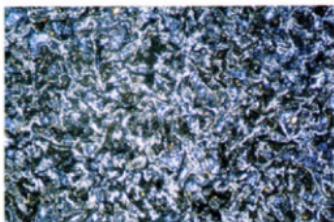
宮山遺跡
33

クロスニコル ($\times 400$)

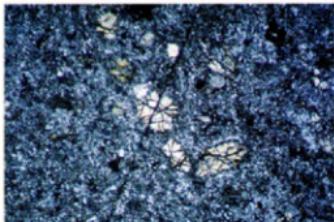
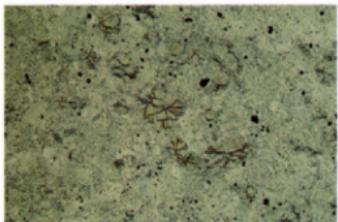
納所遺跡
3FNO086



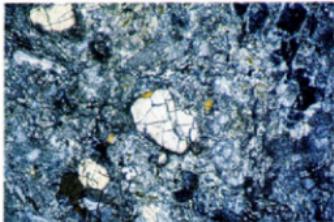
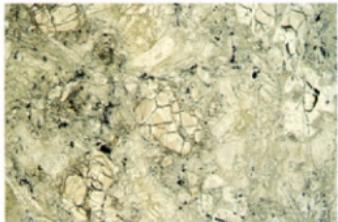
朝日遺跡
597



朝日遺跡
132



麻生田大橋遺跡
74



塩基性岩類偏光顯微鏡写真

があった。この変蛇紋岩は麻生田大橋遺跡〔愛知県豊川市・繩文時代晩期〕において大量に出土した岩石であり、石の供給地は遺跡の東方を流れる豊川とされ、産地は外帯の三波川帯に存在すると推測された(森ほか, 1991)。この変蛇紋岩は、宮山遺跡より20km程度離れた納所遺跡や朝日遺跡(愛知県清洲町他)でも出土しているが、確認された数量は数点である。今回、表面観察を行った磨製石斧のうち、“緻密”もしくは“凝灰岩状”の組織をもつ塩基性岩としたものの中にこの変蛇紋岩が含まれている可能性はある。それは、変蛇紋岩は表面の特徴や比重の値がハイアロクラスタイトに酷似しているために、岩石薄片の観察もしくは全岩化学組成の測定をしなければ同定できないためである。岩石薄片では、変蛇紋岩は蛇紋岩組織を持ち主成分鉱物が蛇紋石および緑泥石であることが確認できる。それに対しハイアロクラスタイトは杏仁状組織を持ち、主成分鉱物がアクチノ閃石となる。また全岩化学組成では、変蛇紋岩は Al_2O_3 が 5% 程度と少なく MgO が 20% 以上と多い。ハイアロクラスタイトでは Al_2O_3 が 12-15%、 MgO が 7-10% 程度である。変蛇紋岩はその化学成分の値から外帯で産した岩石であると考えられるため、内帯で産するハイアロクラスタイトとは移動した経路が異なってくると考えられる。そのため、ハイアロクラスタイトか変蛇紋岩であるかの同定結果は重要な意味をもつものと考えられる。

b. ハイアロクラスタイトの供給地

ハイアロクラスタイトは玄武岩質の溶岩が海底もしくは水中で流出しながら形成された岩石であるために、表面で観察できる組織に、安山岩や花崗岩のような安定した特徴をもたない。今回分類されたように、緻密な組織の玄武岩のようであったり、自破碎溶岩のような部分があったり、流出時に他の岩石を取り込んで礫岩状になっていたりするのである。しかし、岩石薄片による主成分鉱物の観察を行うと、アクチノ閃石がほとんどでカリ長石が少量含まれるという特異な特徴がみられる。このような岩石は中・古生層のチャートや泥岩の間に小さな岩体として産することが地質学では広く知られていたが、古生層の研究では放散虫などの微化石および地質構造の研究が中心となり、変成作用を受けて化学成分が移動

していると考えられる火成岩は研究の対象外であった。そのために、遺跡から出土したハイアロクラスタイトの全岩化学組成を、比較する岩石の基礎データが存在せず、産地の推定が困難を極めていた。

そこで、ハイアロクラスタイトと思われる磨製石斧の未成品を多量に出土した宮山遺跡の位置図と地質図を合わせてみると、宮山遺跡の西方に大きな塩基性の岩体が存在していることがわかる。この地域は中・古生層および花こう岩類が広く分布している地域であるが、遺跡の西方にかなり大きな塩基性の岩体が存在している。遺跡の東方を流れる青川の川原石や住居地から出土する巨大な礫に、この岩体のものと思われる転石が多くみられた。また、今回住居地から出土した礫や青川の河原石についても岩石薄片を作成した結果、両者ともハイアロクラスタイトであることが確認されている。また、今回の分析試料には含まれていないが、遺跡で出土した数多くの磨製石斧の未成品は表面の特徴が非常によくており、著者の経験上すべて同一の岩石であると判断された。このことから、宮山遺跡でハイアロクラスタイトを原料として、磨製石斧を作成していた可能性がかなり高いものと推測される。

謝辞

今回分析の機会を与えてくださった三重県埋蔵文化財センター竹内英昭氏、蛍光X線による化学分析を実施してくださった(株)パレオ・ラボには記して感謝の意を表します。

参考文献

- 樋真美子(1992)「朝日遺跡にみられる磨製石斧の石質とその産地」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 朝日遺跡II・自然科学編」279-298.」
- 樋木真美子(1995)「石材の移動。財団法人愛知県埋蔵文化財センター創立10周年記念シンポジウム朝日遺跡を科学するシンポジウム資料」35-37.】
- 森勇一・水草康次・樋真美子(1990)「阿弥陀寺遺跡から出土した緑色の岩石について」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 阿弥陀寺遺跡」330.】
- 森勇一・樋真美子(1991)「麻生田大橋遺跡出土の磨製石斧の石材について」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 麻生田大橋遺跡」115-123.】

2. 磨製石斧製作工程の復原とその流通

宮山遺跡を原石採取地点に設けられた磨製石斧製作のための作業所的なムラとの位置づけを考えたが、出土した石斧未成品から、その製作工程をうかがい知り、その分布から地域間の交流の実態を解明し、そして弥生時代における社会的分業のあり方を考えるなど、派生する問題は様々である。これらすべてに詳論を及ぼすことはできないが、本報告書の末尾にあたり、できる限りの整理をつけておきたい。

(1) 石斧の種類と製作工程について

宮山遺跡で出土した磨製石斧の未成品には、重量感があり両刃をもつ伐採斧と偏平片刃石斧、柱状片刃石斧などの加工斧があり、それぞれ製作工程を示すと考えられるものが認められる。

伐採斧と加工斧の比率は圧倒的に伐採斧が多いと考えられる。その出土比率は、およそ伐採斧8に対し、加工斧は2ほどである。これは大半はあくまでも未成品、とくに失敗作を通してみた上での判断であり、伐採斧が製作工程でより破損しやすい可能性を含むが、分析結果で示されたように比重がきわめて大きいという使用石材の特性から考えても、生産対象の中心は伐採斧に置かれていたのではないかと思われる。

酒井龍一氏は、弥生時代の石器組成を分析した結果、伊勢湾沿岸地方の納所遺跡や朝日遺跡などから出土した磨製石斧は、太型始刃石斧が過半数を占め、加工斧は偏平片刃石斧が主体となり、偏平片刃石斧と柱状片刃石斧とが比率的に半々となる近畿地方中央部の様相と異なる点を指摘している（酒井1986）。生産地である宮山遺跡の加工斧のあり方も、酒井氏が指摘した伊勢湾沿岸地域の状況とはほぼ一致する。

弥生時代の伐採斧といえば、一般的に両刃で石斧の横断面が厚い、いわゆる太型始刃石斧と呼ばれるものが西日本では主流を占めるが、宮山遺跡の場合、両刃であることは伐採斧の必要条件としても、石斧の厚さや基部の形状などからすると、むしろ典型的な太型始刃石斧と呼べないものも含まれる。

未成品、とくに製作過程で生じた失敗作である点を考慮に入れる必要があるが、ここでは伐採斧を以

下の2つのタイプに大別することにした。

伐採斧I 側縁が平行し、厚みのある基部で、断面形は膨らみのある楕円形となる。いわゆる太型始刃石斧あるいはそれに近い形態のもの。長さ20cmを超える大型のものと長さ13~16cm程度の中型のもの、さらに長さ10cm以下の小型のものがある。

伐採斧II 側縁は平行するか、刃部に向かって幅広となり、基部は厚みがあり、断面形が円形に近い。いわゆる乳棒状石斧。

本来の完成品を宮山遺跡で見いだすことができないので、他遺跡出土のものを加え、それぞれのタイプの製作工程の各段階を第81図に示した。

磨製石斧の製作は、原石を粗割り、剝離成形し（第1工程）、敲打して整形する（第2工程）。そして全面を研磨し、刃部を仕上げ（第3工程）、完成品となると考えられる。第1工程は、原石の粗割りとその後の剝離成形とは別の工程として分けるべきかもしれないが、未完成そのものからその区別は難しい。

(2) 宮山遺跡を通じた石斧生産の実態

宮山遺跡では原石として使用可能と考えられる石材が近辺より採集可能だが、剝離成形の際に生じる剝片は出土しているものの、原石の自然面を片面にもつ剥片は少なく、あるいは第1工程である原石の粗割りは青川の河原など、他所である程度行わたた可能性も否定できない。

また、宮山遺跡では磨製石斧以外の石製品として、石劍あるいは石椎の一部とみられるものが出土しているが、これは結晶片岩系の石材が使用されており、当遺跡周辺で製作されたものではない。宮山遺跡では磨製石斧のみが製作されていた可能性が大きい。

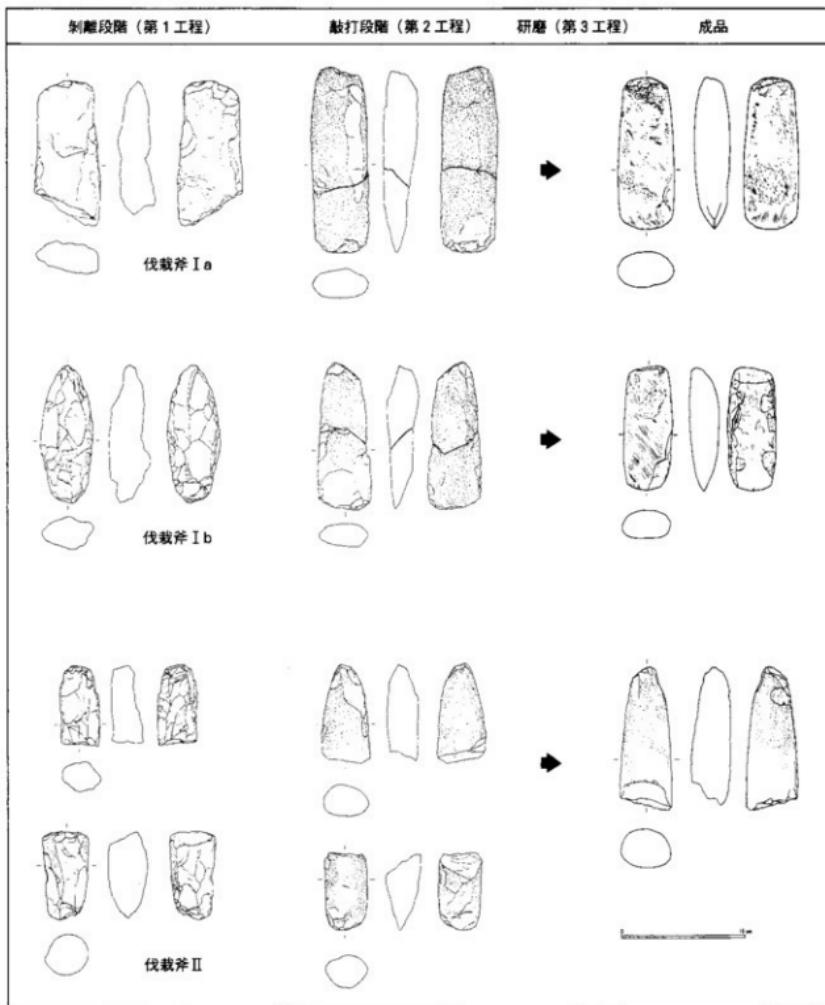
伐採斧の場合、第2工程の敲打段階での破損品が最も多く、伐採斧の6割にものぼる。逆に良品の完成品が見いだせない点も合わせて、今山遺跡などの石斧製作遺跡の一般的なあり方と共通する。

最後の工程である研磨について、石黒立人氏は宮山遺跡では砥石の比率が低いことから、敲打整形後の未完成品を出荷するとの見通しがつけられている（石黒1997）。

これは消費地での実態、すなわち刃部未研磨のものが集落遺跡で出土するか否かとも関わる問題ではあるが、宮山遺跡の場合、確かに砥石の出土量からすると、製作された石斧のすべてが研磨されたと考えにくいといえるかもしれない。

それでも恒常的な研磨により、研ぎ減りがかなり

進んだとみられる置き砥石も存在することから、自己消費としてのみ石斧の刃部の研磨に使用されたにとどめるにも疑問が残る。あるいは製作された石斧の一部に限っては、最終的な研磨工程まで行い、他所へ運び出していたことも、現象面的には考えられるのではないだろうか。



第81図 磨製石斧の製作工程図（1:6）

（伐載斧Iのうちaは大型のもの、bは中型のもの）

また、伐採斧Ⅰ・Ⅱの形態上の差は、伐採斧Ⅰがカシ材などの常緑広葉樹の利用のため弥生時代になつて新たに登場した、いわゆる大型蛤刃石斧ないしそれに類するものであるが、伐採斧Ⅱはいわゆる乳棒状石斧と呼ばれる、縄文時代以来使用されている磨製石斧の形態を受け継いだものである。

伐採斧Ⅱは主に東海地方以東の東日本では弥生時代にも引き続き利用されていることが一般に認められており、伊勢地方でも津市納所遺跡などで少ないながらも存在する（第76図G15）。

宮山遺跡では伐採斧Ⅰ・Ⅱの両者が製作されていたことから、西日本と東日本の狭間となる地域に当遺跡が位置づけられるとともに、弥生時代的な伐採斧Ⅰにすべて伐採斧の生産が傾くことなく、伐採斧Ⅱの生産も同時にを行っていたことで、東海以東でこの種の形態の石斧を使用し続ける地域も意識し、その流通の射程に入っていたことを評価して良いと思う。

（3）加工斧の地域的特色

一方、加工斧は前述したようにその出土量が伐採斧に比べかなり少ないとから、生産量そのものが寡少であったと考えられるが、伐採斧で多かった敲打整形段階での欠損が生じにくく、ひいては生産上のロスが少なかったというのも宮山遺跡での伐採斧、加工斧の両者の出土量の差異となって表れたことも考えられよう。

加工斧である偏平片刃石斧や柱状片刃石斧が、形態的に剝離成形の段階で、仕上がりの状態にかなり近づくため、敲打整形が伐採斧のようにさほど重要な工程とならなかつたと思われ、剝離成形から研磨までの工程が比較的スムーズに進められ、破損の危険性も少なかつたと考えられる。

また、片刃ではないが、さりとて両刃石斧＝伐採斧とかつけられないものもある。（第48図232・233・239・240）など、長さがあり両刃を作りだすものの、幅が5cmに満たず、厚みもない短冊型のものは、伐採斧としての使用にはあまり実用的でない。

一方、偏平片刃石斧の形態をとりながら、両刃となるものも地域によっては、認められることが指摘されている（国立歴史民俗博物館1996）。一般に消費

地遺跡では研ぎだしを繰り返すうち、元の形態に比べ、長さが著しく短くなるものがみられるが、これらとはもちろん異なるものである。

こうした偏平片刃石斧の形態をとる両刃石斧は、三重県内でも出土をみると、四日市市永井遺跡では、柱状片刃石斧でありながら両刃に作りだされたものもあり、定角式石斧と紹介されている一志町高野の端山遺跡でも同様のものとなる可能性が大きく、刃部形態が必ずしも伐採斧と加工斧という機能に直結しない状況がある。ただしこれは製作段階に決定されるものではなく、あくまでも使用者側の選択の問題であろう。

加工用の工具として石斧を用いる場合、当然片刃がより機能的であると考えられるが、縄文時代以来の両刃に作りだす伝統が使用者間に根強く残った場合もあったと受け取ることができる。

（4）分布時期とその流通

ハイアロクラスタイト製磨製石斧は、伊勢地方をはじめ、尾張・三河といった広い範囲で出土しているが、今回の堀木氏の分析の結果だけみても、直線距離にして40km以上離れた津市納所遺跡からでも磨製石斧に関しては主体を占めるほどである。

堀木氏のこれまでの分析成果からすると、愛知県清洲町の朝日遺跡をはじめ、甚目寺町阿弥陀寺遺跡、西尾市岡島遺跡、三重県内では明和町金剛坂遺跡まで、直線距離にしても60km以上は離れた範囲にも広がっていることになる。

これは仮に宮山遺跡およびその周辺の遺跡で製作されたものが分布するのだとすれば、当然共同体内での流通の範囲を超えるものであり、石斧自体が交易されたとみる方が自然である。

ただしこれには宮山遺跡あるいはその周辺で出土する石斧とそれぞれの遺跡から出土する石斧との形態・技法などの諸特徴の比較検討も必要となろうが、宮山遺跡内だけでも伐採斧に形態差がみられたように、現実的には石材・製作地の違いによって何らかの差が見いだせる可能性は小さい。

宮山遺跡では弥生時代中期のうちでも中葉～後葉（Ⅲ～Ⅳ期）にかけての時期に生産が限定される。中期には同石材の石斧が、東海地方に分布を広げるこ

とは注目に値する。また、弥生後期以降は一般に鉄素材の普及により、石斧の生産も衰退することから、宮山遺跡の状況もこれと軌を一にすると思われるが、弥生中期前半以前はどうだろうか。

愛知県幸田町の東光寺遺跡では縄文時代晩期の磨製石斧にわずかながらハイアロクラスタイルが使用されている（堀木ほか1994）ほか、宮山遺跡周辺に位置する野々田遺跡や中山遺跡など、縄文時代の遺跡からもハイアロクラスタイルを用いた石斧およびその未成品が出土することから、同石材の利用は縄文時代にまで遡るのは明らかである。

しかし宮山遺跡では、縄文晩期を中心とした住居跡群が確認されたB地区からは、石斧の未成品はおろか製作段階の剥片なども含めて、ほとんど出土していない。

さらに弥生前期～中期前半の状況を考えるために、三雲町中ノ庄遺跡を探り上げたい。中ノ庄遺跡は、津市の南に位置し、三渡川下流の砂堆地帯に展開する遺跡で、宮山遺跡とは直線距離にして55kmほど離れ、伊勢平野で最も早く遠賀川文化が定着したとされるところである（谷本1972）。

遺跡は、弥生時代前期中段階から中期前半にかけての遺構・遺物がみられ、若干の磨製石斧も出土している。伐採斧と考えられるものはいずれも横断面が偏平で、大型蛤刃石斧とは形態的に隔たりが大きく、むしろ縄文時代のそれに近い。しかしながら、石斧石材にはハイアロクラスタイルが含まれている。

中ノ庄遺跡のハイアロクラスタイル製石斧は、残念ながら前期に遡るものか中期前半のものかの区別ができるない。しかし、宮山遺跡では生産が開始される以前にはなるが、弥生中期前半にはハイアロクラスタイル製の石斧は広範囲に広がっているとみてよさそうである。

また、四日市市の大谷遺跡や永井遺跡の磨製石斧は、前期に属する可能性があり、しかもハイアロクラスタイルが使用されているが、宮山遺跡とは流域が異なるといえ、基本的には大谷・永井の両遺跡で石斧石材を求めれば、最も近いのは鈴鹿山麓ということになり、ハイアロクラスタイル製石斧の遠隔地への供給例とはみなし難い。

原石の限定的な産出に比して、製品である磨製石

斧の広範囲な分布は、もちろん石材が伐採斧用として優秀であったことに起因するであろうが、消費地である集落遺跡で原石や剝離成形段階の石屑がみられないという点からすると、原石を直接採集地より集落へ持ち込むことより、宮山遺跡のような製作遺跡の介在が必須となり、やはり分業および流通体制の充実がその背景にあることになる。

以上のことを考え合わせると、少なくとも当地域の磨製石斧の場合、これを集中生産し、遠隔地の遺跡へ供給するという流通のシステムは、縄文晩期までは確立しておらず、確実には弥生中期中葉、可能性として弥生中期前半には機能していたと考えたい。

宮山遺跡で製作された石斧は、眼下に流れる員弁川を利用し、運搬されたと考えるのが妥当であるが、宮山遺跡が作業所的なムラとすれば、製品を一旦集積し、各地に配送するおそらく拠点的な集落遺跡の存在も考える必要がある。員弁川下流域（現桑名市周辺）にその候補が求められるが、西金井遺跡など若干の弥生中期の遺跡は存在するものの、現時点では拠点的な集落とまでは認識され難く、中流域も視野に入れて今後の発見を待つか、あるいは流域を異なる集落遺跡がこの役割を担っていた可能性を考えるかは、課題として念頭に置いておきたい。

弥生中期段階における石器生産の専業化は、北部九州では今山遺跡の石斧や立岩遺跡の石包丁の広範囲な流通を根底に据えて古くから論じられていている。とくに下条信行氏の詳細な論究は当時の分業体制や流通構造に迫り、北部九州の地域性を明確にした（下条1975・1983）。しかし他地域での検討にはこれまで資料的な制約も大きかったが、こうした問題を議論することができる遺跡が東海地方でも発見された意義は大きい。

参考文献

- 石黒立人(1997)「手工業生産と弥生社会をめぐるラフ・スケッチ」『考古学フォーラム』8
国立歴史民俗博物館(1996)『農耕開始期の石器組成1 近畿(大阪・兵庫)・中国・四国』
酒井龍一(1986)「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財学報』第4集。
下条信行(1975)「北九州における弥生時代の石器生産」『考古学研究』第22卷第1号

下条信行（1983）『弥生時代石器生産体制の評価』『古代学
遺論』

谷本綱次（1972）『中ノ庄遺跡発掘調査報告』

堀木真美子ほか（1994）『朝日遺跡の弥生時代の石器をめぐら
て』『朝日遺跡V（土器編・総論編）』

報告書抄録

ふりがな	みややまいせき						
書名	宮山遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	186-2						
編著者名	竹内英昭						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
宮山遺跡	員弁郡大安町 片瀬字宮山	243230	35° 7' 20"	136° 32' 00"	19950508 / 19960118	12,260	一般国道475号 東海環状自動車 道建設に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宮山遺跡	集落跡	縄文時代	平地住居跡 土器棺墓	縄文土器・石器・石錐	石斧製作遺跡		
		弥生時代	豊穴住居跡 掘立柱建物	弥生土器・石斧未成 品・石斧製作工具類			
	墳墓		方形周溝墓 前方後方形墳丘墓	弥生土器 土師器			

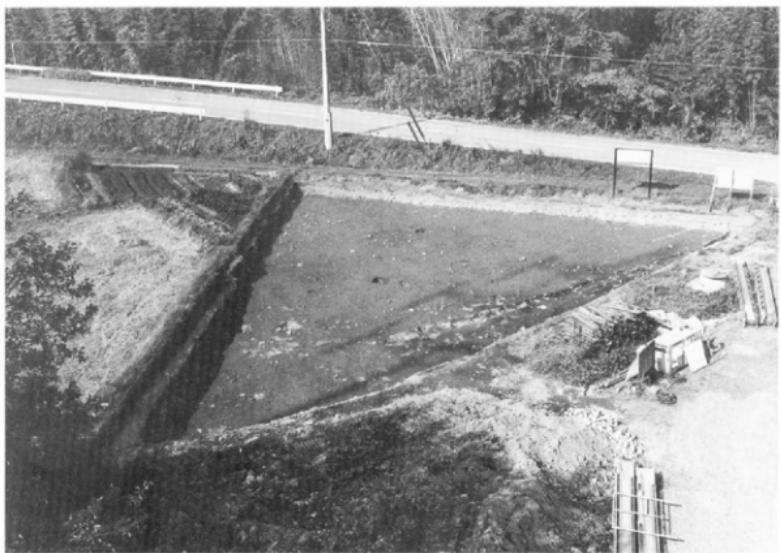
図版



宮山遺跡遠景（南から）



A地区全景



A地区全景（南から）

図版 3



B地区全景



B地区全景（北西から）



B地区住居跡 S Z 36（南から）



B地区住居跡 S Z 36炉跡

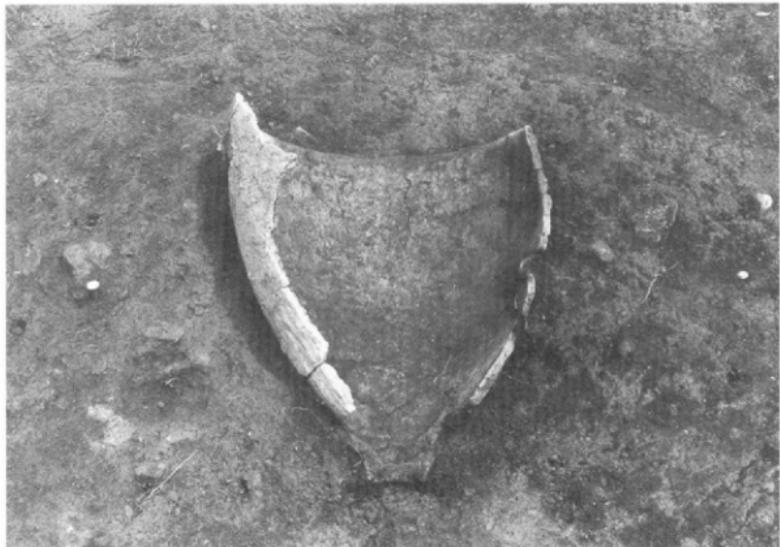
図版 5



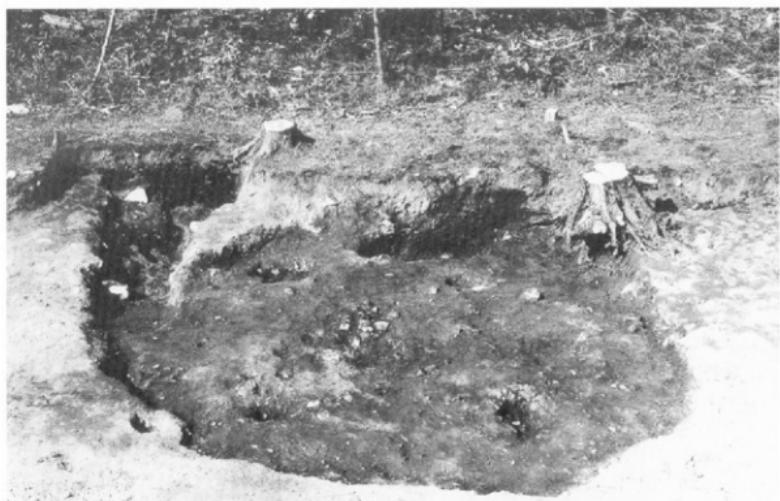
B地区住居跡群（南東から）



B地区住居跡 S Z 38（南西から）



B地区土器棺墓SK 18（南から）



B地区竪穴住居跡SH1（南西から）

図版 7



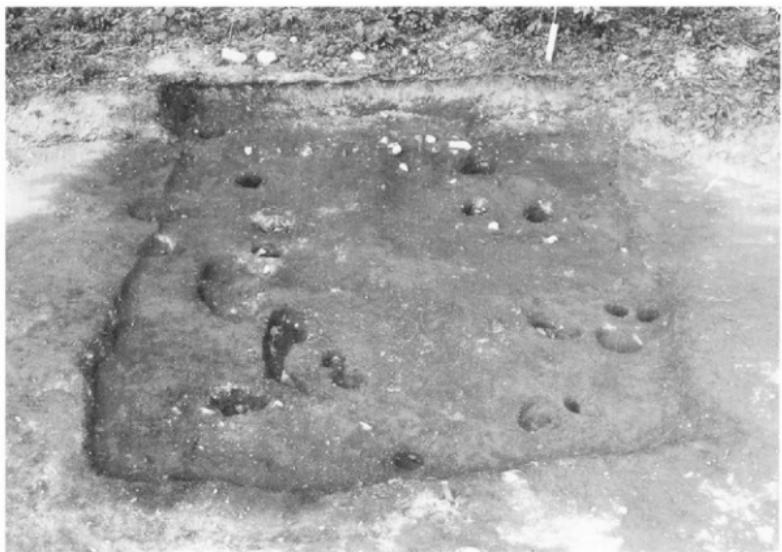
C地区全景



C地区全景（北から）

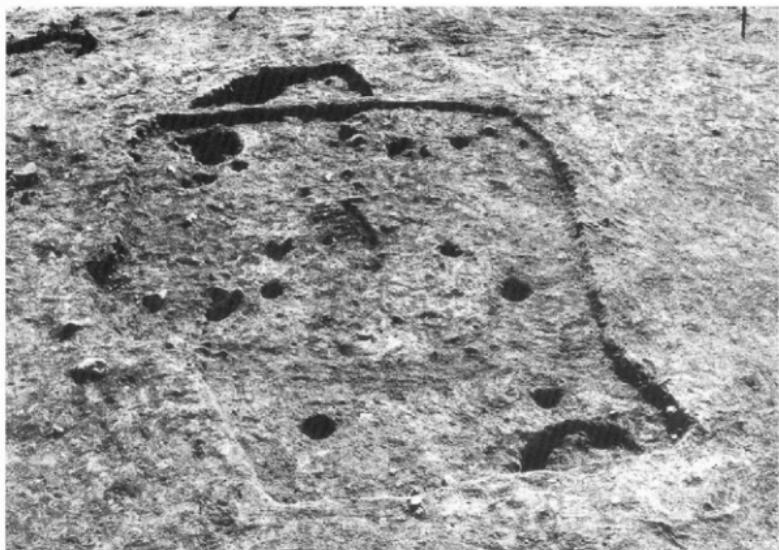


B・C地区を望む（南東から）



C地区竪穴住居跡 SH2（南東から）

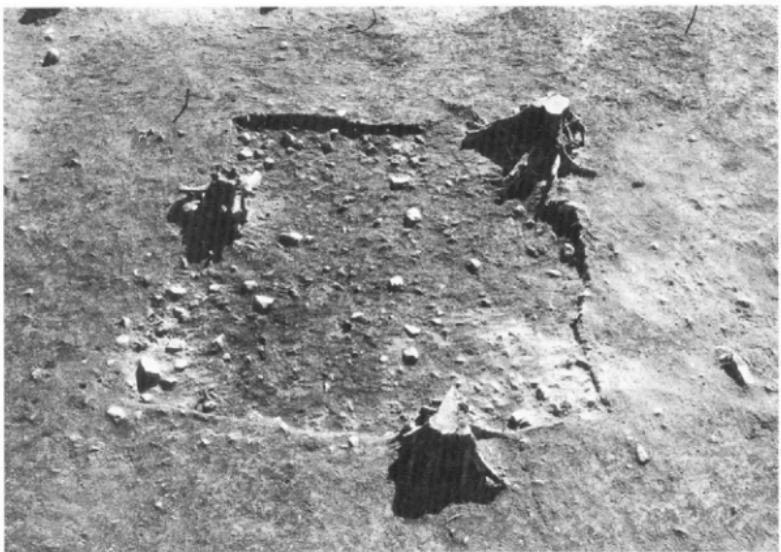
図版 9



C地区堅穴住居跡 SH3・4（北西から）



C地区堅穴住居跡 SH5・6（北西から）

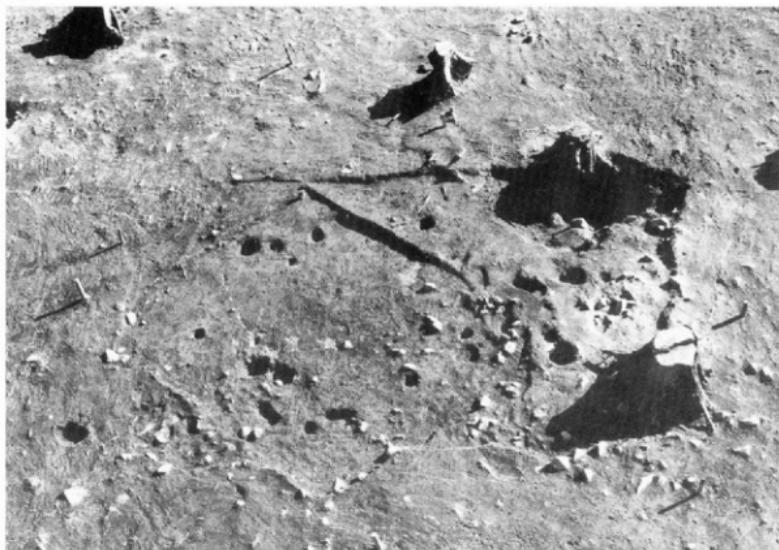


C 地区竪穴住居跡 S H7（北西から）



C 地区竪穴住居跡 S H8（南東から）

図版11



C地区堅穴住居跡 SH9・10（北から）



C地区堅穴住居跡 SH11（東から）



C 地区竪穴住居跡 S H12（北西から）



C 地区竪穴住居跡 S H13（南西から）

図版13



C地区掘立柱建物S B 14（南東から）



C地区掘立柱建物S B 15（南西から）



C地区掘立柱建物SB 16(北東から)



C地区住居跡SZ 40(南東から)

図版15



D地区全景



D地区全景（南から）

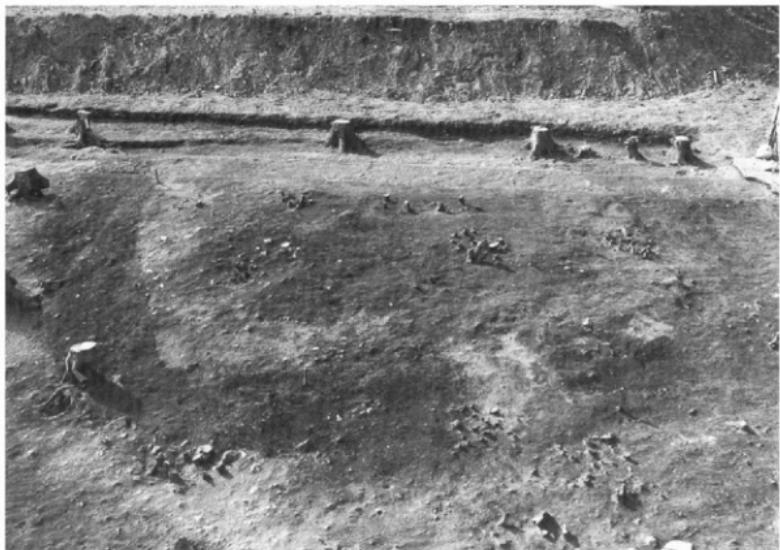


E地区遠景（西から）



E地区全景

図版17



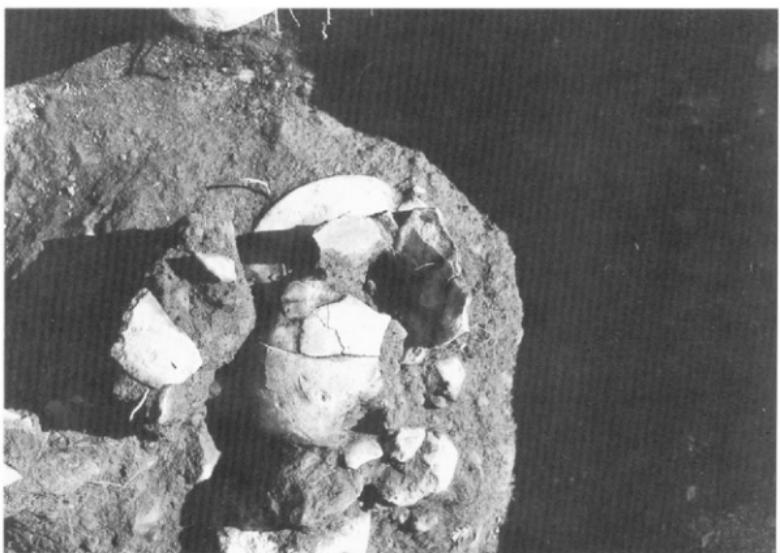
E地区方形周溝墓S X 19検出状況（東から）



E地区方形周溝墓S X 19（東から）



E地区方形周溝墓 S X 19（西から）



E地区方形周溝墓 S X 19周溝内土器出土状況

図版 19



E 地区前方後方形墳丘墓 S X 20 (南西から)



E 地区前方後方形墳丘墓 S X 20 (西から)



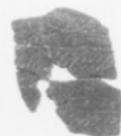
3



1



8



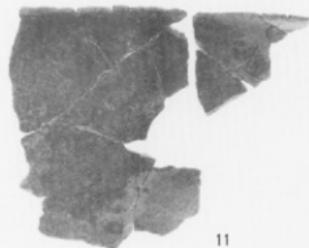
15



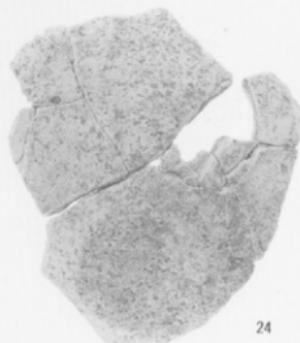
10



17



11



24



26



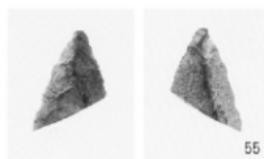
27



12



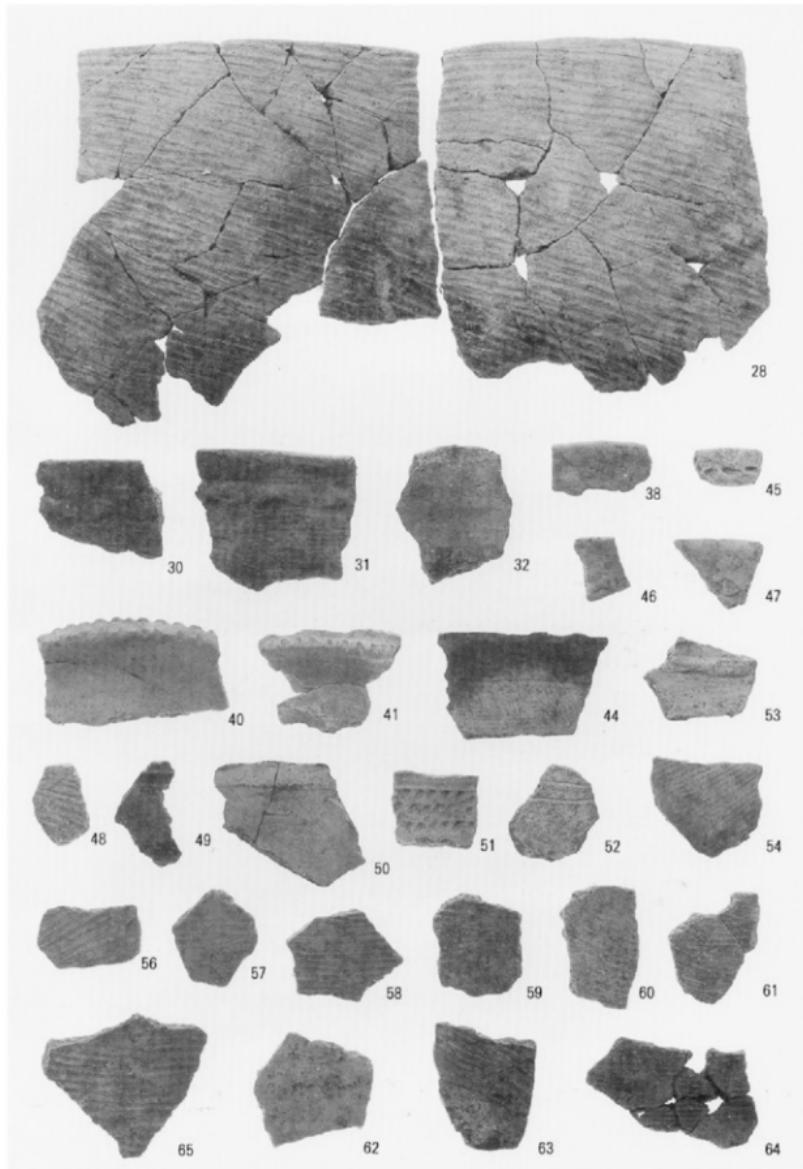
13



55



32



B 地区出土遗物 (2)

图版23



106

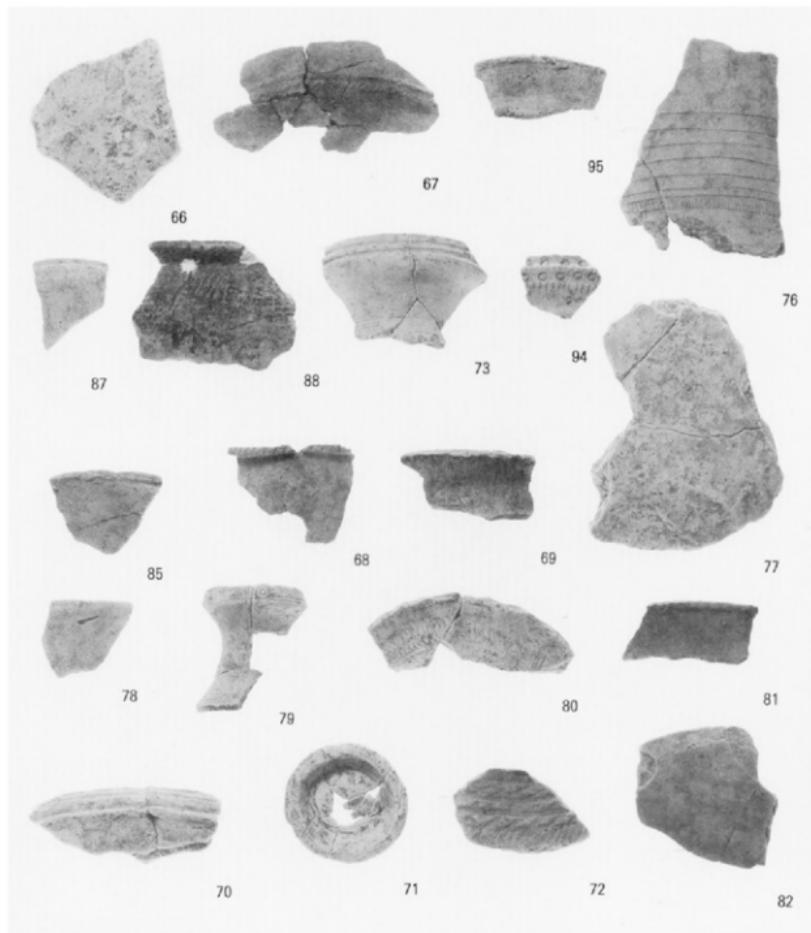


86

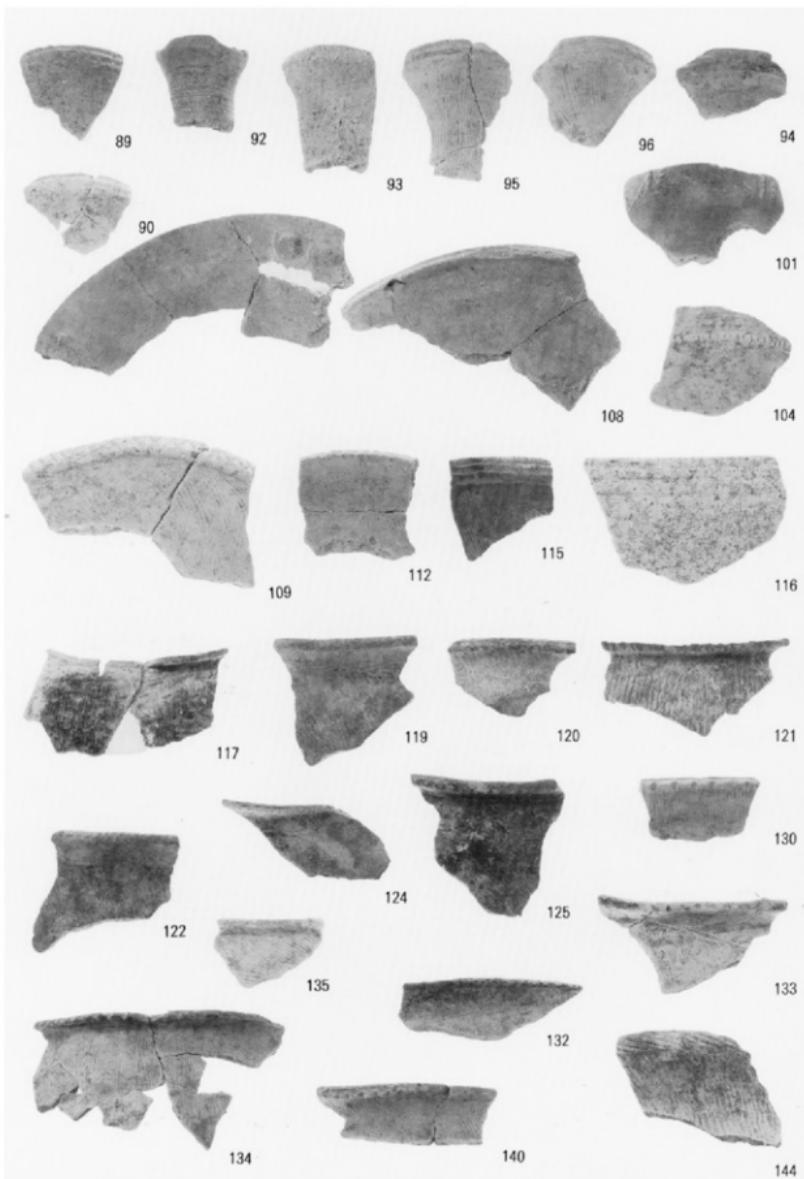


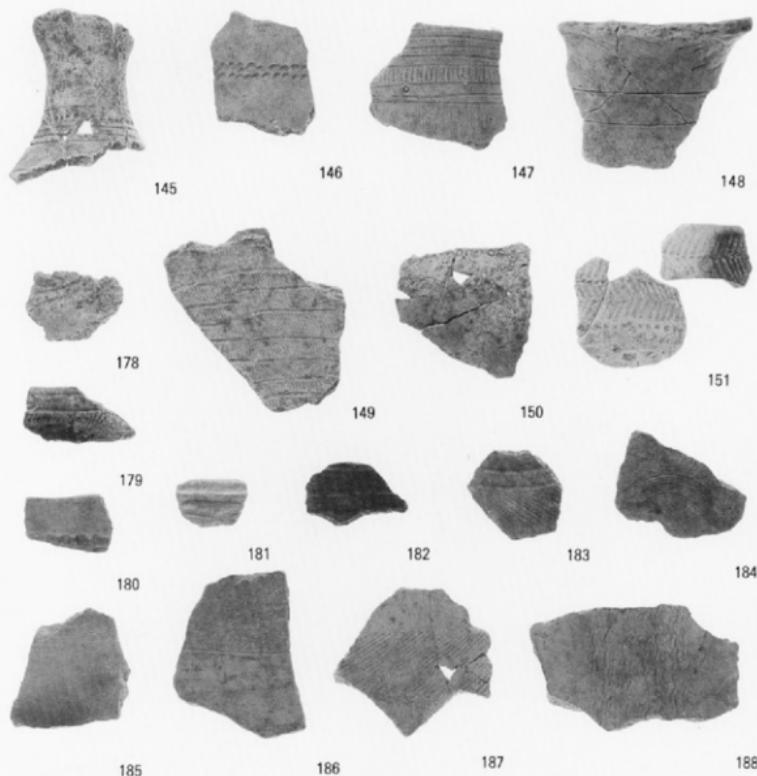
83

C地区出土遗物（1）



C地区出土遺物(2)

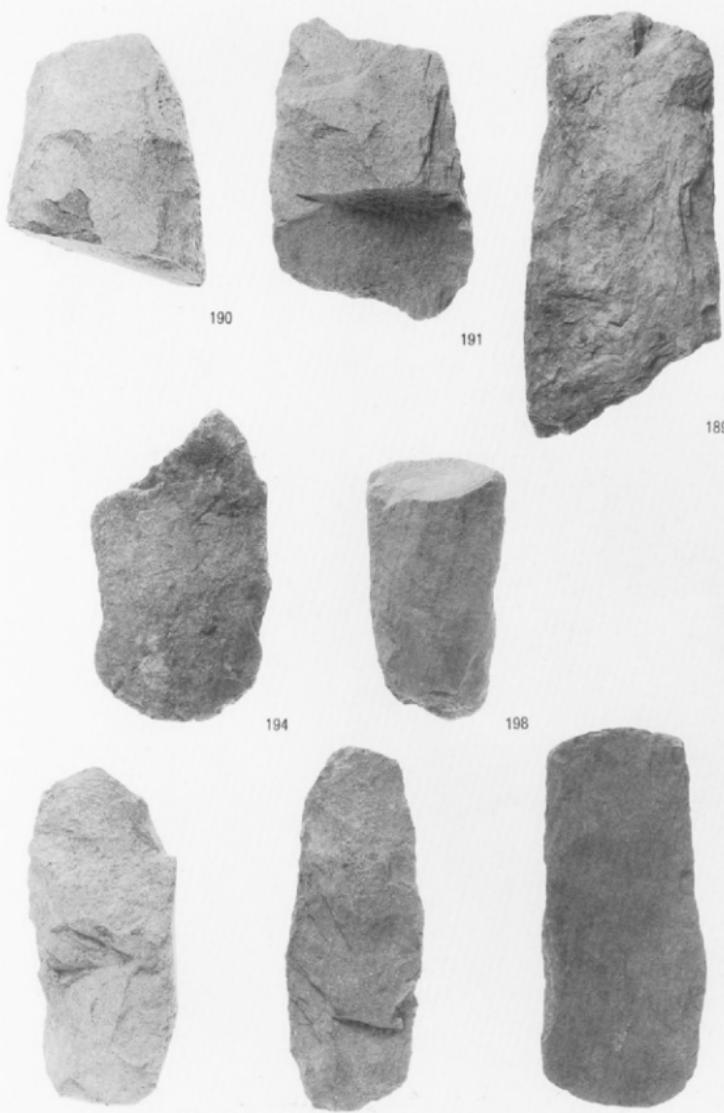




C 地區出土遺物 (4)



C地区出土遺物（5-1）



C地区出土遗物 (5-2)

图版29



201



196



205



202



200



197



199

C地区出土遗物 (6-1)



201



196



205



202



200



197



199

図版31



203



204



208



210



207



212

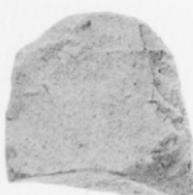


206



209

C地区出土遺物 (7-1)



203



204



208



210



207



212



206



209



211



223



217



220



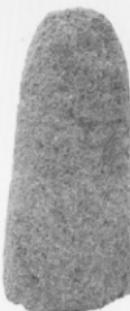
215



221



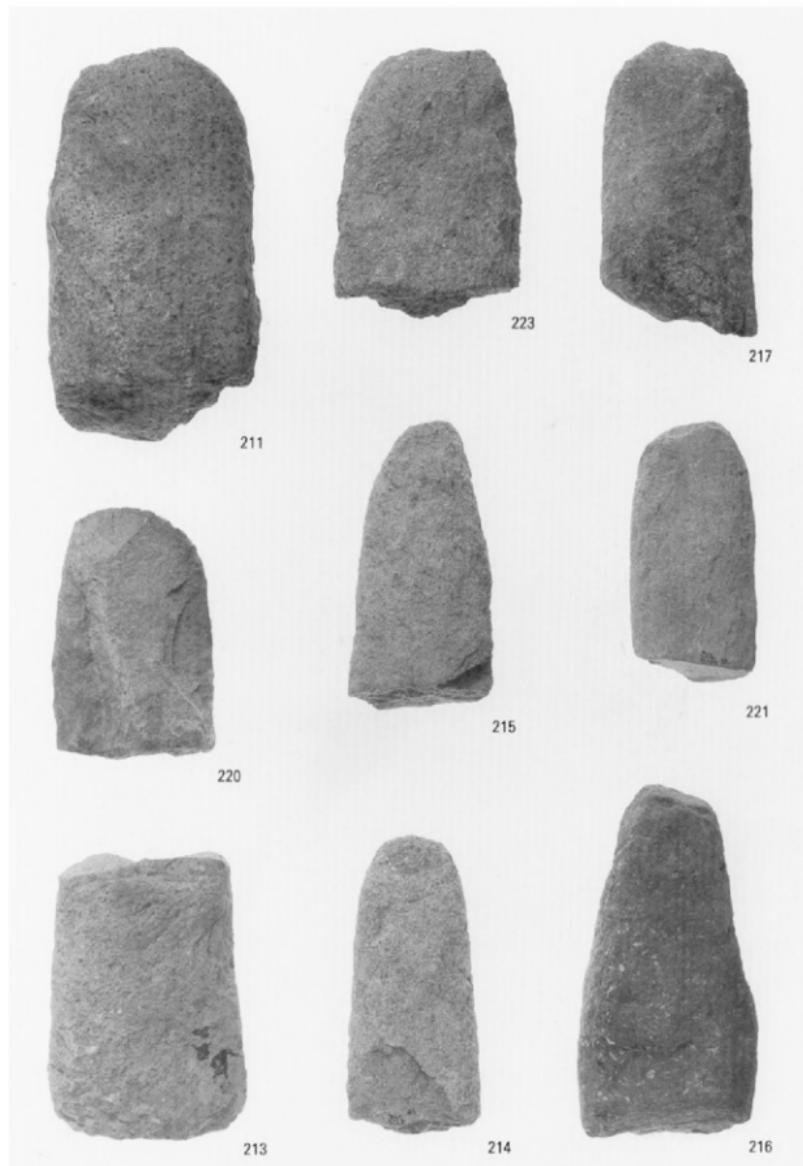
213



214



216



C地区出土遗物 (8-2)



224



219



225



229



226



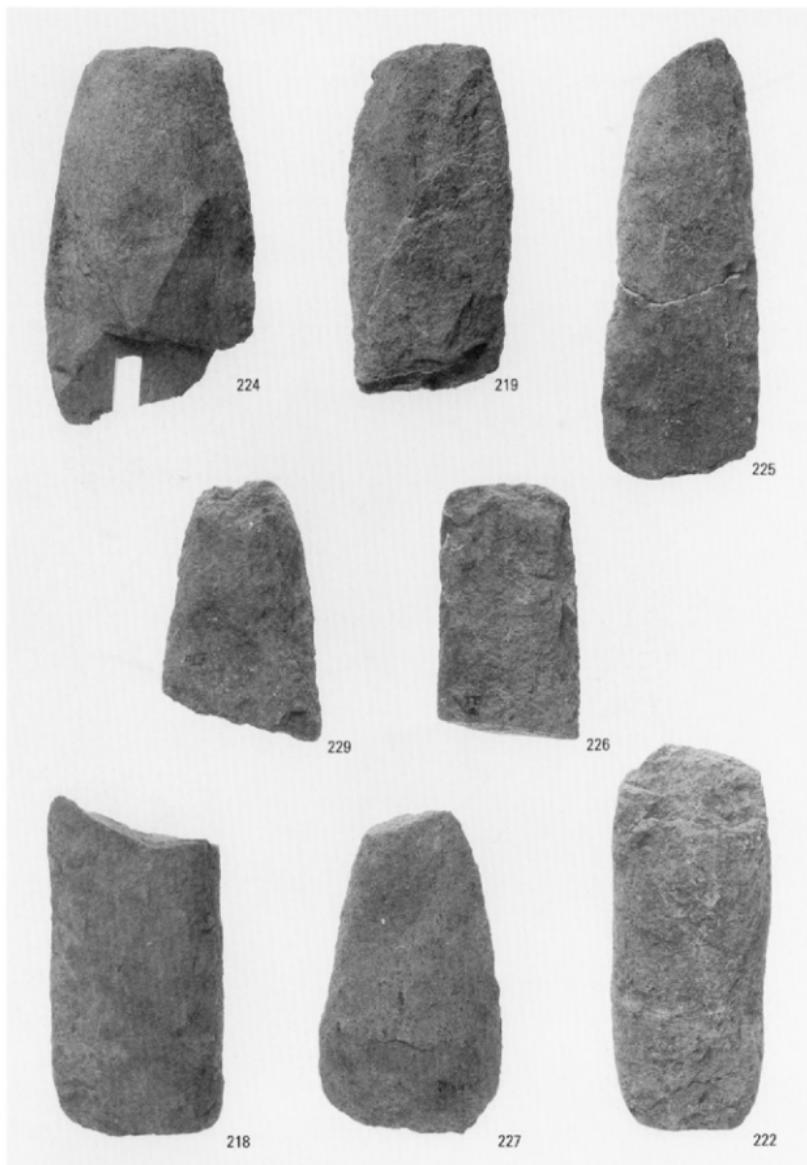
218



227



222



C 地区出土遗物 (9-2)



228



235



230



233



231



232



234



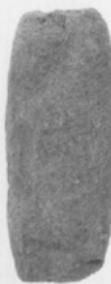
228



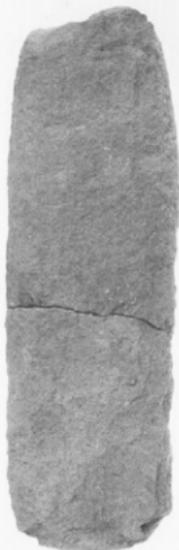
235



230



233



231



232



234



236



237



239



238



240



241



242



243



244



236



237



239



238



240



241



242

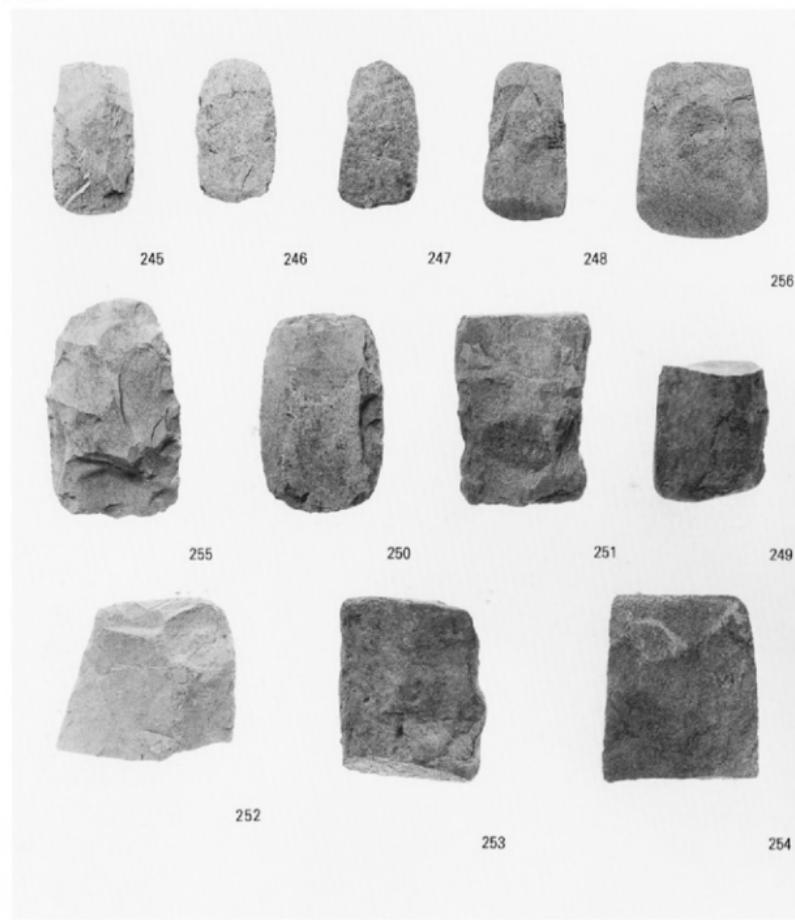


243



244

图版41



C地区出土遗物 (12-1)



245

246

247

248

249



249

250

251



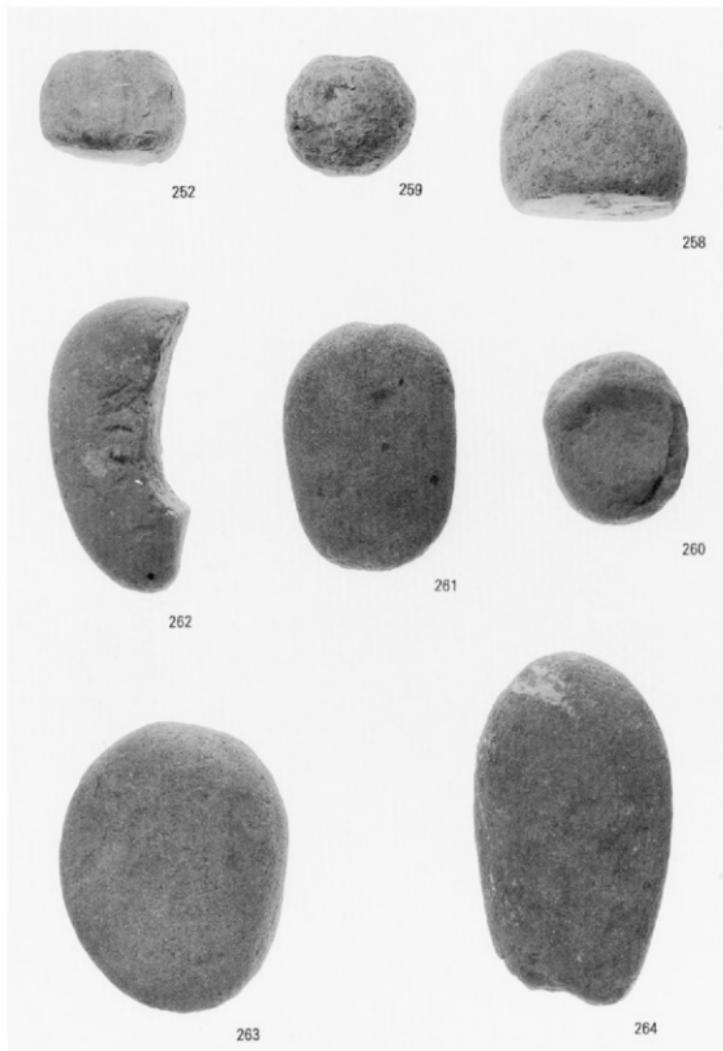
252

253

254

C 地区出土遗物 (12-2)

图版43



C地区出土遗物 (13)



265



266



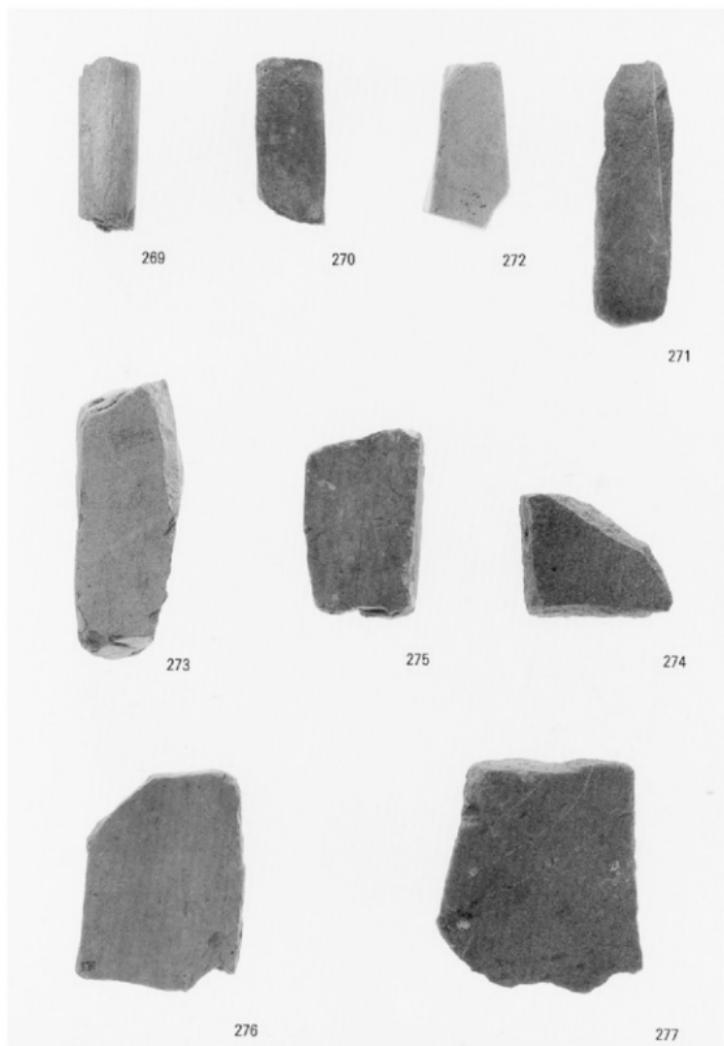
267



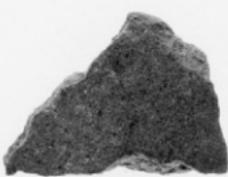
268

C 地区出土遗物 (14)

图版45



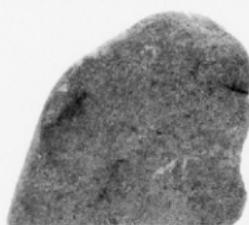
C地区出土遗物 (15)



278



282



279



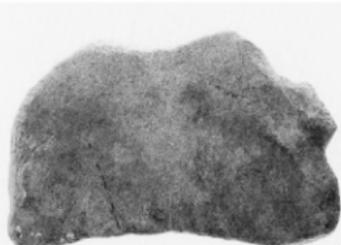
283



280



284



281

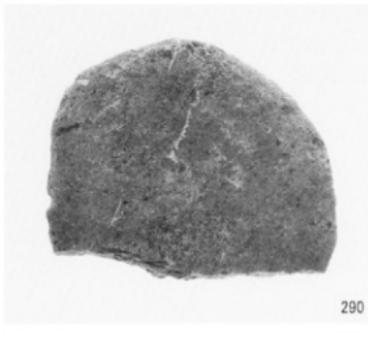


C 地区出土遺物 (16)

图版47



286



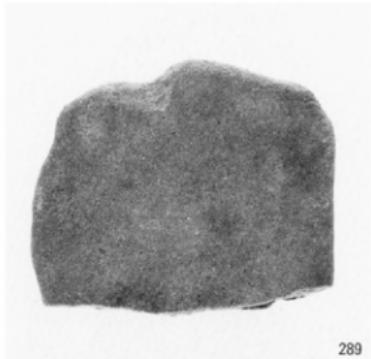
290



287



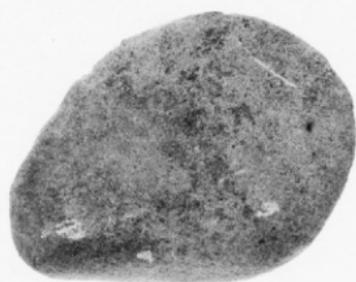
288



289



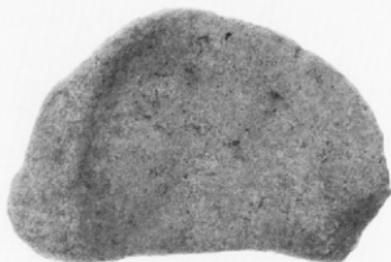
291



292



295



293



294



296



297



299



298

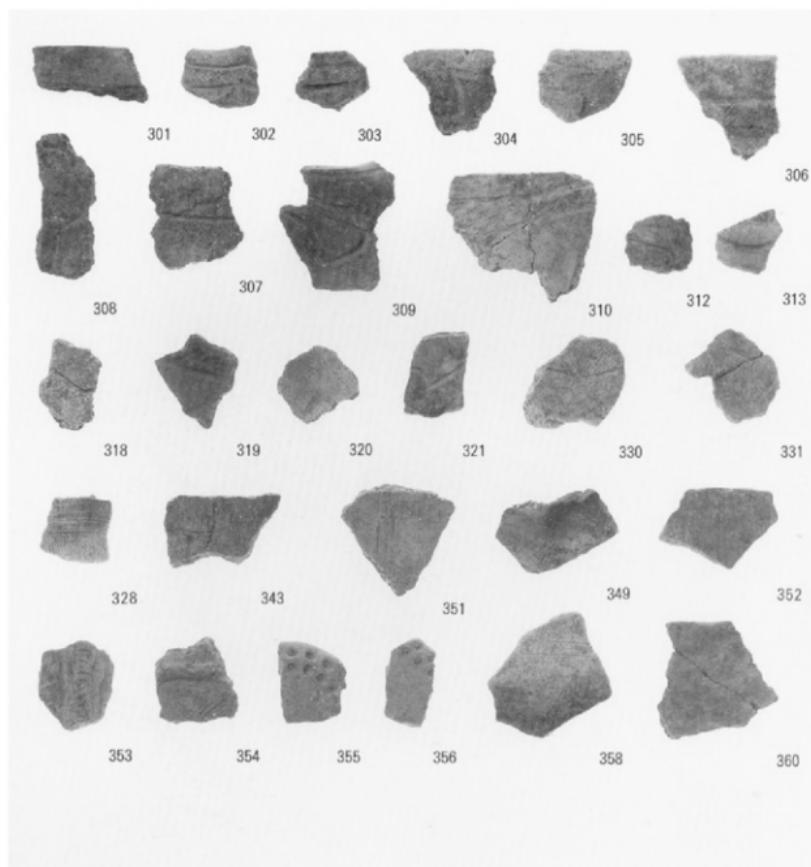


300

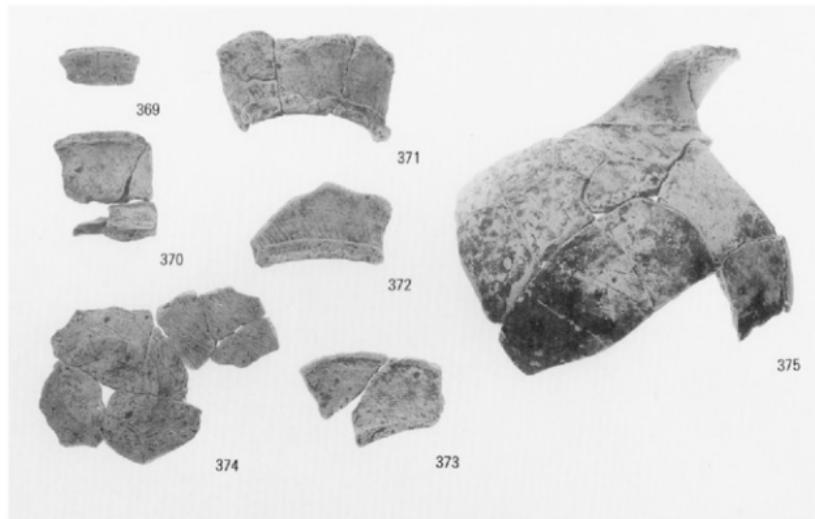
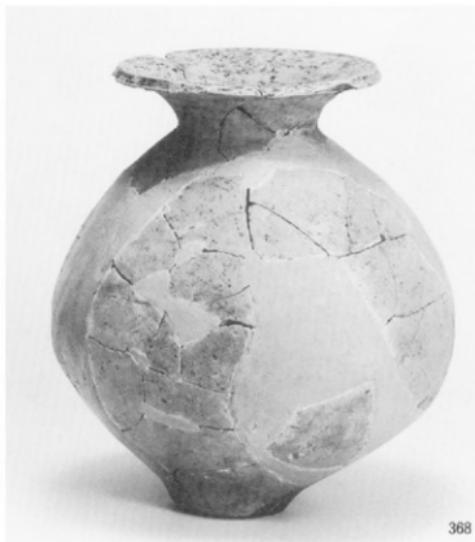


C 地区出土石屑片

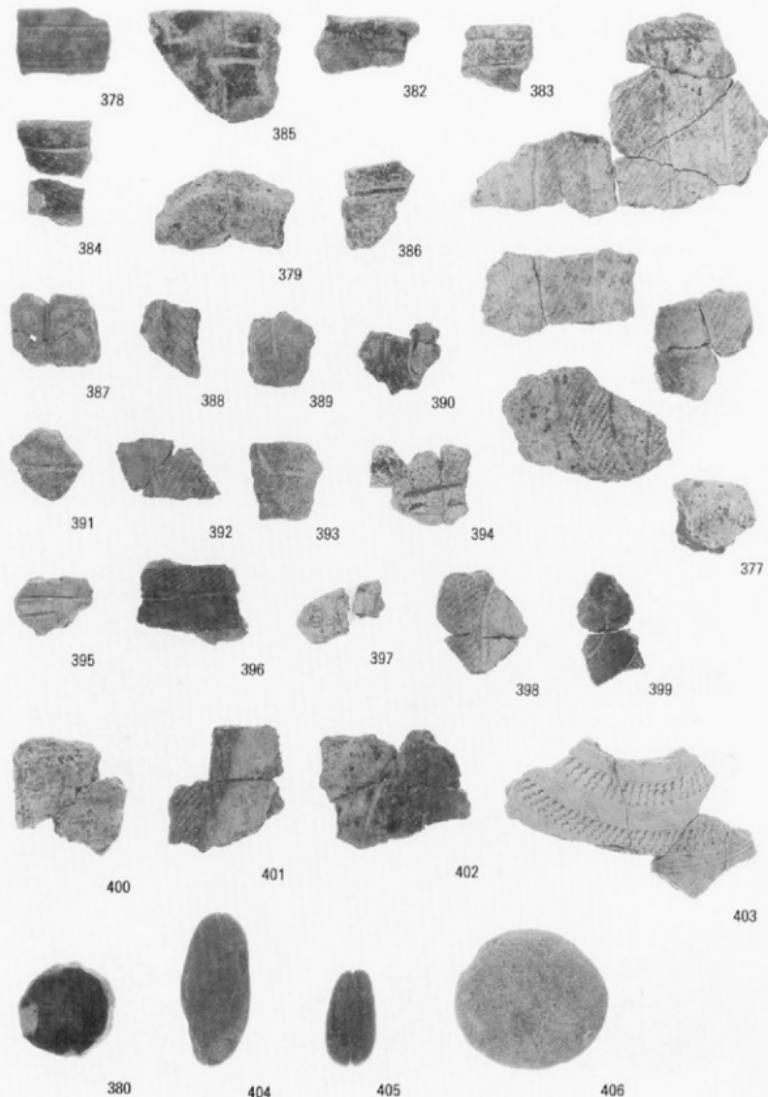
图版 51



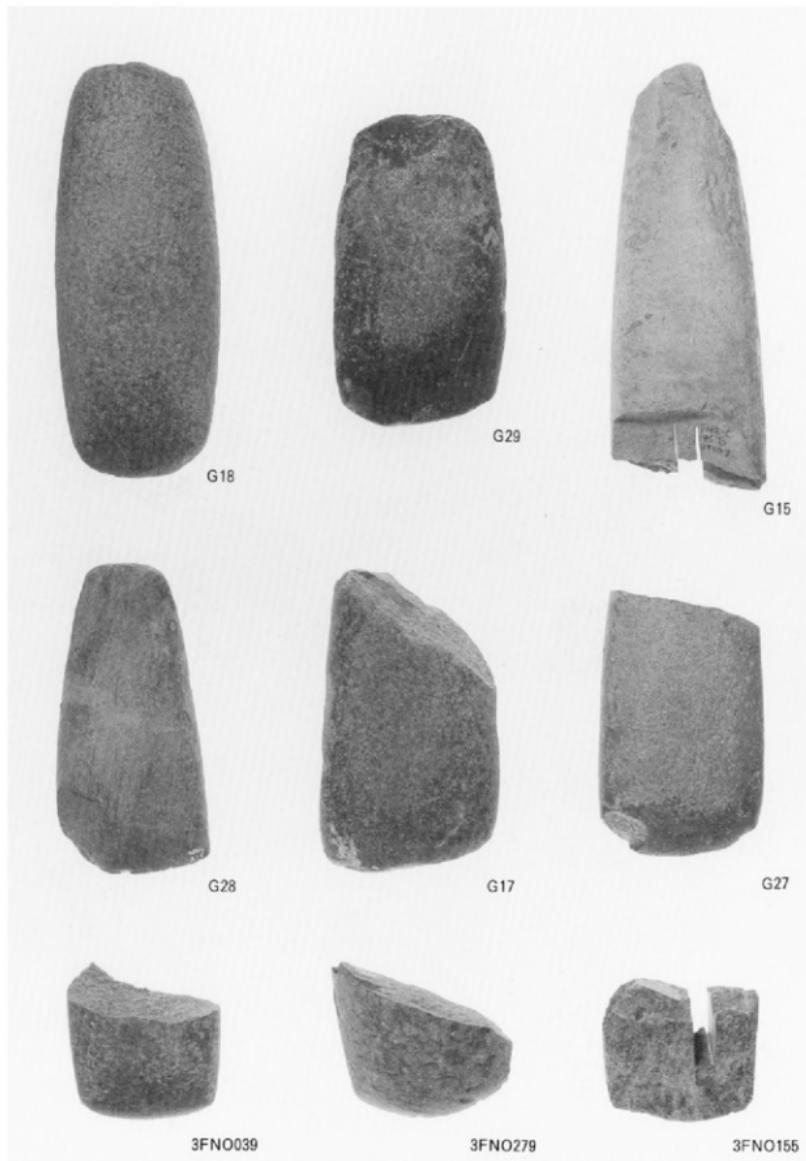
D 地区出土遗物



E 地区出土遗物 (1)



E 地区出土遗物 (2)



納所遺跡出土石斧（1）



G33



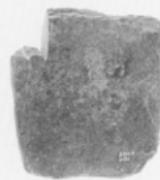
G30



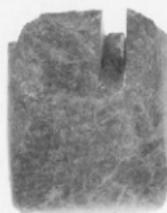
G14



G34



3FNO081



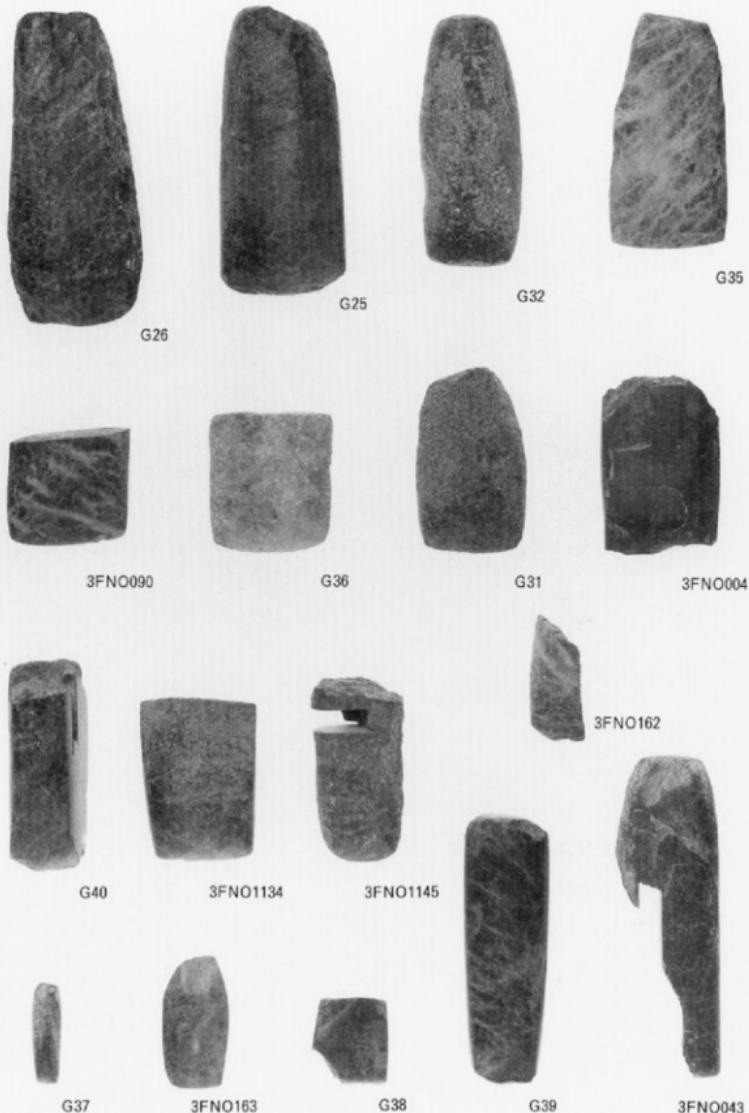
G16



3FNO248



G13



納所遺跡出土石斧 (3)

平成11(1999)年3月に刊行されたものとともに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

一般国道475号東海環状自動車道

宮山遺跡

発掘調査報告

1999

編集 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
